特231
401

救世軍問答

解　註

救世軍本營

始

特231
401

救世軍問答

解註

救世軍本營

序文

此の書は救世軍が信じ且つ教ふる所の、聖書の主なる眞理を説明するに當り、「問答」を教ふる教師達の熱望に基き、彼らを助けんがため發行されたものである。

青少年の時代に此らの眞理を賢く把握するは、救世軍兵士の將來に於て、測り得ぬ價値があり、また神とその人類に對する慈悲深き計畫及び目的に就いて起る疑惑の、彼らに襲ひ來るを防ぎ、且つ勇氣を以て、イエス・キリストに於ける眞理を大膽に證せしむる助となる。

玆に注意すべきは、此らの重要なる眞理が、單に知識的にわかるのみで滿足してはならぬ事である。それ故、「問答」を教へる者の大切なる責任は、青少年の心と生活とに達するよう教へ、以て「救に至らしむる智慧」を獲得させる事である。

此の書は又、小隊候補生用でもある。即ち彼らが後に學ばんとする「救世軍教理便覽」の豫備知識を得るためのものである。

青年部曹長及び他の下士官に對する注意事項

第一、この「問答」には、救世軍が固く信ずる重要な眞理が記されてある。この眞理を賢く教へる事は甚だ容易な事でない。それ故、忍耐、深慮及び祈深い準備を要するは言を俟たぬ。

第二、この書中にある註解は、問答の全體に亘つて說明したものではないが、教を受けんとする各種青少年の認識力に應じ、眞理を悟り獲得せしめんとするに際し、助を與へるものである。

第三、この註解の中には、幾らかの適切な實際的教訓が記されてある。注意深く且つ熱心な教師達は、眞理を教へつつ、屢々、青少年の要求に應じて、その教訓を添へる事が出來やう。

第四、本書には例話も加へあれど、指導者は他から適切なる話を探し來り、學課を明瞭になすよう努力せねばならぬ。

第五、次に示す注意箇條は、問答を教ふる者にとりて有要であらう。

一、前以て問答を十分讀みこなして置くなら、實地に教へる場合、本を見なくてすむ。

二、生徒達を勵まして、前の週に「問答」の答の部を記憶せしめること。

三、いづれも學課を始める前、前週まなびたる所を、記憶を辿つて復習すること。

四、その日の問答の部を、續けさまに二三回くりかへす。之を實行するには色々の方法でやつて見るがよい。

既に答ふる所を知れる生徒に、聲高く繰返へさせ、他の者には星取カードのを讀みつつ、後にしたがはせる。或は定めてある生徒達に、その部分を讀ませ、後の者は皆で一緒に聲を合せて續むことも出來る。時には二三分間、答の所を默讀させるのもよいであらう。

五、教師達は此の註解の如き助となる書を他にも見出し、教ふべき學課に適當する例話、說明、解釋などを自分で用意すること。

六、最後に學びたる箇所を今一度復習し、諳記を以てその所を言ひ得るまでに、生徒に徹底せしめること。

第六、屢々其の日の問答は、日曜日の朝ひらかれる聖別會に於て、通例、青年のお話として交互に讀み、生徒達は其の答を讀むのもよい。之は其の儘、青年部年會に於ても應用出來る。

第七、問答試驗は時を定め、適宜に行はれ、かつ其の證明書が渡されねばならぬ。之には大人部の兵士にして、適當なる者を選び、前以て扱方を教へ、生徒達を個人的に試驗せしめることも時々は出來得るであらう。

略符號

舊は、舊約聖書。
新は、新約聖書。
例は、實例。

青年部曹長及び他の下士官に對する注意事項

教訓は、實際的教訓。
例へば、例話の略號である。また註解中、括弧の施してある所は、教師達の爲である。

小隊候補生の爲に

此の問答註解の第一編を十分よく讀むことは、貴下が將來「救世軍教理便覽」を學ばるるに甚だよき助となる。成程その言通りに記憶するは不可能かも知れぬが、之を學ばんとする努力は、その眞理を悟らせ、以て貴下が將來の日常生活、行爲及び救世軍に於ける奉仕に大なる利益を齎すに至るであらう。

目次

第一編

之は年長者及び小隊候補生用である。

第一章　靈　魂……一頁
第二章　神……七
第三章　罪……二二
第四章　イエス・キリスト……三二
第五章　聖　靈……四八
第六章　救……五六
第七章　救はれて後の生涯……六七
第八章　祈……七七
第九章　聖　書……九一
第十章　神の誡命……一〇一
第十一章　聖　潔……一二二
第十二章　最後の事件……一二七
第十三章　救世軍々人……一三八

第二編

之は十歳以下の年少者用である。

第一章　神……一五八
第二章　世界と私共……一六二
第三章　罪……一六六
第四章　神の子イエス……一七一
第五章　救……一七九
第六章　神を喜ばす生涯……一八三
第七章　聖　書……一九五
第八章　最後の事件……一九八
第九章　救世軍と子供……二〇二

救世軍問答註解

第一編

（年長者及び小隊候補生用）

第一章　靈　魂

一、神様は何故、人間をお造りになりましたか。

私共が神様を知つて愛し、又お仕へし、此の世では出來る限りよい事をなし、天國では神様といつまでも御一緒に住むためであります。

此の答は私共の生れた理由、又は神のお互に對する目的を示す。人生に於ける本當の成功は、神の榮光を顯す爲に生きる、といふ眞の目的を我がものとすることである。

「われ彼らを我が榮光のために創造せり」（イザ四三・七）

「何事をなすにも凡て神の榮光を顯すやうに爲せ」（コリ前一〇・三一）（またマタ六・三三、ヨハ壹二・一七、默四・一一を見よ）

善良なる親の子は、兩親の望む所を行ひ、その希ふ所を受繼ぎ、また親の如く成長する事によつて、兩親を尊敬して居る事を示すものである。斯の如く私共も亦、神を崇めねばならぬ。

(一)試煉多き現在に在つても、祝福みてる將來に於ても、神の友となり、其の恩寵を受くるといふ眞の幸福を保つことによりて。

(二)神を喜び其の榮光を顯すことによりて。(ゼパ三・一七)

魚は水中にあつて生き、繁殖する。之を離れては死ぬる外なき如く、私共も亦、神によつて生き、彼を離れては悲慘、失望及び失敗あるのみで、恐らく「われ生れざりし方よかりし者を」といふに至るであらう。

ジエンニー・リンドは第十九世紀に於ける有名な歌人で、スエーデン生れであるが、彼が救はれる前の經驗を其の手蹟帳に書いた所は次の如し。

眞の休息が心に與へられん事を求めて、世の善き凡てのものに行きたれど得ず、相變らず滿されずして殘さる。遂に神を呼び求め、彼の内に我が心が憩ふまでは、眞の安心を我がものにする事が出來なかつた。

後年、彼はイエスの救を見出し、心から滿足したので、以後、彼の御爲ならでは、何も歌はないと決心したといふ。

(教訓)己を喜ばすに非ず、神を喜ばせ奉ること、之を貴下の生涯に於ける唯一の目的とせよ。

二、私共はどんな所が、神樣に似てゐますか。

私共は神樣を知りて愛し、物事を考へ、事理を悟り、また善惡どちらでも撰ぶことの出來る不滅の靈を有つて居る所が、神樣に似てゐます。

三、不滅の靈とはどういふ事ですか。

不滅の靈とは、いつまでも死ぬことのない靈魂といふことです。

人間は神の創造物中、最後の最も高貴なる者で、他の動物と同じ體を有する他に、一層貴き性質、即ち神の息を吹入れられ、彼に似たるものとせられし靈魂を所有してゐる。

「エホバ神、土の塵を以て人(肉體)を造り、生氣を其鼻に噓入たまへり、人即ち生靈となりぬ」(創二・七)(創一・二六——二八を見よ)

私共の靈的性質が、他の動物より優る點につき注意してみよ。(お互と犬と比較しては如何)すれば私共は、

一、偉大にして靈なる神を知り、かつ彼と交ることが出來る。私の自體は、見たり聞たりする事によつて、地上の他の物と關係を有つ如く、私共の靈は又、祈や信仰によつて、肉眼に見えざる神に結び付くことが出來る。

二、人間の有する思考、推理及び言語などは、他の動物が有する最高の智力に遙か優つてゐる。成程、或る動物は數字の四まで數へることが出來る。しかし最も野蠻なる人々も尙、それよりは高等な理解力を有する。

三、人間は物事を識別する良心、善なり惡なりを選ぶ自由の意志を有する。

四、お互の靈魂は、肉體を離れて後、幸福或は不幸いづれかへ入り、尙も存在を續け、不滅なること。「而して塵は本の如くに土に歸り、靈魂はこれを賦けし神にかへるべし」(傳一二・七)(またマタ二五・四六を見よ)

(教訓)身體のために必要な注意を拂ふと共に、更に多くの注意を、その不滅なる靈魂のため拂はねばならぬ。

四、靈魂の價値が貴い事について、イエス樣は何とお敎になりましたか。

イエス様は「人、全世界を贏くとも、己が生命を損せば何の益あらんや、人その生命の代に何を與へんや」と申されました。（マル八・三六、三七）

この御言により、キリストは全世界も靈魂の貴さに比べれば、價値少きを敎へ給うた。百萬長者の財産も、偉大なる統治者の力も、また全世界に謳はるる名聲も、その生命と共に過ぎゆく。さり乍ら靈魂は永遠に滅びない。

（敎訓）貴下の靈魂は、全世界の一切を以て換えんとするも、尙貴きものたるを知れ。

五、私共の靈魂を失ふとは、どういふ意味ですか。

私共の靈魂を失ふとは、神様からの救を拒み、罪を犯すことを續けたる其の結果、神様から遠けられ、何時までも地獄に閉込められる事であります。

凡て何でも濫用するか、又は誤用し、その目的を果すに失敗したものは、通例、益を齎さずに害を及ぼし、失はれたものといひ得る。例へば、金錢の始末が惡ければ、何も買ふことが出來ず、種子が火に遭ふか、或は腐敗するまま棄てらるるか、又は無駄にせられた時間は、誰にも役に立たない。いづれも失はれたものといへる。

斯の如く、神の聖き御目的を故意に妨げ、（一の答を參照）また神聖な力を濫用する（二の答を參照）靈魂は、遂に滅亡と悲慘との中に失はれるのである。

（例）ジャックは不孝生のため病氣にかかつたが、醫師の治療を拒み、その結果、遂に死んだ。彼は自分の不心得から、遂に健康、有要、幸福及び其の生命までも失つたのである。

六、私共の靈魂は、どうして永遠に救はれますか。

神に身を獻げ、罪から救はれ、また日々眞の宗敎を敎へられて實行すれば、永遠に救はれます。

永遠に救はれるとは、天國にて永久に安らかある事を意味し、靈魂を失ふ事の反對である。この永遠の救を我がものとするため、私共は次の事を爲さればならぬ。

（一）正しき出發（答の前半、即ち「神に身を獻げ」から「罪かる救はれ」まで）

（二）正しき繼續（答の後半「また日々」から終まで）「終まで耐へ忍ぶ者は救はるべし」（マタ二四・一三）

青少年は將來、社會に出て有要な働をするため、學校で學び其の準備をせればならぬ。その如く私共はキリストの一學生として、死後の生活のため準備せればならぬ。このため次の事をなす必要あり、

（一）キリストの學校に入り、彼の指導の下に自分を置くこと。

（二）日毎に親切にして忍耐あり、かつ熟練な敎師なるキリストから學ぶこと。

（敎訓）例へ其の學課がむづかしくても、或は失敗する如きことがあつても、中途で止めてはならぬ。その都度キリストの助を求めよ。もし未だ彼の學校に入學して居ない者があるなら、今直に入校せればならぬ。

七、眞の宗敎とは何ですか。

眞の宗敎とは、神様を愛し、喜んで交り、また人々を善良幸福にするため、全力を

靈すことであります。

眞の宗教は、

(一)神が心を更へ給うた時、その人の内に始まる。

(二)次に之が外部に現れ、職分、新生、新に示され、事實その全生活が神を喜ばせ奉るものとなる。

(ミカ六・八及びルカ一〇・二五——二八を見よ)

眞の宗教生活は、最善にして又最も幸福なる生涯で、これは神の榮光をあげ、他の人々を祝福し、自分自らには盡きざる滿足がある。

ブレンゲル中將は米國の人であり、多くの人を救に導き、また祝福した方であるが、その七十一歳の時、次の如く書かれた。「老年に及んだ紳士中、私ほど幸福と滿足を覺えて居る人はないかと思ふ。成程、私は巧にして苦き誘惑、不健康、刺すが如き苦痛、愛する者を失うて一人のこされたる淋しみ等のため惱んだには相違ない。併し、いと有難き主との靈交、並に戰友知己との交際、救靈の喜、及び廣き奉仕の機會を有した。それで前述の如き骨折、悲しみ、苦痛及び險しき人生の旅路などは夢の如く感ぜらるるにすぎぬ」と。

この他にも模範とすべき人々は多い。リビングストン、メリー・スレッサー、リンコルン、ノックス、ルーテル、ウイリアム・ブース及び夫人などは此の種の人物である。(若し出來れば、小隊内の模範的戰友、海外傳道にある戰友、或は自分の國に於ける、然るべき人物に言及するがよい)

(教訓)今、眞の宗教生活に入らんことを決めよ。

第二章　神

一、神様とは、どんな御方ですか。

神様は大なる獨立の存在者、永遠無窮の靈であり、人間の理解力に過ぎた驚くべき御方であります。

二、神様が獨立の存在者であるとは、どういふ意味ですか。

神様の生命と能力とが、御自身以外の何人にも、また何物にも左右されない御方であるとの事です。

靈なる神は肉眼に見ゆる姿を具へて居給はぬから、私共は目で見たり、耳で聞いたり、その他、肉體的感覺をもつて知ることは出來ない。しかし彼は正しく活きて存在し給ふ。それ故、私共は心で神を知り、之を愛し、彼に御話を申上げる事が出來、また其の祝福、御助、かつ御慰を悟ることも出來る。「神は靈なれば、拜する者も靈と眞となもつて拜すべきなり」(ヨハ四・二四)

神が無窮であるとは、際限をつける事が出來ぬとの意である。それで何人も彼の智慧、能力その他の屬性に就いて、その際限を究めることは出來ない。之に反して私共人間は、各方面に際限があるから、不完全にして、お

ぼろ氣にしか神を知ることが出來ない。

どうして小な蟻にして、お互人間を了解し得ようか。而も人間と神との差は、蟻に對する人間以上のものである。「その大なることは、尋れ知ることかたし」（詩一四五・三）

私共は生命その他多くの事に於て、食物や空氣、その他種々のものの助を借られねばならぬ。しかし神に於ては然らず、凡てのものより獨立自存し給ふ。それで神の御存在に助をなし得る者なく、その能力を增し、また彼の富、偉大などに加へ得るものはない。一切の存在物は神によつて存在し、萬物は彼に由つて保たれて居る。「彼は萬の物より先にあり、萬の物は彼によつて保つことを得るなり」（コロ一・一七）

三、神様が永遠の御方であるとは、どういふ意味ですか。

神様には初も、また終もないといふ事です。

永遠の存在、即ち初もなく又終もない生命といふ觀念は會得するに困難な神につける一面である。（何か輪の如きもの、或は循環するものを例にすれば助とならう）私共の靈魂は不滅である。（第一章の答三を見よ）しかし其の靈魂には初がある。けれども神のみは永遠の御方で在す。「永遠より永遠まで汝は神なり」（詩九〇・二）（敎訓）私共は神の極めて偉大なる事をみとめ、謙遜になつて彼を崇め、榮光を歸し奉り、また己を獻げて、何ら恐れず信頼せねばならぬ。

四、神様は何時も私共の間近に居られますか。

神様は何時でも、また何處にでも在すから、常に私共の間近に居られます。「エホバいひ給ふ我はただ近くにおいてのみ神たらんや、遠くに於ても神たるにあらずや」（エレ二三・二三）

私共は同時に二ケ所に居ることは出來ぬ。しかし神は何處にでも臨在し給ふ。それ故、同し時に凡ての所にある萬物に心をとめ、之に興味を有ち得給ふ。「エホバいひ給ふ、人われに見られざるやうに、密なる所に身を匿し得るか、エホバいひ給ふ、我は天地に充つるにあらずや」（エレ二三・二四）（また使徒一七・二七、二八及び箴一五・三を見よ）惡人は神を恐れ、その御前から脫れて身を匿さんとするも、之は不可能なことである。（例）アダムとエバ（創三・八、一〇）ヨナ（ヨナ一・三）若し彼にして逃げる代りに、神の御前に來て赦を求めるなら、必ずその心に「充足れる喜」（詩一六・一一）が來たであらう。（詩一三九・一――一二を讀み、また其の二三、二四兩節に當篏めよ）

五、神様の智慧は、如何に大なるものでせうか。

神様は過去の事も、現在の事も、また將來の事も、凡てを見、また御存知であります。

その理由は神が何處にも在す故に、凡ての事を悉く知つて居給ふからである。人間は自然の神秘を新に發見するが、それとても神には既に、完全に知られて居る事にすぎない。「なんぢ雲の平衡、知識の全き者の奇妙き工作を知るや」（ヨブ三七・一六）

神は私共の言語や動作を知り給ふと同時に、その心の中に考へてゐる願や動機などを御承知である。（エゼ一一・五）それで他の人が若し私共を誤解したとするも、神は私共の必要に應じて答へ給ふ。（例）ハガル（創一六・六——一三）

私共はペテロと同じく、「主よ知り給はぬ所なし、わが汝を愛する事は、なんぢ識り給ふ」（ヨハ二一・一七）と言ひ得ぬであらうか。

六、神様は全能ですか。

神様の御力を妨げ得るものは何もありませぬ。「神は凡ての事をなし得るなり」（マタ一九・二六）

七、神様は全智ですか。

神様は全智です。それて凡ての事を最も善くなし、決して誤をなさいませぬ。

昔から賢い人は、驚くべき事を仕遂げたが、それでも彼らの力には際限があつた。スチブンソンは機關車を發明したけれども、之を動かす原動力となるべき水と石炭とを造ることは出來なかつた。エジソンは電氣を如何に扱ふべきか、また之を應用して光と力とを造り出したが、しかし太陽から來る光の一線をも造ることは出來ない。驚くべき飛行機は發明された。しかしどの發明家も氣流の方向を、一つだけ更へることは出來ぬ。ただ神のみ「凡ての事をなし得るなり」である。

ヨハネは神の御座をめぐる讃美の歌を次の如くきいた。「ハレルヤ全能の主われらの神は統治すなり」（默一九・六）神の智慧と力とは、次の如く示されてゐる。

（一）自然——（例）魚は人の生きることの出來ない水中に、生活することの出來るやう造られてゐる。また私共の目は、光に應じて造られて居るので、物を見ることが出來る。

（二）神の人類に對する御支配を見るとき、私共は度々「眞に神なりき」と認める。（ロマ八・二八を讀め）

昔、ヨセフはエジプトに賣られたが、之が民族を饑饉から救ふ神の手段となつた。斯てその兄弟達に次の如くいうた。「汝らは我を害せんと思ひたれど、神はそれをよきに變らせ、今日の如く多くの民の生命を救ふに至らしめんと思ひ給へり」（創五〇・二〇）

人は最上の考を以てしても、時に失策することあり、重大な結果を招く事がある。一汽船の船長が危險を避けて、別の航路をとつた。所が思がけぬ氷山が現れ、衝突した結果は船は沈沒し、凡てのものは亡んだ。さり乍ら全能の神は、完全に賢い御方故、決して誤をなし給はない。

（教訓）若し貴下が此の大なる神に身を獻げて信ずるなら、その生命も凡ての事柄も、彼の御手に委ね、安心することが出來る。

八、神様は聖い御方ですか。

神様は完全に聖く、罪とは全然反對の御方であります。

聖き事と罪とは、恰も白と黒、光と暗、生命と死との相反する如く、正反對である。神が極端に罪を憎み給ふわけは、彼が完全に聖き御方だからである。「誰か汝の如く聖くして榮あり……奇事を行ふ者あらんや」（出一五・

一一)「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、昔在し、今在し、後來り給ふ主たる全能の神」(默四・八)(また、サム前二・二、詩九九・五及び默一五・四を見よ)

神の聖きを見るとき、人は己が罪深きを認める。(例)神殿に於けるイザヤの經驗(イザ六・一——五)

(教訓)神は甚だ聖い御方故、僅の罪でも其のままに許す事が出來ぬ。

九、神様は義しい御方ですか。

神様は完全に義しく、善人と惡人とを正當に扱ひ給ふ。

人は時々次に示す如き事のため、他人に對して不正なる扱をなす。

(一)無智のために——(例)少年が電車の事故のため遲刻したのに拘らず、それを知らないで彼を罰する如きこと。

(二)不公平のために——(例)雇主が怠け者の少年であるのに、自分の甥に當るので其の給料を增し、一方勤勉なる少年の給料を減ずるが如きこと。

(三)利己のために——アハブとナボデの例(王上二一・一——一一、一六)

このやうな不正な事は、全智にして、私共すべてを愛し給ふ神、(第二章の答五を思起せ)また全能の彼(第二章の答六を思起せ)には出來ないことである。「その中に在すヱホバは義して不義を行ひ給はず」(ゼパ三・五)「萬國の主よ汝の道は義なるかな、眞なる哉」(默一五・三)(また申三二・四及びイザ四五・二一を見よ)

一〇、神様は眞實にして、また忠實な御方ですか。

神様は眞實にして、また忠實な御方で、決して僞なく、必ず御約束を守られます。

聖書を通じて、神は契約を守る御方であると示されてゐる。私共は神の御言に對し、絶對の信頼を置くことが出來るのみならず、彼が其の御言を途中で變へ給ふなどと恐れる必要は少しもない。「我おのれの契約をやぶらず、己の唇より出でし事をかへじ」(詩八九・三四)

リビングストンがアフリカで一酋長から、その領地を通るべからずと言はれた時、夜間に河を渡つて逃げ出さうと考へた。聖書を開いて見ると、イエスの御言が見つかつた。「視よ、我は常に汝らと偕に在るなり、」といふのである。それで彼は決心していうた。「之は名譽を重んじ、また最も尊敬すべき紳士の言である。私は人目をぬすんで、夜中に河を渡る如きことはすまい。それは宛も敗走するやうなものである」と。

(教訓)私共が神の御言を信じ、そのまま受入れるならば、彼を崇める事となる。

一一、神様は惠と憐憫の深い御方ですか。

神様は凡てに惠深く、また惡を行ふ者にも憐深い御方で、罰すること遲く、常に赦さんと待つて居られます。

一二、神は愛なりとは、どういふ意味ですか。

神は愛なりといふ意味は、神がお造りになつた凡てのものを愛し、常に一番よい事

をして下さるといふ事です。

母の子供に對する愛は、罪深き人間に對する神の愛を朧氣ながら現してゐる。聖書に神は「憐深く、また赦を

このみ給ふ」（詩八六・五）とあるは、神の愛による。

神の限なき憐憫は、遂に罪人を救ふため私共に救主を與へ給ふ事となつた。（ヨハ三・一六を參照）「われ限なき愛をもて汝を愛せり、故に我たえず汝をめぐむなり」（エレ三一・三）「神は憐憫に富み給ふが故に、我らを愛する大なる愛をもて」（エペ二・四）（また申七・七、八。ロマ五・八及びヨハ壹四・九を見よ）

この愛なる神の思想と、非キリスト教國に行はるる神、即ち普通、呪詛、祟、禍害及び罰を以て臨むといふ神の觀念と、如何に差のある事か。彼らは其の神の咎を恐れて、時々おのが身を傷け、時には鐵の大釘の上に身を横たへ、或は又、燒けつく太陽の下で、火をもて身を焦すなどの難行をするのである。

これ等、不幸なる境遇にある民に、救世軍及び他の國體から、宣教者、醫師、看護婦などが相當に遣されて居るも、尙、無數の大衆が、年々歲々、無限の慈愛に富み給ふ眞の神に就き一言半句も聞くところなく、悲慘なる狀態のまま死んでゆく。

（教訓）神の愛と惠とは、私共を起たしめて、此の愛ある天父を知らざる人々のため、出來るかぎりの努力を拂はしめる。（青少年に盡し得る事は何かを述べさせよ）

一三、神樣は不變の御方ですか。

神樣は世の始の時から、今も永遠までも常に同じであります。

私共は四圍の物事が變化するので、しばしば惑はされ又煩はされる（實例を示せ）しかし神に於ては、全く變化がない。（例）

（一）神の律法は不變である。或は人間が其の律法を好まず、相手にしないかも知れぬ。それにも拘らず、之を變へることは出來ない。（實例）十誡の第四の誡は、今日も尙かはらない。（引用せよ）それ故、之を守らない者は、個人でも國でも必ず惱を招く。

（二）神の目的は不變である。神が私共を扱ひ給ふ方法は、私共の行爲によつて異る。しかし私共を祝福せんとの御目的は變らない。（實例）某が飛行機でフランスへ行かんと計畫したが、暴風のために汽船で渡つた。成程、彼の計畫は變つたけれども、渡佛の目的は不變であつた。

（三）神の愛は不變である。神は私共の弱點、失敗、罪等を知り給ふ。それにも拘らず、常に愛を以て支へ給ふ。之は何と大なる慰めであらう。（本章の一から一三までを、黑板に書いて簡單に復習せよ。書くにあたり、生徒に神は獨立自存、聖きなどといはしめる。）

一四、神樣と凡ての物とは、どんな關係がありますか。

神樣は凡てのものの創造者、保持者また支配者であります。

「汝は天と諸天の天、及びその萬象、地と其の上の一切の物ならびに海と其の中の一切の物を造り、之をことごとく保存せ給ふなり、」（ネヘ九・六）「國はエホバのものなればなり、エホバはもろもろの國人をすべをさめ給ふ」（詩二二・二八）

一五、神様が凡ての生物を造り、また凡ての物の秩序を定め給うたといふ事です。

一六、地球や其の他、宇宙にあるもので、自分で出來たものがありますか。

地球をはじめ、他の何ものも、自分で出來たものはありませぬ。恰も時計、家、機械その他の品物は、之を造つた人がある如く、この世界も亦、造つた御方があり、それが神様です。

人間は既に存在せる材料を以て、船とか宮殿とかいふ驚くべきものを建造する。また活物の模型、即ちロボットの如きものを作成する。しかし乍ら之に生命を與へることは出來ない。お互は時々、この事は完成したと思ふ。しかしすぐ他に優つたものが現れるのである。

この人間の有様と、神のとを比較する時、その差は何と大なる事であらう。神が命じ給へば、空しき所より、この完全な世界が出來た。(詩三三・九)一度、私共が自然界に現はれる神の御業に考へ及ぼすとき、その御力に驚くのである。

(一)その美に對して。神は私共の四圍に、花や雲、又は歌ふ鳥など美しき世界を展開し給ふ。これは神が私共に同じく美しき者たらん事を望み給ふ所以である。(傳三・一一)

(實例)甚皆者なる一紳士あり、美事な造花のバラを見てゐたが、之を顯微鏡で見たとき、それが恰も粗末な帆布のやうであるのを知つて驚いた。それで今度は試みに本物のバラを顯微鏡下に置いて見たところ、前のとは比較にならぬ美しさであるを知つた。そしていうたのである。「私は思はず頭が下がつた」と。

(二)その秩序に對して。この自然界を見るとき、如何にも秩序正しく運行してゐることがわかる。私共は太陽によつて時計を正確に合せ、滿潮の時を誤なく知り、また晝夜の交替時を詳しく知り得る事によつてもわかる。(詩七四・一七)

(三)その廣大なるに對して。或人の言に「私は山脈が四方を圍む中央に立つた時、自分は一寸法師の如く感じた」とある。さり乍ら此の廣き世界も、神の造り給へる大宇宙では、一小微點たるにすぎぬ。お互の肉眼に映ずる星が幾千もある。また望遠鏡を通ずれば更に多くの星が見える。しかし天文學者の說によれば、數へきれぬ程多くの星の大軍勢が、天の彼方に存在してゐるとの事である。(創一五・五。詩一四七・四)

一七、神様が凡ての者の支配者であるとは、どういふ意味ですか。

神様が其の智慧と聖き規則とを以て自然界及び人類を治め、その規則を守る者を賞し、之を破る者を罰し給ふとの事です。

神がこの世界を造り給ふや、巨大なる機械を運轉して、之を顧み給はぬ如きものとなさず、却つて積極的に常に自然萬物を、例へば風や海を支配し給ふ。

(實例)神はモーセが紅海を渡るや、海を二つに分け給うた。(出一四・二一)また逃げゆくヨナに追ひ敷きたる暴風。(ヨナ一・四)(またヨブ三七・三、詩六五・八——一三、一〇七・二九、一四八・八などを見よ)

神は支配者としても、至高の力を人間の上に及ぼし給ふ。彼が人のため設け給へる規則は、彼御自身が賢明で善良である如く、人の益となり且つ善いものである。（第二章の答七及び八を見よ）それで此の規則が守られる所には、平和と繁榮とがあり、然らざる所には、必ず混亂と不幸とが臨む。（實例）國家の有する法律や、義勇國の規則などを考へよ。「それ律法は聖なり、誡命もまた聖にして正しく、かつ善なり」（ロマ七・一二）

一八、神様が凡ての物の保持者であるとは、どういふ意味ですか。

神様が凡ての物を護り、保ち、また必要なものを與へ給ふといふ事であります。

私共は時々神の攝理につき語るが、これは彼が造り給へるものの必要に應じ、賜ふ所の驚くべき御注意と御保護の謂である。彼の愛に滿つる配慮の前には、大きすぎるとか、或は少さすぎるといふ事はない。聖書を繙き見れば、私共は神が次の事に關して備へ居給ふを悟る。

（一）動物の世界に對して。「食物を獸に與へ、また鳴く小鴉にあたへ給ふ」（詩一四七・九）鳥類のうちの最も平凡な雀でさへも、天父の保護から洩れない。（マタ一〇・二九）

（二）荒野に於けるイスラエル人に對して。神は雲の柱も以て彼らを導き、必要な滯在地を備へ、食物と水を用意し、その敵を退け、また衣服の事まで心配し給うた。「四十年の間われ汝らを導きて曠野を通りしが、汝らの身の衣服は古びず、汝の足の鞋は古びざりき」（申二九・五）（また申八・二——四を見よ）

（三）全人類に對して。「エホバは草を生えしめて家畜に與へ、田產を生えしめて人の使用にそなへ給ふ、かく地より食物をいだし給ふ」（詩一〇四・一四）

（四）特に神に依頼む者に對して。「エホバの聖徒よ、エホバをおそれよ、エホバを長るる者には乏しきことなければなり」（詩三四・九）

然し、中には現在はそれでよいが、將來の事は如何と心配する人があるかも知れぬ。けれども心配には及ばぬ。既に現在に於て私共の必要なるものを悉く知り給ふ神である。將來の入用品を明瞭に御承知であり、愛と親切とをもて、凡てに備へ給ふは火を見るより明白である。

（教訓）神が貴下に與へ給ふ日毎の惠に對し、心から感謝せよ。

一九、神様は幾人もありますか。

活ける眞の神様は、唯一人しかありませぬ。

人間は何様かを拜まねばならぬやうに造られてゐる。眞の神を知らない人々の間では、各種の神々が拜まれてゐる。（例）ヒンヅー教では三億の神があるといふ。或る神は木製又は石造或は他の材料で造られてゐるが、それらは生命もなく、また力もない。中には又、日や月や動物を拜む人もあるが、それらは人間が聖き生活を營むれば何の助にもならぬ。この神々に比して、「我らの神エホバは唯一のエホバなり」（申六・四）「エホバは眞の神なり、彼は活ける神なり、永遠の王なり」（エレ一〇・一〇）と聖書の敎ふる眞の神とは、如何に大なる差であらうか。

二〇、神様には神格が幾つもありますか。

神様には父、子及び聖靈の三つがあり、この三つは一つの神様で、之を三位一體といひます。

此の大なる眞理は、聖書に示されてゐる。舊約聖書は之を示す。(例)「主エホバ我(イエス)とその靈とを、つかはし給へり」(イザ四八・一六)イエスがバプテスマを受け給へる時、父なる神は語り、子なるイエスはバプテスマを受け、聖靈は天より降り給うた。(マタ三・一六、一七)またイエスが弟子達と別れ給ふ折、約束して宣うた。「助主即ちわが名によりて父の遣し給ふ聖靈は」(ヨハ一四・二六)と。使徒パウロは、初代のキリスト者に對し、この三つにして一つなる神を敎へた。(コリ後一三・一四)(三葉のクローバーや、或はカタバミ草は、例にすることが出來やう)

この眞理は人間の頭にとつては神秘である。さり乍ら神は私共より遙に偉大であり、神に就いては私共の了解出來ぬことが多くあるべきを豫め承知せねばならぬ。かかる事柄に於ては、信仰をもて神の啓示し給へる眞理を信ずべきである。

この世界には不可解な事が幾らもある。それにも拘らず、私共はそれを退けない。(實例)

一、電話。子供らには其の理がわからない。それにも拘らず、之を用ひて「父ちやん」と話しかけることを好む。二、目。目が物體を寫し、これを腦に傳へる機能は多くの人にとつて不可解である。しかし賢明なる醫師はその理由を承知して居る。三、風。イエスは風について仰せられた。「なんぢ……何處より來り何處へ往くを知らず」と。(ヨハ三・八)

二、神樣は私共に、どうして御自身をお示しになりますか。

神樣は自然、聖書、御子イエス・キリスト、聖靈、神の民及び私共の良心を通じて、御自身をお示しになります。

世界は知識を得るために、非常な努力を拂ふものである。(實例)探檢家は、極地に達する第一人者たらんと欲して、殆んど全部を犧牲する。

神は私共の心と頭とを傾けて學ぶべき最も大なる御方である。天地に充つる神が(エレ二三・二四)無學にして罪深き人間に御自身を知らせんと欲し給ふことは、實に驚くべき事である。神は次の如き偉大なる敎師を人間のために備へ給ふ。

(一)自然。これは神が私共を敎へんとて用ひ給ふ野外の書物である。

地球は神を以て滿ちて居り、その草木は又、神の聖き火に燃え上つてゐる。

「幸福なるかな心の淸き者、その人は神を(その御業の中に)見ん」(マタ五・八)

(二)聖書。これは古今を通じて最も驚異に値する書である。

(三)イエス・キリスト。彼は父なる神を、人間に悟らしめんがため、地上に來り給へる御方である。

「我を見し者は父を見しなり」(ヨハ一四・九)

(實例)子供が或人に「神樣とは、どんな御方ですか」と尋ねると、その答は、「イエス樣が地上に在すころ、どんなだつたでせう。その通りの御方です」と。

(四)聖靈。私共の心に宿り給ふ聖靈は、神に關する眞理を、私共に悟らしめ給ふ。

(五)救世軍の上官や信仰篤き兩親を通じて、私共は天の神について學ぶことが出來る。

(六)良心。私共が罪を犯さんとする時、心に不安を起させ、また善事を行はんとするとき、贊成の意を表す良心は、神の正義を私共に悟らせる。

第三章　罪

一、私共の始祖が神様に造られて後、どんな悲しい變化が起りましたか。

私共の始祖は全く罪のない清い者に造られましたが、罪を犯した結果、その清さを失ひました。

愛する神は、エデンの園に於て、アダムとエバとを、最上の幸福ならしめんとて、各種の物を備へ給うた。即ち美しき還境、最も健全な身體、樂しい勞働、親しい友達、その上に彼らを包む驚くべき世界を學ばせん爲に、心を捉へる如き事物を與へ給うた。更に彼らの心には一點の罪なく、その考には少しの汚れなく、その良心は又清かつた。然るに彼らの不從順が、この樂しい狀態に一大變化を來らせた。その結果、もはや彼らは清からず、罪と汚れのために苦しむ身となつた。この變化が、彼らを取卷く四圍の物に對する喜を失はしめた。

二、罪とはどういふ事ですか。

罪を犯すとは、私共が考や言又は行爲で惡と知りつつなし、善と知りつつ行はぬ事であります。

惡に誘はれる事は罪でない。しかし其の誘惑にまけ、罪に心を許す事によつて、罪となつて來る。（實例）一青

年あり、不正直を行へと誘はれた所で、それは罪ではない。しかし心中で「それはよからう、僕もやらう、」といふとき罪は始まる。

罪は次の如きものの中に存在する。

（一）思想。私共の心中に、嫉妬、誇、憎惡などの考があるとき。「それ心より惡しき念いづ」（マタ一五・一九）

（二）言。私共が嘘、薩口、神聖なる事を輕々しく口に語るとき。救はれた者はいづれも次の如き祈をする必要がある。「エホバよ願くば、我が口に門守をおきて我が唇の戸を守り給へ」（詩一四一・三）

（三）行爲。私共が詐欺、賭事、盗みなどの惡事を行ふ時。

この他、職分を怠ることも亦罪である。青少年達の中には、「自分は最善を盡したか否か、」と反省しないで「僕は何も惡い事をしなかつたから、」と言譯をする者がある。しかし聖書には、「人、善を行ふことを知りて之を行はぬ罪なり」（ヤコ四・一七）とある。

イエスの譬話に出て來る、あのタラントを預けられて居りながら、之を有要に使用しなかつた僕は、「惡しく且つ怠られる僕」との惡名を蒙つたのである。（マタ二五・二六）

三、私共の始祖が罪なき有樣から、墮落したるは何の罪によつてですか。

私共の始祖は神樣の命に從はず、「善惡を知るの樹」の實を貪べて墮落しました。

始祖の神に對する忠實を試すため設けられたるは、唯一つの「べからす」といふ命令であつた。（始祖墮落の大要を語れ。創三・一——六）

惡魔はエバを誘ひ、神の愛を疑はしめ、その警告に對して不信を起させ、續いて神が爲してはならぬと戒め給

へる事を行ふ考を起さしめた。(創二・一七と三・一、四、五とを比較せよ)

かくてアダムとエバとは、惡魔の教唆に從うて墮落するに至つた。

(教訓)神の禁じ給へることを欲する考を助長せしめるは、結局、不服從に至らしめる。

四、始祖の不服從と墮落の結果、どんな不幸なことが生じましたか。

始祖の不服從と墮落の結果、彼らは神の惠を失ひ、罪と惡魔とに壓へられ、それ以來、悲しみ、苦しみ及び死を受ける事になりました。

自分たちに凡ての物を與へ給ふ神との友情を失ひ、その御不興を感ずるとは、何といふ恐しくも亦悲しい事か。今まで神が自分達の支配者で在し給うたのに、今では惡魔と罪との奴隷に化したとは、何といふ變化であらう。

「凡て罪を犯す者は、罪の奴隷なり」(ヨハ八・三四)

彼らの身體はとても健康で强かつたのに、今では苦痛に惱み、次第に衰へ、遂に死に至るやうになつた。それより更に恐るべき事が起つた。そは靈魂の死である。即ち彼らには神と善及び聖き事に對し、何らの興味も起らぬ死の狀態が始まつた。

(實例)屍は其の愛する者の言や、涙に對して更に無關心である。

(教訓)罪と惱みとは、切つてもきれぬ關係あることを認識せよ。

五、始祖の墮落の結果、世の中はどうなりましたか。

始祖の墮落の結果、この世の中に罪、悲しみ、苦痛及び死が入つて來り、その時以來、人間は皆そのために、苦しむ事になりました。

六、私共は罪の性質がありますか。

私共はアダムとエバとの子孫で、その心は生れつき罪の性質があり、罪を犯す傾向を有つてゐます。

アダムは全人類の父又は頭であるから、その罪深き性質は、凡ての子孫に影響を及ぼした。(實例)家庭に於て父の決心した所は、その家庭に影響を及ぼすところ甚だ大きい。アダムとエバとは、神を喜ばせ奉るより、自分達を樂しましめるため事を選んだ。それ故、彼の子孫全部は、彼らに似て利己的精神に滿ち、惡への傾向を有つ罪深い者となつた。今日、世界に於ける甚しき悲慘事、即ち罪惡、貧窮、戰亂、苦惱及び暴虐などは、始祖の罪を犯したる結果である。「それ一人の人によりて罪は世に入り、また罪によりて死は世に入り、凡ての人、罪を犯しし故に死は凡ての人に及べり、」(ロマ五・一二)「われらは皆、羊の如く迷ひて、おのおの己が道にむかひ行けり」(イザ五三・六)

(教訓)貴下が罪を犯すなら、必ず他人に害を及ぼす。

七、內部の罪、外部の罪とは、どんなことですか。

私共が心に惡い思、感情又は願を有つときは内部に、そして惡い言や行爲を示すとき、外部に罪を犯すことになります。

或る人々は外部に何か惡い事を行うたときだけ、罪であると考へてゐる。しかし聖書には、その惡が生活に表はれないでも、心の内で罪を犯し得ると教へてある。（本章の二を見よ）（實例）種子は大地の中に眠れる如くあるも、大樹たるべき生命がある。

カインはアベルを羨み、かつ憎んだ。それで彼は實際上アベルを殺す前に、すでに心中で殺人を行つたわけである。（創四・三——八）「おほよそ兄弟を憎む者は、即ち人を殺す者なり」（ヨハ壹三・一五）（またマタ五・二一、二二及びマル七・二一、二二を見よ）

それ故、私共の日毎に於ける祈は、次の如きであらねばならぬ。「神よ願くば、我を探りて我が心を知り、我を試みて我がもろもろの思念を知り給へ。われはくば我によこしまなる途のありやなしやを見て、我を永遠のみちに導き給へ」（詩一三九・二三、二四）

八、罪は何故に恐しい禍ですか。

罪は神様に叛くことであり、他人を害し、良心には咎められ、己が生涯を不幸に至らせ、死後には又、刑罰を受ける事になるからです。

惡魔は罪を犯すことを、大した事でなき如く思はせて、また其の罪を實際よりは、人ぎきのよい名で呼ばせて人々を誘ふ。時には「小さな罪」ではないかといふ。しかしどんな罪でも、神は甚だ嫌ひ給ふ。そして神を知り

彼を愛する者も亦、罪を最も恐れる。「汝は目清くして、あへて惡を觀給はざる者、あへて不義を視給はざる者」（ハバ一・一三）

（教訓）罪を絶對に輕々しい事と思うてはならぬ。之は世界で最も忌しき事である。

九、罪は何故、神に叛くことですか。

罪は聖書や良心を通じて、與へられる神様の命令に叛くことだからです。

神はこの世界に律法を與へ、之を治め給ふ方であるが、（第一章一七を見よ）彼は其の聖くして立派な律法に人人が從ふやう望み給ふ。それ故、この律法を破る事は、神を侮辱し、之に反抗することなる。（實例）兩親に逆ふ亂暴な子供は、親に罪を犯すばかりでなく、また神の律法なる「汝の父母を敬へ」（出二〇・一二）といふのを、破ることである。

ダビデが其の部下に對して惡を行うたとき、彼は神の誡命を破つた事を認め、涙を流して其の罪をかなしみ、かつ「我は汝にむかひて、ひとり汝にむかひて罪を犯し、聖前に惡しきことを行へり、」（詩五一・四）と嘆いて祈つた。

一〇、良心とは何ですか。

良心とは私共に正しからん事を勸め、惡を警戒し、そして正しきを選ぶとき喜び、惡に陷るとき不愉快ならしめる所の内なる心です。

一一、良心の咎とは何ですか。

良心の咎とは、私共に惡を行うた事を知らせ、その責と罰とがあるを悟らしめる事です。

パウロは「常に神と人とに對して、良心の責なからん事を努めた。（使二四・一六）その意味は、知りつつ神と人とに對して、罪を犯し、良心の咎をうけぬやうに努めたとの事である。

ああ神よ、わが良心を瞳の物見る如く素早くなし給へ、そして靈魂に罪が近づくとき、目を覺し居ることを得しめ給へ。

咎を受けた良心は、人が負ひ得る荷のうち、最も重い荷である。これは、

（一）平安を失はしめる。本人に安心を與へず、不幸ならしめる。

（二）恐怖を起させる。發見、摘發かつ刑罰をうけるかとの怖である。

（三）罪に深入りさせる。既に犯した罪を藏はんため、更に別の罪へと導く。

（四）時には苛責と恥辱とから逃れんとして絶望の果、自害することがある。

かのヨセフをエジプトに賣り、其の罪を隱すため父に嘘をいうた兄達は、後年に至つて、「我らは弟の事によりて、まことに罪あり、……故にこの苦しみ、われらにのぞめるなり、」（創四二・二一）と認めねばならぬ事になつた。またイエスを賣つたユダは、罪に責められて、遂に自殺するに至つた。

（教訓）良心の苛責より脱する唯一の道は、その罪を神の御前に告白し、キリストの名によつて赦さるる事である。

一二、私共の罪は、どんな事で他人を害しますか。

私共の罪は他人に悲しみ、損害及び禍害を與へ、かつ惡い手本に倣はせます。

聖書に「我らのうち己の爲に生ける者なく」（ロマ一四・七）とある。私共が好むと否とに拘らず、必ず善なり惡なり其の感化を他人に及ぼす。誰一人として、罪を犯したとき、「之は私だけの事で誰も他の人に關係がない、といふことは出來ない。（實例）愛兒の罪や恥、又は强情などは、母の悲しみとなる。また、賭博者は其の家族を貧窮と零落とに至らせる。更に青年部樂隊員が、秘かにタバコを喫うて居るのを見た一少年は、「彼が喫うてゐるなら、僕だつていいのだ」というた。

一三、罪を犯せば良心の咎めをうける外に、どんな禍害を此の世で受けますか。

眞の幸福を與へ給ふ神樣から其の人を離し、次第に惡事に深入せしめ、惡習慣にとらはれ、多くの悲しみに導きます。

私共の愚な行爲のため、友人の信用を失うた結果、彼らの態度が以前とは變化し、從前通り自由に彼らの許へ近づきかれるは悲しい事である。それよりも一層悲しいことは、人類を愛し給ふ神が、人間の罪のために、その祝福を下し給はず、反つて不興の態度を示し給ふことである。

カインが弟のアベルを殺し、神から追放されたなり、次の如くいうた。「我が罪は大にて負ふこと能はず、我は汝の面をみる事なきに至らん」と。（創四・一三、一四）イザヤは又、昔の神に選ばれたる民に關していうた。「な

んぢらの邪曲なる業、汝らと汝の神との間を隔てたり、又なんぢらの罪その面をおほひて聞えざらしめたり」(イザ五九・二)と。

罪に耽る者は、之を犯す事が容易になり、最初は惡が糸の如きものでも、遂には强大なる鎖のやうになり、靈魂を縛つて、無理やりに罪を犯させるから、「もう何とも仕方がない」と、いふに至らせる。(實例)冒瀆の罪。

一四、神様はどんな罪を特にお憎みになりますか。

神様が犯してならぬと、注意し且つ警戒された事を行うた時、また他人を惡に導く罪を最もお憎みになります。

警戒は災禍より救ふ爲に與へられる。(例)警鐘、サインなどはそれ。若し此の警戒を無視したため、大なる結果を招いたとしたら、誰の責任となるであらうか。(エゼ三三・四、五にある守る者の譬を見よ)

神は御言、良心及び其の僕たちを通じ、私共に罪を犯さぬよう望み、警戒を與へ給ふのみならず、若し之を犯さば其の結果は斯の如しと示し給ふ。この有難き神の御警戒と、御希望とを蔑する者の罪は如何に重大であらうか。「汝ら我が錄ふところの憎むべき事を行ふ勿れ、」(エレ四四・四)「人はおのおのその惡によりて死なん」(エレ三一・三〇)「それ罪の拂ふ値は死なり」(ロマ六・二三)

惡事に於ける發起人たるは非常に恐しい事である。よし悔改めて罪を赦されたとするも、その他人を惡事に加入せしめた記憶が、後々まで深刻なる後悔を屢々起さしめる。(實例)一人の掏摸があり、救はれたけれども、自分が以前、盜人に仕立てた青年達、特に其の或者共は入獄して居たが、彼らの事を思起して心を非常にいためた。

若し罪を悔改めないなら、神の御不興と其の當然の刑罰とを招くであらう。(實例)少年が路傍で賭勝負をして遊び、年少の者共を之に加へ、若し見つかつたなら、彼は自分の賭勝負に對する罰と同時に、年少者を仲間に入れた罪をも罰せられるであらう。

一五、私共の罪は記錄されてありますか。

神様は私共の罪の記錄を保存し、それが赦されて居ない限り、審判の日に於て之を審き給ひます。

或人は「どうして記錄が出來るか、」といふかも知れぬ。成程、私共には說明が出來ぬ。しかし神の全能力に對して、その御力に際限をつけうる人は誰もあるまい。(實例)寫眞や活動寫眞によつて、人の行動の或るものは、ながく遺る。また蓄音機によれば、死んだ人の言や調子を今一度きくことが出來る。「われ又、死にたる者の大なるも小なるも御座の前に立てるを見たり、而して數々の書展かれ……死人は此等の書に記されたる所の、その行爲に隨ひて審かれたり」(默二〇・一二)

或る軍隊では、各兵士が入營以來の記錄を保存して居り、一々の非行に對する懲戒決定が、その懲罰欄に記錄されてゐる。この記錄は、本人がよし改心した所で、消すことは出來ない。さり乍ら有難いことに、私共の罪の記錄は、キリストの死により拭ひ去られ、白くて新しい頁が備へられる。そしてキリストの御力により、勝利ある行爲の記錄を之に記すことが出來るのである。「我なんぢらの愆を雲のごとくに消し、なんぢの罪を霧の如くにちらせり」(イザ四四・二二)「もし己の罪を言ひあらはさば、神は眞實にして正しければ我らの罪を赦し凡ての不義より我等を潔め給はん」(ヨハ壹一・九)

第四章　イエス・キリスト

一、始祖の墮落は神様の御心を痛めましたか。

始祖の墮落は、神様の大なる悲しみでありました。

二、神様は罪人がその罪を犯したにも拘らず、愛されますか。

神は其の罪を憎み給ふけれども、罪人を愛し、彼を救はんとし給ひます。

三、神様が大なる愛を以て、世を救ふため獨子を賜うたといふ聖句を言つて下さい。

「それ神はその獨子を賜ふ程に世を愛し給へり。すべて彼を信ずる者の亡びずして永遠の生命を得んためなり」（ヨハ三・一六）

一船主あり、お客や貨物を載せて世界を航行させるため造つた船が、逆水の日に當つて沈沒したら、彼の悲しみは、どんなであらうか。また一人の父あり、骨折と犠牲とを拂うて育てた息子が、その親の愛に逆き、横着にも父の物を盗んで逃亡したなら、彼の悲しみは如何ほどであらうか。此らは私共の始祖が、失敗して罪を犯し、神の御心を痛め奉つたのと甚だ似通うてゐる。しかし罪は、神の人間に對する愛を變へることは出來ない。「愛は移り變らず、物事の移り變りにも更に變らず。」

大昔、神の民に關して記されてゐる。「彼らは……荒野にて神を憂へしめしこと幾度ぞや」（詩七八・四〇）また其の後、彼らが甚しく神に反逆せる時には、「我かぎりなき愛をもて汝を愛せり」（エレ三一・三）と。

神はアダムとエバとが失敗した時、その愛し給へる獨子なる救主を賜ふとの約束を與へ、己が愛の變らざるを示し給うた。「されど我らが尚罪人たりしとき、キリスト我らの爲に死に給ひしに由りて、神は我らに對する愛をあらはし給へり。」（ロマ五・八）

それ故、私共が惡事をなした時、神はお互を愛し給はぬ等と考へたり、言うたりするは、神に對して申譯なき無禮にあたる。神は常に私共みなを愛し、その憎み給ふ罪から、私共を救出さんと望み給ふ。

（教訓）お互の救のため死に給へるイエスを、私共に賜うた神に對し、日毎に感謝せねばならぬ。

四、神の獨子とは、どんな方ですか。

神の獨子とは、三位一體の第二に位する御方です。

五、神の獨子は、どうして罪人の救主となり給ひましたか。

神の獨子は罪人の救主となるため、嬰兒として生れ、罪のない生涯を送り、十字架の苦しみと死を受け、死より甦つて天に昇られました。

私共は福音書を繙くとき、他に比類なきイエスの地上生活に就き學ぶことが出來る。彼は「榮光の主」なれど

も、頑是なき嬰兒として馬槽に臥せられ、幼兒から少年、更に青年時代へと成長され、田舍の一家庭に健康にして幸福、かつ聖き若者と成人された。また其の仕事場に、働、机その他日用の諸道具を製作される若き勞働者の姿を思ひ起すことが出來る。更に一箇の成長したる人物として、彼が其の地方の各地を巡り、民衆を敎へ、病人を醫し、悲しめる者を慰め、各所に祝福を垂れ給へる有樣を想像することが出來る。

眼を轉ずれば、ゲツセマネの園にて、「わが意の儘にあらずして、御意のならんことを」と、必死の祈り給へるイエス、また非道なる審判官の前に、靜かに沈默を守り給ふ彼を見ることが出來、また十字架上に「事畢りぬ」と叫び給へる勝利の御聲を聞くことも出來、續いて墓に横たへられ給へる屍としての彼を考へ奉ることも出來る。更に進めば、私共は弟子達が「彼は甦り給へり、」との吉報に喜んだ歡喜を共にすることが出來、最後には彼が手を伸べ、祝福しつつ天父に歸り給へる昇天の光景を見る如く感ずるのである。

果して然らば、此の驚くべき物語の眞意は何か。お互の歌ふ軍歌の一節は、その最もよき答であらう。曰く「彼が天より降りしは、私共の罪を赦さんがためなりと、聖書は敎へてゐる」と。

六、神の御子がお生れになる時に、お名前について、どんな御命令がありましたか。

神樣は天使ガブリエルを遣して、「汝その名をイエスと名づくべし。己が民をその罪より救ひ給ふ故なり」と仰せになりました。（マタ一・二一）

七、何故イエス樣を、キリストと申しますか。

キリスト（ユダヤ人はメシヤといふ）とは、膏注がれたる者との意味です。イエス樣は人々を罪より救ふため、神樣から選ばれて、膏を注がれた方故、キリストと申します。

ヘブルの名前は、特別な意味の有するのが普通である。例へばモーセとは救出すの意、サムエルとは神に聽かれるとの意である。イエスの名は舊約に於けるヨシユアと同じで、救主の意である。このイエスといふ名は、救主の時代には一般に用ひられた名であつたが、神の獨子が生れ給うてより、他の凡ての名に優つて、最も神聖なものとなつた。「この故に神は彼に諸般の名にまさる名を賜ひたり。これ悉くイエスの名によりて膝を屈めしめん爲なり」（ピリ二・九、一〇）（またエペ一・二〇、二一を見よ）

イエスといふ名は、彼を愛する者にとりて甚だ貴い。之は幼兒が祈のとき呼ぶ最初の名であり、また恐れる者に勇氣、困難な折に平和、失望の際に希望、病と悲しみの裡にて慰めを與へる御名である。

舊約時代にては王、祭司、時に豫言者が、一般民衆から聖別せられ、その職に就くとき膏を注がれた。イエスは神によつて聖靈を注がれ給うた。（マタ三・一三——一七の話を語れ）「神が聖靈と能力とを注ぎ給ひしナザレのイエス」（使一〇・三八）アンデレはイエスをキリスト（又はメシヤ）と認めた。（ヨハ一・四一）次にピリポ（ヨハ一・四五）更にペテロ（マタ一六・一五、一六）が斯く認めた。イエスもサマリヤの罪ある女に、自分をキリストであると示された。（ヨハ四・二五、二六）

あの天使が牧者達に告げたる音信「汝らの爲に救主（イエス）生れ給へり、これ主キリスト（神に膏注がれたる者）なり」（ルカ二・一一）は、如何にも榮光にみちたものであつたさいひ得る。

（敎訓）イエスの名を屢々貴下の心に思出し、また言うてみるがよい。

八、キリストは神であり、また人でありますか。

イエス・キリスト様は眞の神様で、また眞の人であります。

九、イエス様は何時でも神様でありましたか。

イエス様は永遠の昔から神様でした。また此の後、いつまでも神様であります。

一〇、イエス様は何時でも人でありましたか。

イエス様はこの世にお出になるとき、處女マリヤから生れて、人となられました。

此等の眞理は甚だ重大にして、私共の頭腦では十分に了解が出來兼れる。イエスが神で在ざりし時とては絶對になかつた。また數へつくせぬ永遠に亙つて、彼が神でないといふ場合も絶て無いであらう。彼は神として、

(一)天地創造の前、既に天父と偕に在し給うた。「太初に言（イエス）あり、言は神と偕にあり、言は神なりき」（ヨハ一・一）

(二)世界の創造に參與し給うた。「萬の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし」（ヨハ一・三）

(三)何處にも在す。「二三人我が名によりて集る所には我もその中にあるなり」（マタ一八・二〇）

(四)凡ての事を知り給ふ。「凡ての人を知り、また人の裏にある事を知り給へば、人に就きて證する者を要せざるなり」（ヨハ二・二四、二五）

(五)變り給はず。「イエス・キリストは昨日も今日も永遠までも變り給ふことなし」（ヘブ一三・八）

イエスは人を救ふため、天父と偕なる榮光の位を離れ、ベツレヘムの嬰兒として生れ給へる時、他の赤坊と同じ一箇の人間として來り給うた。ただ少しも罪のない點が、お互と違うたのである。

彼が地上の生活をなし給へる時、

(一)一少年として「智慧も身のたけも彌增り」居給うた。（ルカ二・五二）

(二)飢と渴とを感じ給うた。（マル一一・一二、ヨハ一九・二八）

(三)疲勞を感じ給うた。（ヨハ四・六）

(四)憂と怒とを起された。（マル三・五）

(五)私共と同樣、誘惑に遭ひ（ルカ四・二）給うたが、勝利を得られた。

斯の如くイエスは、人間となり給うたけれども、神たる事を止め給うたのではない。彼は神で在し、また人で在した。そして何時までも斯くあり給ふであらう。海上に居給へる時、イエスは人間として勞れた結果、小舟の中に眠り居給うた。然るに弟子達が助を求めるや、起つて神たる御力を顯し、暴風をとどめ、荒れ狂ふ波を靜め給うた。（マル四・三六——三九）「それ神は唯一なり、また神と人との間の仲保も唯一にして、人なるキリスト・イエス是なり」（テモ前二・五）

一一、神の子が人となり、どんな方法で罪人を御助になりますか。

神の子は人となり、その生活、教訓、死、復活及び昇天によつて、罪人をお助になります。

一二、私共はイエス・キリストの御生涯により、どんな御助を受けますか。

キリストの御生涯は、私共が誘惑や苦難の眞中にあつて、如何に神樣を喜ばせ奉るかの、完全にして唯一の模範であります。

イエスの御生涯中、最初の三十年間に就いて、私共の知り得る所は甚だ少い。しかし次の事はわかるであらう。

(一)兩親に對して從順であつた。(ルカ二・五一)

(二)勞働をいやしめず、彼は一箇の大工として働き給うた。(マル六・三)

(三)父なる神に極度の御滿足を與へ、神から「わが悦ぶ者」と呼ばれ給うた。(マタ三・一七)

彼が三年間の公生涯に於ては、絶對に咎めらるべき事がなかつたので、誰も彼を罪ありと責める事が出來なかつた。(ヨハ八・四六)

福音者を讀むとき、彼は

(一)悲しめる者を慰め給うた。例へばラザロの墓に於ける如き。(ヨハ一一・三五)

(二)悟るに鈍い者共を忍耐し給うた。即ち弟子達が彼の御意を悟り得ない時が度々あつたに拘らず、忍耐もて尙も敎へ給うた。(マタ一六・九、一一)

(三)己を卑うし、奴隷の仕事をさへ敢てなし給うた。(ヨハ一三・四、五)

(四)婦人に對し注意を拂ひ、尊敬を示された。(ヨハ一二・七)

(五)他人のため自ら克己し給うた。(マル六・三一、三四)

(六)一般から侮られ、見棄てられた者を尋ねて之を助け給うた。(マル二・一六、一七)

「キリストも汝らの爲に苦難をうけ、模範を遺し給へるなり」(ペテ前二・二一)

(敎訓)イエスの模範に倣へ、すれば幸福であり有要な者となり得る。

一三、キリストの敎訓によつて、どんな助を受けますか。

キリストの敎訓によつて、神樣のこと及び其の御意がわかります。

イエスが御在世當時、語り給へる敎は、さても新しくて、興味が深かつた故、海岸でも、山の上でも、その他到る所で人々は此の話をきかんとて彼の御許に群り集つた。後に敵が彼を捕へしめるため遣した兵卒共は、空手で歸り報告していうた。「この人の語りし如く語りし人は未だあらず」(ヨハ七・四四——四六)と。彼の御言は、

(一)絶對に恐るる所なく語られた。彼は聽衆の罪や僞善を率直に告げ給うた。

(二)何處までも誠實であつた。それで人々は「彼は正し」と其の心に感ぜざるを得なかつた。

(三)屢々極めて優しく、且つ愛に滿てるものであつた。「幼兒らを許せ、我に來るを止むな」(マタ一九・一四)

「われに來れ、われ汝らを休ません」(マタ一一・二八)

偉人の敎訓は、間もなく消へるか、時代おくれとなる。しかしイエスの敎は、最初語られた時と同樣、今日も甚だ新鮮である。その敎訓は何れの時代の、如何なる階級にも、ぴつたり當篏る。

(敎訓)イエスの御敎を學べ、すれば貴下は彼を如何に喜ばせ奉るべきかを知り得るであらう。

一四、キリストの敎訓の一例を言つて下さい。

山上の垂訓の中にある「八福」は、美しい敎訓であります。

英語で「八福」のことを「ビューテチユード」といふ。その意味は祝福又は最上の幸福といふ事である。これは眞の幸福或は祝福に關するイエスの御教である。印度の偉大なる一指導者が、驢にて集れる群衆から演說を求められた時、彼は基督者ではなかつたが、新約聖書を出し、「八福」を聲高く讀み、かういうたのである。「私はこれ以上の大なる言を諸君に與へることは出來ない」と。

神の人間に望み給ふ所は、その幸福ならんことである。それ故、イエスは大說教の最初に於て、幸福又は祝福の言を以て始め給ひ、更に最初の奇蹟を目出たき婚禮の席に於てなし給うた。（ヨハ二・一——八）

凡ての人は皆、ひたすら幸福を求めてゐる。しかるに救はれてゐない人々は、此の世の物、例へば競技、活動寫眞、ダンスなどに往いて幸福を求める。或は少々高尙になつて、學問、旅行などに赴く。しかし此らの物は、イエスが八福にて敎へ給へる如き眞の幸福を絕對に與へることは出來ぬ。「快樂の追求」と題する繪畫あり、或者は美服を飾り、他の者は仕事着のままである。中には樓閣をまさうてゐるが、一大群衆が、ほんの一足先に逃げゆく快樂の影に欺かれつつ、山腹を押し合ひ、揉み合う進んでゐる光景である。しかし彼らは何れも憎惡、利己及び失望の滿つる顏付で、誰一人として幸福らしい面をしてゐないといふ。

一五、キリストの八福を言つて下さい。

「幸福なるかな、心の貧しき者、天國はその人のものなり。」

「幸福なるかな、悲しむ者、その人は慰められん。」

「幸福なるかな、柔和なる者、その人は地を嗣がん。」

「幸福なるかな、義に飢ゑ渴く者、その人は飽くことを得ん。」

「幸福なるかな、憐憫ある者、その人は憐憫を得ん。」

「幸福なるかな、心の淸き者、その人は神を見ん。」

「幸福なるかな、平和ならしむる者、その人は神の子と稱へられん。」

「幸福なるかな、義のために責められたる者、天國はその人のものなり。我がために人なんぢらを罵り、また責め、詐りて各樣の惡しきことを言ふときは、汝ら幸福なり。喜び喜べ、天にて汝らの報は大なり。汝等より前にありし豫言者等をも、斯く責めたりき。」（マタ五・三——一二）

イエスが八福にて仰せ給へる御言には、之を聽ける者の多くは驚いたに相違ない。彼らは最も幸福な人々が、イエスの宣へる如き種類の人々であることは、曾て耳にした事がなかつたであらう。

（一）心の貧しき者。之は卑屈や臆病の意味ではなく、心卑くして謙遜ないふ。斯る人は誇や高慢がないため、神の國に入ることが出來る。（ルカ一四・一一）

（二）悲しむ者。これは己が罪深きを悲しみ嘆く人のことで、斯る人は神の赦によつて、喜の生涯に入ることが出來るであらう。（イザ六一・三）

(三)柔和なる者。これは温順で親切な人をいひ、常に己が權利を主張せず、激論や、怒つた樣子で他人を困らせない。この種の人は、結局尊敬をうけ信頼される。(箴一六・三二)

(四)神と善事とを追求める者は、恰も心が飢ゑ渴いて居る如きものである。(詩四二・一)

(五)憐憫ある者。これは自分より弱き者に辛く當つたり、又は殘酷なことをしないのみならず、反つて弱者や處を得ない人に對し、同情と思ひ遣を示す人の事である。(ルカ六・三五、三六)

(六)心の淸き者。これは思想も言も、また行爲も聖き人のことをいふ。神は斯る人の友たるを好み給ふ。(詩二四・三、四)斯る人は世界の到る處、又他の善人のうち及び己が生涯に起り來る出來事のうちに神を認める。

(七)平和ならしめる者。この種の人々は甚だ温順、快活及び機智に富んでゐるから、自分の圍に起る爭をやめしめる。それ故、彼らは我らの主にして偉大なる平和の招來者イエスに似てゐる。(ヤコ三・一八)

(八)イエスの爲に責められたる者。この種の者の多くは、主を否むより寧ろ、輝ける顏を以て牢獄に、ライオンの洞穴に、また火刑柱に赴くをよしとした。今日、試煉や不親切や嘲弄の眞只中、又は信仰なき家庭、事務室仕事場及び工場に於て、勇敢に立場を守る者も、彼等に似てゐる。斯る人々には「天にて汝らの報は大なり、」(ペテ前一・六、七)との御約束がある。

(敎訓)自分が眞の幸福を獲得するに相應しい品性を己がものとせよ。

一六、イエス・キリストの死によつて、私共はどんな助を受けますか。

キリストは私共の爲に苦しみ、死んで罪の極惡な事と、神樣の律法が大切てある事とを示され、斯て神の義と、信ずる者の凡てを救ふ惠とが、兩立する事を示されました。

神は罪人を愛し給ふ故、その罪を赦さんと望み給うたが、若し罪を見過しにするなら、神の律法を破る事を何とも思はぬ考を奬勵し、かつ破りたる結果、甚しき禍害を招くものたるを、忘れしめるであらう。母親の命令に叛いた子供があつて、少しも罰せられないなら、彼は最早、母親の言を侮り、「僕は、したいやうにするんだ、」といふに至るであらう。

私共がカルバリ山の上で神の子が死に給へる事によつてのみ、罪を赦される事を認識するとき、罪の甚だ恐るべき事、神の律法が偉大にして聖なる事の幾分を知ることが出來る。「我ら敵たりし時、御子の死によりて神と和くことを得」(ロマ五・一〇)

一七、キリストの死によつて、なぜ誰でも救はれる事が出來ますか。

キリストは神であり、また人で在し、全く聖い御方でした。自ら進んで死に給うたから、其の死は無限の價値あり、かつ全人類に救を與ふる道となりました。

一八、キリストの血は、凡ての罪より潔むとは、どういふ意味ですか。

キリストの血が凡ての罪より潔むとは、彼が罪人のため血を流し、死に給うた事により、彼を信じ、罪を悔改め、神に來る者の罪を潔め給ふとの意味です。

キリストの犠牲により、罪の赦さるる道を開き給ひしは神である。

(一)神として。彼の犠牲は測り知ることの出來ぬ價値がある。如何にして聖き神が、罪ある私共のために死に得るかといふ理は、私共の頭には了解の出來かれる奥義である。しかし私共は彼が事實に於て死に給うたを知り、この事を讃めるのである。(コリ後五・一九)

(二)人類は罪を犯した結果、死に定められた。イエスが人となり給うた以上、彼は人類の罪のため、死に給はねばならなかつた。「キリスト・イエス、人の獄にて現はれ……死に至るまで十字架の死に至るまで順ひ給へり。」(ピリ二・五——八)

(三)若しイエスが一つでも罪を犯し給うたなら、彼の犠牲は益なきものである。(ヤコ二・一〇を見よ)しかし彼は何ら罰せらるべき罪がなかつたので、罪人に代つて苦しむ事が出來給うた。「主の現れ給ひしは罪を除かん爲……主には罪ある事なし、」(ヨハ壹三・五)

尙これに加へて、彼は自分から進んで死に給うた。此の事が彼の犠牲をして一層價値を增さしめる。「キリスト……我らの爲に己を犠牲として神に獻げ」(エペ五・二)

一九、キリストの贖によつて、私共はどんな助を受けますか。

神様はキリストの犠牲を受入れた印として、彼を死より甦らせ給ひました。この事によつて、私共は彼の犠牲により救はれ、次第に惠を經驗し、また救主の如く贖ることが確かとなりました。

證書に捺印されるは、その契約が結ばれたしるしである。例へば英國太憲章の捺印はそれである。若しキリストの屍が、墓に殘つてゐたなら、私共の救はるる望はなく、墓の向ふに對する望もない。彼の復活は次の事項を確實にする。

(一)父なる神は彼の罪人の爲に拂ひ給へる犠牲を嘉納し、彼らの罪を正當に赦し給ふ事。

(二)キリストは死に勝ち給へる御方であり、時來らば彼を信ずる者も亦、同樣の勝利にあづかり得る事。「もしキリストも甦り給はざりしならば……汝等なほ罪に居らん。……されど正しくキリストは死人の中より甦り、眠りたる者の初穗となり給へり、」(コリ前一五・一七、二〇)(またコリ前一五・二一、二二。ロマ八・三四を見よ)

二〇、イエス・キリストが、神様の右に昇り給うた事は、どんな助となりますか。

キリストは天に昇つて後、ペンテコステの日に聖靈を降し、また天にて私共のため、執成して居て下さいます。

イエスは天の父なる神の御許に歸り給へる時、弟子たちに聖靈を降すと約束された。「われ父に請はん、父は他に助主をあたへて、永遠に汝らと偕に居らしめ給ふべし」(ヨハ一四・一六)(またヨハ一四・二六。一五・二六及び使徒一・八を見よ)

弟子達はイエスの御言を固く信じたので、イエスが彼等の間を去り給うても、泣きかなしまないで、反つて喜に滿ち、エルサレムへ歸るや、その約束の惠が與へられるのを待ち受けた。(ルカ二四・五二、五三)これはペンテコステの日に當り、彼らの上及び世界に與へられるに至つた。(使二・一——四)

執成とは甲の人が乙の人のため、嘆願したり又は詐へたりするの意で、イエス・キリストは私共の神に對する大なる執成者である。

十字架上にて大なる犠牲を拂ひ給ひし後、天に昇り居給へるイエスは、神の愛、正義及び恩惠を十分に取次ぐに足るのである。「キリスト・イエスは神の右に在して、我らの爲に執成し給ふなり」(ロマ八・三四)(またヘブ七・二五及びヨハ壹二・一を見よ)

二一、イエス・キリストの犠牲により、どんな恩惠が與へられますか。

キリストの犠牲により、私共の罪が赦されて、潔められ、幸福かつ有要なる生涯を送り、天にては神と偕に住み得る者となれます。

キリストの犠牲により、私共の過去の罪は赦され、現在は祝福をうけ、將來は榮光あるものと、せらるることが出來る。「我なんぢの愆を霧のごとくに消し、なんぢの罪を雲の如く散せり」(イザ四四・二二)「おのが道をなほくしてエホバの律法をあゆむ者は幸福なり」(詩一一九・一)「復きたりて汝らを我がもとに迎へん、わが居るところに汝らも居らん爲なり」(ヨハ一四・三)

二二、イエス・キリストの御蔭で誰でも救はれますか。

キリストは萬民の爲に、死を味ひ給ひましたから、誰でも救はれます。(ヘブ二・九)

二三、誰でも救はれますか。

誰でもが救はれるのではありませぬ。罪を悔改めず、救を受けようとせぬ人は、救はれませぬ。

救命艇が小いため、沈没しつつある船の乗員全部を救ふことが出來ない場合があるかも知れず、また避火梯子が短かくて、火に迫つめられた者共の居るビルディングの頂に達しない事もあらう。斯る場合、死に直面せる人人の、もだへる狀を見るは眞に痛しい事である。しかし神が立て給へる救の道は廣大にして、一切の人々を救ひ得て餘がある。かくも愛に富み給ふ義しき神が、誰かを救はずに殘し給ふとは、毛頭考へられない。「視よ、これぞ世の罪を除く神の羔羊」(ヨハ一・二九)「人なるキリスト・イエス……彼は己を與へて凡ての人の贖償となり給へり」(テモ前二・五、六)(またイザ五三・六。ヨハ三・一六。四・四二。コリ後五・一五を見よ)

聖書の教によれば、若し人が救はれないなら、責はその人にある。何故なら救の恵は凡ての人に與へられて居るものだからである。若し水に溺れる者が、自分を救ふために投ぜられたる救の綱を押しのけ拒絶したため、亡んだとすればその責は當然かれの負ふべきものである。「我は活く、われ惡人の死ぬるを悅ばず、惡人その途を離れて生くるを悅ぶなり、汝ら翻りて其の道を離れよ、イスラエルの家よ、汝らなんぞ死ぬべけんや」(エゼ三三・一一)

(教訓)貴下が未だ救はれて居ないなら、神の與へ給ふ恵を拒絶するな。神は明かに、「今日は救の日なり、」と仰せられて居るではないか。

第五章　聖靈

一、聖靈とは、どんな御方ですか。

聖靈は三位一體の第三位の方で、眞に神樣であります。

聖靈はイエス及び天の父と同樣、まさしく活きて居給ふ方である。彼は或物ではなくして、或る御方である。(英語を使用する所では、その生徒に語るさき聖靈を「それ」「これ」といはずして、「彼」「お方」として敎へればならぬ)さり乍ら聖靈はイエスの如く、人の目に見ゆる姿をもて、私共に現れ給はないとは雖も、彼の來り給ふは、恰も斯の如しとて、私共の理解を助けるため、次の如きものに例へられた。

(一)鴿。罪なく平和の御方として。(マタ三・一六)

(二)吹き來る風。目には見えざるも、力ある方として。(使二・二)

(三)火の焰。透徹及び聖別する方として。(使二・三)

二、聖靈は私共人類に、如何なる事をなし給ひますか。

聖靈は私共の心に働き、罪を深く認めさせ、新に生れしめ、救はれたるを示し、信仰の生涯を進ましめ、神の御用を爲すに、相應しき者となし給ひます。

救は凡ての人の爲に用意せられてゐるが、罪人の心は頑固で曲つて居るので、救はれようとしない。彼らは神を忘れ、自分勝手な世渡を好み、罪を愛して之を離れようとはしない。聖靈は此の人々の心中に働き、その頑固を碎き、反逆心を除き、神に從うて救を得しめ給ふ。

かの放蕩息子は遠國にあつて長いこと罪の生活をなし、父親の心痛をも顧なかつたが、時が來た折いうた。「起ちて我が父にゆき、父よ我は天に對し、また汝の前に罪を犯したりと言はん」(ルカ一五・一八)と。聖靈は實に此の從順な心を人々に起さしめ給ふ。

三、聖靈は如何にして、罪を深く認めさせ給ひますか。

聖靈は私共に、罪の甚しき惡なること、及び罪から救はれる望は、ただキリストにあることを、深く認めさせ給ひます。

この罪を深く認めるとは、或る種の大罪を普通に一寸の間考へたり、又は自分は罪人だと輕く認めるのとは違うて、もつと深く强い意味がある。聖靈が罪を認めしめ給ふや、その人は、

(一)その罪を考へて不愉快ならしめ給ふ。それ故、恰も心と頭とに、重荷を負うたが如き感じが起つて來る。

(二)この赦されてゐない罪のため、神に會ひ奉つた時、どうしたらよいかと恐れる。

(三)熱心に救はれん事を求める。(ルカ一八・一三。使二・三七。一六・二九、三〇)

この罪の重荷は、そんなものは無いと僞ることや、將來に正しきを行ふと決心すること、或は此の世の快樂を以て紛らさうとしても、心から消えるものではない。「かれ(聖靈)來らんとき世をして罪につき……認めしめん」(ヨハ一六・八)

聖靈は又、この恐しき重荷が、イエスの十字架の下に於てのみ、除かれるとの事を教へ給ふ。かの「天路歴程」に出て來る基督者は、或る所に來た時、向ふに十字架があるを望み、下の方に墓のあるを見た。その時、彼の負へる重荷の繩は解け、彼の背から落ちはじめた。そして轉々ところがり、遂に墓穴に入るや、もう重荷は再び見えなかつたとある。

四、聖靈によつて新に生れるとは、どんな事ですか。

聖靈は私共の心を變化し、靈的生活を始めさせ給ひます。

五、聖靈はどんなにして、私共に救はれた事を示し給ひますか。

聖靈は眞心から悔改め、イエスに賴る人々の心に、罪の救された事と、神の惠が來た事とを、はつきり示し給ひます。

示す又は證すとは、何らの疑ない事を、語り告げるとの意である。或事に就いて確證を與へられるとは、その事に關して、完全なる確實性を知ることになる。その如く私共の心を知り給ふ聖靈は、私共の救はれた時を知り、其の人に此の事が確實であると示し給ふ。この事を「聖靈の證」ともいふ。之は時々變化する感情によるものではない。成程、私共は時に悲しみ、痛み、また惱むであらう。しかし此らの間にあつても、本當に救はれた者は、パウロの如く、「われ我が依賴む者を知る」（テモ後一・一二）といひ得るであらう。斯く言ひ得るは、私は「救はれたいものだ、」或は「救はれたやうな氣がする、」等と告白するより、どれだけよいかわからぬ。

「神の子を信ずる者は、その裏にこの證をもち」（ヨハ壹五・一〇）「御靈みづから我らの靈とともに我らが神の子たることを證す」（ロマ八・一六）

（教訓）貴下にして若し、「私は凡ての罪を赦されてゐる、」と言ひ得ないなら、只今、救主を求めるがよい。

六、聖靈は救はれ人の靈的生活を、どんなに御助になりますか。

聖靈は救はれた人が願ふなら、彼を導き教へ、潔めて保ち、試煉や困難の時に負けぬやう强め、かつ慰めて下さいます。

七、聖靈は神の民が、どうして奉仕するに適する者となし給ひますか。

聖靈は神の民を御用の爲に召し、奉仕に必要なる愛と信仰、智慧と忍耐及び勇氣を與へ給ひます。

神の御用に召される者は、ごく平凡な家庭や、或は職業から出で來るが、聖靈によつて能力を加へられ、神の働に於ては屢々偉大なる者となる。聖書を見ても此の事は明白であらう。ダビデは牧羊者、エリシヤは百姓、使徒のうち四人迄は漁師であつた。近世に於てもリビングストンは機織職人、ケレーは靴屋、メリー・スレッサーと「女工の市場」と稱せられたる人々は、工場の女工であり、我らの創立者も亦、店に働いてゐた。彼らが如何なる者であつたかは問題ではない。ただ聖靈の導に彼らが如何に服從したかが、大人物たらしめた所以である。

（コリ前一・二六——二八を讀め）

私共も亦、この世界に在つて正しく神の御業を勵むため聖靈の御指導が必要である。有難いことにイエスは、神が喜んで與へて下さるといふ次の如き御約束をなし給うた。「さらば汝ら惡しき者ながら、善き賜物をその子らに與ふるを知る。まして天の父は求むる者に聖靈を賜はざらんや」と。

（教訓）聖靈は最も謙遜なる人を用ひ、神の御用に適する生涯を送らしめ給ふ。

八、聖靈の御働を、なぜ火に譬へますか。

聖靈は罪を除き、心を潔め、神に事へる力を與へ給ふからです。

洗禮ヨハネはイエスに就き次の如くいうた。「彼は聖靈と火とにて汝らにバプテスマを施さん」と。（マタ三・一一）またペンテコステの日には、「また。火の如きもの舌のやうに現れ、分れて各人の上に止まる、彼らみな聖靈にて滿され」（使二・三、四）

火は私共の日常生活に於て、次の如き働をなす。

（一）汚れたものを燒きつくす。大都會では大きな爐を備へ、廢物を集めて燒き棄てる。

（二）金屬をきよめる。金屬がまた粗雜な材料と混つて居るや高熱にかけられる。すると其の滓は上部に浮き、純粹の金屬は下部にたまる。

（三）力を與へる。多くの機械は蒸氣の力で動いてゐる。機關車を見よ、どんなに完全に出來たとて、若し火を燃さずば、少しも動かぬであらう。

九、聖靈は何時から働き給ひましたか。

聖靈は最初から働き、各方面に於て人間を助けて居給ひます。

舊約聖書には、神が特別の御用に召し給へる人々に、聖靈が臨み助け給へる事が記されてゐる。ベザレルは神に召され、幕屋に用ふべき諸調度を製作した人であるが、聖靈が助けて最も美しくて、こまかしい品々を造つた。（出三一・二——五）キデオンは又、同胞を暴虐なるミデアン人から救ふため召されたる人なるが、彼も亦、聖靈の御助を受けた。（士六・三四）

ダビデは聖靈に依頼みたる時、次の如く祈つた。「汝のきよき靈を我より取り給ふ勿れ」（詩五一・一一）と。ペテロは又、舊約聖書が著述された事に關し、「人々聖靈に動かされ、神によりて語れるものなればなり」（ペテ後一・二一）というた。

一〇、ペンテコステの日に起つた特別の出來事は何ですか。

ペンテコステの日には、弟子達が特別に聖靈を滿され、イエスの福音を語り、神の國を打建つるに適する人物とせられました。

一一、神の民は誰でも聖靈に滿されますか。

神樣は其の民の凡てが、聖靈に滿されるのを望み給ひます。

イエスの死に給へる時と復活の頃は、ユダヤ人を除いて全世界は、異教の暗き狀態にあつた。恰も四國位の大きさなるパレスチナ以外の地では、イエスと彼の人類になし給へる御業とを知る者はなかつた。かくてイエスは、

救の福音を全世界に宣べるべき責任を、弟子達に委ねて、天に歸り給うた。「全世界を巡りて凡ての造られしものに福音を宣傳へよ」（マル一六・一五）

さり乍ら弟子達を見るに、彼らは弱く、愚かであり、懼に滿ちて、此の大任を果するには、甚だ不適當であつた。それで第一のペンテコステの日に當り、聖靈が降りて彼らに臨み給うた。その結果、彼らは勇氣、能力、智慧など、凡そ此の大任を果すに必要なるものを與へられた。イエスは昇天なし給へる前、次の如く弟子達に語り給うた。「されど聖靈なんぢらの上に臨むとき、汝ら能力をうけ……地の極にまで我が證人とならん」と。（使一・八）

この大なる聖靈の賜物は、ひとり初代の弟子達のみに與へられたものではない。ペンテコステの日に於ける聖靈は、曾て見なかつた方法で此の世界に臨んだ。それでイエスを心から愛し、心を盡して奉仕せんとする者も亦、初代の弟子達に來り給へる如く、自分たちにも臨み、よく御用を勵み得る者とせられるよう、神に祈り求めることが出來るのである。「御靈にて滿されよ」（エペ五・一八）「神いひ給はく、末の世に至りて我が靈を凡ての人に注がん、汝らの子女は豫言し、汝らの若者は幻影を見」（使二・一七）（また使二・三八。ロマ五・五。八・一四を見よ）

一二、聖靈はどうしてその御旨を、私共に御示しになりますか。

聖靈は直接に私共の心に御旨を示し、また聖書や有益な書物及び神を信ずる人々の行や言、其の他の方法でお示しになります。

次の實例を見よ。

（一）エテオピヤの權官が馬車で荒野を旅するとき、ピリポは聖靈の命によつて近づき、同じ車に乘つてイエスの事を語つた結果、そのエテオピヤ人は救はれた。

（二）聖書販賣人が、印度の一村民に聖書を賣つた。數年後、一宣教師が其の村を訪れると、其處に立派な基督者が多く居るのを見出した。誰も先生は居なかつたのではあれば、以前に買求めた聖書を讀み、その異教を棄て、イエスを信じて生活して居たことがわかつた。

（三）若き一救世軍人あり、彼はブレンゲル中將著の「聖潔の栞」を讀み、次の如くいうた。「私は之を讀みつつ、幾度も祈つた。そして讀み終らないうちに、長に間、望んで居た惠を與へ給へと神に訴へた」と。

（四）一少女義勇團員があり、若い士官の葬式に列席し、その人の人格及び奉仕につき聞いてゐた。時に感じたことは、「私も其の通り士官とならねばならぬ、」といふ事であつた。そして今日では、士官として有要なる奉仕を、はや數年間讀けてゐる。

以上の如き實例に於て、意味は別々ならんも、聖靈が神の御旨を示し給うた事は明白である。

（教訓）聖靈の語り給ふ所が如何であれ、貴下は之に耳を傾け、かつ從はればならぬ。

一三、聖靈の御聲に逆ふ者に對し、彼はどうなさいますか。

聖靈は忍耐深き御方であり、人々を強いて神に仕へさせなさらぬけれど、いつまでも逆つてやめない人には、罪の結果、遂に滅亡に陷るのを、放つて置き給ひます。

一四、聖靈に逆いた人は、救はれる望がないでせうか。

神様は大なる惠により、凡ての人を救ひたいと望み居給ふので、誰でも救はれる望がありります。しかし聖靈を憂へしめたり、輕く善良にならんとする如き態度は、なほ聖靈に逆うてゐる事で、恐るべき事と知らねばなりませぬ。

聖靈はその導に從はぬ人々に對し非常に優しく、また忍耐深く在す。その程度は、今日まで一番やさしく、また忍耐ぶかくわが儘な子女を世話した親以上である。しかし乍ら聖靈は私共の自由意志を曲げてまで、干渉をなし給はぬ。

人が若し罪に執着して離れず、また己に對する最も大切な事が見えないなら、それは取も直さず、心を閉ぢて神を見ざる事であり、最後にて悲しい事ながら、神が自ら其の人から遠ざかり給ふ。そして遂に救を求める機會が失はれる。この事に關するパウロの忠告は、實に嚴肅なものといへる。「神の聖靈を憂ひしむな」(エペ四・三〇)「御靈を熄すな」(テサ前五・一九)(またヨハ三・一九。五・四〇。使七・五一を見よ)

第六章　救

一、救はれるとは、どういふ事ですか。

救はれるとは、キリストのお蔭で、三つの大きな祝福を神様から戴くことで、第一は罪の赦、第二は心の變化、第三は神の從順な子供となる事です。

救はれるといふ事は、惠の座に跪くとか、救世軍の制服を着るとか、樂隊に加はるとか等いふ事よりは、もつと深い意味がある。成程、これらの事はみな、それぞれ助になるけれども、よしこれらの事が一つも無いとするも、尙救はれることは出來る。

救とは私共では如何とも出來ぬ或事を、神が私共の爲にして下さるといふ。創立者が未だ少年であつたとき、靴屋へお使に行つた所が、その主人は眼鏡越に彼を見つめていうた。「ウイリアム・ブースよ、お前は宗教といふものが、自分以外の所から來る或物だといふ事を知つてゐるか」と。「凡ての人に救を得さする神の恩惠は既に顯れて」(テト二・一一)とある。

二、罪の赦とは何ですか。

罪の赦とは、神様が私共の、過去の惡事をみな赦し、もう心にとめ給はず、罪から解放ち、惠んで下さる事です。

神は或人の「僕は赦してやるが、しかし決して忘れはしないぞ、」などいふ如き事をなさらぬ。彼が一旦赦し給ふや、もう其の罪を心で留め給はないで、反つて私共が一度も罪を犯さなかつた時の如く取扱ひ給ふ。(實例)一少年が救はれたる後、過去の惡事を思ひ起して悲しんだ。すると友の一人が石板に次の如く書いた、「私の罪」と。

そして直ぐ消してしまひ、「今の字は消えてしまつた、」といひ、言を續けて、「その如く若し神樣が、君の罪が赦し給うたのなら、もう今迄の罪は消えてないのだ」と。「この後また彼らの罪と不法とを思ひ出でざるべし」（ヘブ一〇・一七）

罪の赦された事を知つた時の喜は、この世界で例へることの出來ない大なる喜である。キリスト者が其の罪の重荷を解かれた時には、その心がさても輕々しく、所謂、「三度躍上り、歌ひつつ其の道を往く、」といふ喜に達する。

三、罪を赦すことの出來る唯一の御方は誰ですか。

凡ての罪は皆、神樣の律法に叛いた事である故、私共の罪を赦すことの出來るのは、神樣だけであります。

神の律法は、私共に正しく、潔く、誠で且つ愛ある者たれと求めてゐる。それ故、僞、殘酷その他の惡事は、みな神の律法に叛くことである故、その赦はただ神からのみ與へられる。イエスの譬にある稅吏は、多分、屢々不正直な事をしたであらう。之は單に人々を欺いたばかりでなく、また神の律法に叛いた事となる。「汝盜むなかれ」（出二〇・一五）この稅吏は自分の罪を深く悟り、神に赦を求めていうた。「神よ罪人なる我を憫み給へ」（ルカ一八・一三）

四、私共は自分の行爲によつて、その罪を赦すことが出來ますか。

私共は自分の行爲によつて、己が罪を赦すことは出來ませぬ。罪の赦はキリストが、私共のため爲し給へる事によつて、與へられるものです。

赦といふのは仕事に對する賃金の如きものとは違ふ。又は集會に出席し、祈をなし、貧乏人を見舞ふなどの、善事に對する賞品の如きものとも違ふ。成程、これらの事は價値多き事には相違ないが、しかし私共の罪を赦すことは絶對に出來ない。この罪の赦といふのは、イエスの功の故に、神のみが自由に與へ給ふ惠である。

ああ神の羔羊よ、あなたは我が爲に血を流し給ひ、わが許に來れと宣へば、我は何も言譯せず、有のまま御聲に隨ひて御許にゆく。

「神の賜物は我らの主キリスト・イエスにありて受くる永遠の生命なり」（ロマ六・二三）（またマタ七・二二、二三を見よ）

五、神樣が罪を赦し給ふのは、漸次にですか、又は即座にですか。

私共が神に救はれ、その過去の罪を赦されるのは、即座のことです。

神が私共の罪を赦し給ふのは、お互が思ひ起す度に少しづつ赦し給ふのではない。若し私共が眞實に悔改めるなら、過去の罪は全部、よし忘れて居る罪までも悉く、即座に拭ひ去られてしまふ。（實例）デッド・ロスといふ老人があつた。彼は一生の大部分を刑務所で暮した男である。少年のとき或る罪を犯したのが元で、オーストリヤの徴役所に送られた。そして幾度も九本紐のついた鞭でうたれた。しかし放免されると直ぐ元の罪を犯すのである。ところが最後に、もうすつかり老人になつてからのこと、救世軍ホームの惠の座に來り、神に赦を求める

や、過去五十年間の數々の罪が即座に赦され、デッドは全く新しい人となつた。

（教訓）神は今、貴方の凡ての罪を赦すことが出來、また斯せんことを望み給ふ。

六、心の變化とは何ですか。

心の變化とは私共の罪が赦される時、聖靈によつてなされる不思議なる御業で、イエスは此の事を「更生」といはれました。（ヨハ三・三）

七、心の變化によつて、どんな事が起りますか。

心の變化によつて神と善とを愛する心が起り、罪を憎み、正しきを行ひ、惡に抵抗する力と、神を喜ばせ奉るといふ、新しい人生の目的が與へられます。

若し神が私共の罪を赦し給うた後にも、罪深い心が其の儘であるなら、お互は間もなく以前の罪に歸るであらう。（實例）若し時計の機械が惡いのなら、どんなに針だけ正しく直しても、何の役にも立たぬ。しかし有難いことに、神が私共を赦し給ふなら、パウロの言へる如く「新に造られたる者」とせられる。（コリ後五・一七）

この大なる心中の變化は、外部の生活にも、大なる變化を齎らす。例へば、大競走、賭事、活動見物、不潔な書物を讀むこと、馬鹿げた話や、下品な歌など、世俗的の樂しみには、興味を失うてしまふ。また若し私共が救はれない時に、亂暴、無作法かつ利己であつたなら、柔和で禮儀正しく、また他人の事を顧るやうになつて來る。もはや惡事の誘惑に負けず、神の御助により、「否」といふ事が出來る。そして正義を行ひ、神を喜ばせ、かつ他人を助けて祝福する事などが、自分の樂しみとなる。

「キリスト、父の榮光によりて死人の中より甦らせられ給し如く、我らも新しき生命に歩まんためなり、」（ロマ六・四）「おほよそ神より生るる者は世に勝つ」（ヨハ壹五・四）（またロマ六・一四。ヤコ四・四。ヨハ壹三・七、一四を見よ）

八、神の子とせられるとは、どういふ事ですか。

神の子とせられるとは、神樣の從順な子供として、その家族に加へられる事です。

或る見方によれば、私共は皆、神の子供である。彼によつて造られ、愛せられ、必要な物を與へられてゐる。（第二章の答一五、一七及び一八を見よ）けれども救はれないうちは、反逆の子供である。所が其の反逆の精神を棄て、神の御意に從ひ、更生の經驗をするとき（第六章答六を見よ）特別の意味で、神の子供となる。ここに於て神は、本人が救はれなかつた時には、爲し得給はなかつた多くの事を、彼の上に行ひ給ふのである。

善良な父親は、その子供らと喜や悲しみを共にする。また出來る限り、彼らの健康と幸福とのため心配し、危害の及ばぬやう保護し、かつ將來有要なる者となるよう心を用ひる。その如く彼らが若し從順なる神の子供であるなら、彼に頼り其の權威を認め、また彼を喜ばせ奉る事を悦ぶ。この變化は、彼らが神の子とせられ、その家族に加へられた時に起るのである。

「汝らは……子とせられたる者の靈を受けたり、これによりて我らはアバ父と呼ぶなり」（ロマ八・一五）（またヨハ一・一二。ガラ四・四、五。マタ五・四四、四五を見よ）

（教訓）貴下が若し悔改めた者であるなら、從順な神の子として生活せん事を日々に勵め。

九、救の條件とは何ですか。

救には二つの條件があり、悔改と救はるべき信仰とであります。

一〇、悔改とは何ですか。

悔改とは、神樣に對して犯せし罪を、心から悲しむ事です。

この救の條件とは、私共が神の救をうけるとき、必ず爲されねばならぬ事である。（實例）切符を買ふことは、汽車で旅行せんとする者の爲すべき條件である。

或る人々は己が惡事が發見せられ、罰を蒙つたときにのみ悲しむ。そんな人は、若し發見されなかつたなら、何時までも其の罪を續けるのである。本當に罪を悲しむ人は、その罪の結果を悲しむに非ずして、罪そのものを悲しむ。この事を聖書には、「神にしたがひて憂ふ」とある。（コリ後七・一〇）ペテロがイエスを三度までも否みたる後、悲しみたるは此の種のものであつた。「外に出でて甚く泣けり」（マタ二六・七五）

一一、私共は眞の悔改をする時、どうせねばなりませぬか。

眞の悔改をするとき、先づ熱心に神を求め、己が罪を憎んで之をやめ、神に告白して其の赦を求めねばなりませぬ。また犯せし惡事を、元通り正しくなし、神の命

に從ひ、かつ彼を喜ばせんと努めねばなりませぬ。

私共が罪から離れず、之をやめない限り、赦されない。よし涙を流しても、善き願を有つても、また新つた所で役に立たぬ。過去に行うた惡事を、出來るかぎり、元通りに正しくせんため努力する事は、最も辛い事である。しかし之を行ふ事は赦をうける道である。（實例）一女生徒あり、作文で賞を受けた。所はそれは他の文章の寫であつた。けれども彼女の心には平安がなくなり、その惡事を學校に告白し、賞品を返したので、初めて良心の滿足を得たといふ。「その罪を隱す者は榮ゆることなし、然れど認らはして之を離るる者は憐憫をうけん」（箴二八・一三）（またイザ五五・七。ルカ一九・八。使八・二二を見よ）

一二、救はるべき信仰とは何ですか。

救はるべき信仰とは、キリストが私共のために死に給うた故に、神樣は私共の罪を赦し、從順な子供として、受入れて下さると信ずる事をいひます。

救はるべき信仰とは、單に救を信ずるといふよりは、深い意味があつて、之は救を受ける時に、なくてはならぬ信仰である。私共はイエス・キリストに由て、神に歸る者を救ひ給ふ彼の御約束を信じ、その御許に往き、神は今この場にて救ひ給ふと信ずるとき、この救はるべき信仰を働かさねばならぬ。（實例）一少年が「今日、父は私のためスケート靴を買つて下さる」というた所が、一友人が、「どうしてわかるか」と尋れた。少年は答へていうた。「父が約束されたからだ。そして父は一度も約束を違へた事がないからだ」と。「求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん」（マタ七・七）「我に來る者は、我これを退けず」（ヨハ六・

三七)(またヨハ三•一四、一五。五•二四。ヨハ壹一•九を見よ)

一三、悔改と信仰とは、罪人を救ひますか。

悔改と信仰とは、救はれるのに必要ではあれど、私共を救ふことは出來ませぬ。ただ神の惠によつて救はれるのです。

(實例)病人が醫師の所へ往いたからとて、その病氣は醫されない。彼は已が醫されたいとの願を告げ、醫師の力を信用しなければならぬ。この願と信用とが、醫師の治療手當となつて來る。その如く救に於ても同樣で、私共の悔改と信仰とは、恰も醫師に往いて彼を信ずる如きもので、私共が神の御手に委れるや、彼は救といふ大なる御業を爲し給ふのである。

一四、神樣の惠とは何ですか。

神樣の惠とは、値打なき罪人に對する神樣の限りなき愛で、キリストの犧牲と、悔改めて信ずる凡ての人に、豐に注がれる助と慰めとに表れて居ます。

神の惠は私共が、イエスの御事を考へる時にのみ了解出來る。イエスの比類なき御生涯は、言語に絶したる神の美しき御性質を示してゐる。イエスの祝福に滿ちたる御言を思出せ。(註解第四章、答一三を見よ)また幼兒に柔しく、悟の鈍い弟子達に忍耐深く、惱める者に親切で、かつ悔改めたる罪人に、いと優しかつた事を知りたい。

その十字架上の死は、神の限りなき惠を示す以外に何物でもなかつた。私共の心からなる讃美、心の奥から出る愛、また最も眞實なる奉仕を呼び出すものは、實に此の大なる惠に外ならぬ。

罪の力と其の罰より我らを救ふ御惠は測り知られず、それ故、我らが惠ある主に奉る讃美も亦、測り得られず。

「恩惠と眞理とはイエス•キリストによりて來れるなり」(ヨハ一•一七)(またヨハ一•一四。テト二•一一。ヘブ二•九を見よ)

一五、私共の救はれて居ることは、どうしてわかりますか。

私共が救はれるならば、四つの徵があります。

第一、心の中に與へられる聖靈の證明。

第二、神樣を喜ばせ奉る新しき願。

第三、正しき事を行ふ新しい力。

第四、他の人々にもわかる所の生活の變化。

この最初の二つは、心の中に與へらるるもので、若し之が事實なら、本人と神とのみ知る所のものである。正しきを行ふ力も亦、內部的のものながら、之は有要に用ひられねばならぬ。それ故、單に「私は正しきを行ふ力を有す、」といふだけではいけない、どうしても之を事實に現さねばならぬ。また私共が救を受けたる後も、一向

その生活が以前と變化せず、圍の人々と同じやうな行爲をしてゐるなら、私共が本當に回心したか否かを怪しまれても仕方あるまい。(實例)一少女が悔改の座に跪きたる後、救世軍の制帽を被りたいと望んだ。しかるに集會中、ゲラゲラ笑つたり、話合うたり、又は無益な冗談をいうてゐたから、小隊長が彼女は本當に救はれたか、どうかと疑つたのも、止むを得ぬ事であつた。また一少年が、自分は救はれたと言ひ乍ら、相變らず小盗みをしてゐた。次の週になつて、彼の母は青年部曹長に、「うちの子供は少しも變りませぬ。毎日のやうに戸棚から銅貨を盗み出します、」というた。「我らその誡命を守らば、之によりて彼を知ることを自ら悟る」(ヨハ壹二・三)(またコリ後五・一五。ヨハ壹三・二四。四・一三を見よ)

一六、救世軍の集會では、なぜ人々を惠の座に招きますか。

惠を求むる人が惠の座に進む事は、本人の決心、謙遜、熱心、惠を受くる柔しき態度及び速に神樣の側に立つ等に就き、助となるからであります。

一七、惠の座そのものが、誰かに益を與へますか。

惠の座そのものは、誰にも益を與へませぬ。しかし私共の靈魂が神に親しく見え、祈り、御聲を聞くに適した所となります。

救世軍の惠の座に跪くことは、最も大切なる事である。それ故、救はれたいとの願もなく、また正しい生活に入らんとする考もなしに、輕々しく惠の座に跪いてはならぬ。

今日、世界中の幾百千の救世軍人その他の人々は、この惠の座に於て、神を愛し人々に奉仕する生涯の出發をした者である。野戰に於ては、屢々太鼓が惠の座となる。東アフリカその他の地に於ては、この太鼓の傍に跪き、救主を求める者が群り進むことがある。(指導者は此の問題に關する材料を、一九三四年の組會學課緒言及び他の年の同學課に見出すことが出來よう)

(教訓)惠の座を、神が跪ける人と親しく見え給ふ神聖なる場所として注意せよ。

第七章　救はれて後の生涯

一、私共は自分の努力だけで救を保ち、引續き神樣の慈愛のうちに居る事が出來ますか。

私共は神樣の御力と御助とによつてのみ、救を保ち、また神樣の慈愛のうちに居ることが出來ます。

二、神樣は私共が大なる困難と誘惑との中にあつても、私共を支へて下さいますか。

神樣は私共の困難と誘惑とが、どんなに大きくても、一生の間、私共を支へんと

欲し、また支へ得る御方です。

青少年は屢々歩むに困難な道に出遭ふ。時に貧乏、失業、反對又は病氣に惱むことであらう。斯るとき、正しき生活をなさんと試むる者の敵なる惡魔は、とても進み得ぬかと見ゆる迄に、甚しく試むるかも知れぬ。かかるとき彼らは次の注意がいる。

(一)神が平生と少しも變らず愛して居給ふ事を確信すること。

(二)イエスの御約束なる、「我は世の終まで常に汝らと偕に在るなり、」を思起すこと。(マタ二八・二〇)

(三)神が自分を支へ助け給ふと信ずること。神は「くらきにある所の者」(ダニ二・二二)を知り給ふ神で在す。「神は眞實なれば、汝らを堅うし、汝らを護りて惡しき者より救ひ給はん」(テサ後三・三)(またイザ四三・二。コリ前一〇・一三。ユダ二四を見よ)

三、私共が神様に守られる爲には、どうせねばなりませぬか。

神様に守られる爲には、引續き彼に從ひ、又お頼りせねばなりませぬ。

四、神様に從ふとは、どういふ事ですか。

神様に從ふとは、その誡命を守り、知れる限りの御意を行ふことです。

私共が我儘で神の誡命に逆き、その御意を拒んで居ながら、神の御守を望むといふ事は不可能である。神は次の事を通じて、私共に御意を知らせ給ふ。

(一)主として、祈と熱心とをもつて讀む聖書を通じて。

(二)私共が注意をもつて耳を傾ける時、賢く敎へてくれる神の僕を通じて。

(三)私共の内なる心に直接かたり、それが神の御聲であると敎へ給ふ聖靈を通じて。

(四)私共に物事の正邪を示す良心を通じて。

イエスに在りて幸福なる道は、信じて從ふ外にない。ただ信じて從ふ道のみ。

(敎訓)其の御意を喜んで行ふ服從心を與へ給へと神に願へ。

五、私共は自分達の上に置かれた人に從はねばなりませぬか。

聖書には各所に、私共が兩親に從ふを命じ、また主に在りて治める者、國や都市で權威ある者、他の正當なる上役の言に心を傾くるは、神の誡命に反くものでないと敎へてある。

物事を正しく考へる所の、分別ある人は然るべき權威者に從ふは甚だ大切である事を知つてゐる。神が人類に望み給ふ所は、或人が治め他の者が之に從ふといふ事である。斯せずば其處に平和、繁榮及び進歩がないからである。聖書中で最も惡かつた時代といふのは、「各人その目に善と見ゆるところを爲せり、」といふ時であつた。(士二一・二五)(この自分勝手な行動をする結果の家庭、小隊及び大洋を航海する船の狀態を心に描いて見よ)

パウロは其の書簡中に、服從の大切を屢々くりかへして敎へて居る。例へば「子なる者よ、なんぢら主にありて兩親に順へ」(エペ六・一)など。初代敎會の下士官或は長老に對して、「汝らを導く者に順ひ之に服せよ」(ヘブ

一三・一七）「僕たる者よ……眞心をもて肉につける主人に從へ」（エペ六・五）「凡ての人、上にある權威に服ふべし」（ロマ一三・一）之は爲政者に對するものである。

六、神樣の惠を引續き受くるため、心を込めて彼に從ふに當り、特に大切な點を言うて下さい。

私共が引續き神樣の惠を受くる爲には、よく祈り、聖書を讀み、イエスを證し、誘惑に勝ち、惡しき友を避け、他の人々を助けるため力を盡さねばなりませぬ。

イエスを告白するとは、貴下が彼の側にあることを發表し、眞の勇氣を示すことである。昔にあつては、此のために男女、子供までが牢獄に投ぜられ、また拷問、火刑、更にライオンの餌食にされた。今日では屢々冷笑、輩見狹き迫害、或は孤獨といふものへ投ぜられる。いづれも堪えるのに餘程の困難がある。しかしイエスは、「凡そ人の前にて我を言ひあらはす者を、我もまた天にいます我が父の前にて言ひ顯さん、」（マタ一〇・三二）と約束し給うた。（またルカ一二・八を見よ）

（實例）ラッドといふ一少年あり、救はれた翌日、仕事場でビールを持つて來いと言はれたので、實はキリスト者になつたから出來かねると答へた。すると仕事上の仲間は彼を嘲弄し、ビールを彼の上に浴せ、その道具を隱し、食物を横取した。しかし彼は固く信仰に立つて動かなかつたので、遂に友人らは彼に深く敬意を表するに至つた。

青少年たる者は、秘密事に加入せぬやう、また其の人々を他に賣る如き眞似をせぬよう氣をつければならぬ。「人に言ふな」といふのは、恰も赤い危險信號の如きものである。「わが子よ、惡しき者なんぢを誘ふとも從ふなかれ」（箴一・一〇）

（教訓）イエスを己が友としないやうな人々を、友達としてはいけない。

七、私共は救はれて後、どんなに信仰を續けたら、よいでせうか。

先づ、神樣が其の民になし給へる多くの約束を思起し、必要に應じて助け給ふ事を信じ、また一切の事を、私共の益となし給ふを知ることです。

神を信ずるとは、彼が善と眞とで在し、その約束し給へる所を悉く行ひ給ふと信ずる事である。私共は「神を信ぜよ、」（マル一一・二二）と命ぜられて居る一方に、「信仰なくしては神に悅ばるること能はず」（ヘブ一一・六）と示されてゐる。

「われ己の契約をやぶらず、己の唇より出でし事をかへじ」（詩八九・三四）「また約束し給ひし者は忠實なれば」（ヘブ一〇・二三）

八、救はれた後、もし罪を犯して神樣の御心を痛めた時には、どうしなければなりませぬか。

救はれた後、もし罪を犯して神樣の御心を痛めた時には、神樣が引續き愛し、罪を

悔改めて救はれるよう望み給ふを信じ、神様と惡をなした人とに救を求め、この後、再び罪を犯さぬよう助を願ひ、かつ心から神を信じねばなりませぬ。

私共は罪に陷らぬよう心がければならぬ。そのわけは特に或罪に對しては陷り易いからである。（ヘブ一二・一）或人にとつては惡癖、すれること、また不信實かも知れぬ。（適當に說明せよ）うつかりして居る時には、此等の罪や、他の罪に陷り易い。勿論、眞に救はれて居る者にとつては、これらの罪は實際、恥づべく且つ悲しい事であるが、同時に、その結果「私は救れてゐないのだ」等と高言するは、最であり、また惡い事である。斯る場合の賢い處置は、答の所に示されてゐる。（繰返して讀め）

（實例）或時、青年部曹長が、唱歌隊の一員に、その席を變れというた。すると彼女は、やけ氣味になつて「いやですよ、」というたまま、表に飛出した。しかし其の週間中、彼女は幸福でなかつた。けれども賢いことに、彼女は次の日曜日まで家に閉ぢこもつてゐないで小隊にゆき、曹長にお詫をすると共に、神の赦をもとめた。

九、幸福や愉快に感じない時でも、神様は私共を救ひ、また守り居給ふと信じてよろしいか。

私共が知りつつ神様に背いて居ないなら、よし感じはどんなでも、神様が私共を救ひ、また守り居給ふ事を信ずべきです。私共を神様に結ぶものは、感じでなくて信仰です。

一〇、若し度々失敗して、失望落膽した時には、どうしなければなりませぬか。

度々失敗して、失望落膽した時でも、信仰を失はず、益々神に頼らねばなりませぬ。私共に勝利を與へないのは、再び試みないことで、失敗そのものではありませぬ。

私共の感情を左右する原因となるものは、不健康、天候、寂寞又は失望など種々ある。しかし私共が信仰と服從とを固く守る限り、イエスの救と其の御保護といふ事實は絶對に變らない。それで若し氣が引立たぬ事があれば、それこそ一層、「イエスは今も救ひ居給ふ」との信仰を燃さねばならぬのである。お互は何處までも事實に立脚して、感情に左右されてはならぬ。成程、失敗は落膽の基には違ひないが、勇氣ある人々は、再び試みる決心が起る。そして成就するまで數回試みることもあれど、結局、最後には勝利を得るのである。（實例）若し赤坊のとき歩き始めるに際し、倒れるからとて失望し、再びも三度も幾度も繰返して試みなかつたなら、學校の生徒になつたからとて、遠路することは出來ぬであらう。

（教訓）萬一、貴下にして失敗したなら、心を新にして、今日もう一度イエスの御力により、やり直すがよい。

一一、私共が神様に背き續けるなら、どうなりますか。

私共が神様に背き續けるならば、その惠を失ひ、彼を愛する心が薄らぎ、また他の人々を助ける精神も無くなります。

一二、若し神様を愛する心が薄らいだなら、どうしなければなりませぬか。

若し神様を愛する心が薄らいだなら、それは全く自分が悪いのである等と考へてはなりませぬ。反つて熱心に神を求めて祈り、その命じ給ふ所を忠實に行はねばなりませぬ。かくすれば今一度神の惠を受け、また元通り神を愛する事が出來ます。

私共を神と正義とから、離れしむる如き事を續いて行ふは、甚だ危險である。斯る危險は、大抵の場合、神の誡命を無視したり、又は叛いたりすることが導火線となる。例へば、或る少年は時々「友達が惡に導いたのだ、」といふが、實は神が斯る不信實で、不信仰な者を、友としてはならぬと誡めて居給ふ。(箴四・一四、一五)また或る少女は、自分の惡い癖に就いて呟くけれども、神は「凡ての苦、憤恚、怒」(エペ四・三一)を棄てよと命じて居給ふのみか、私共を斯る罪から潔め救うてやると、約束を與へて居給ふ。

最も多く墮落の原因となるものは、神の誡命を守らぬことである。聖書に「絕えず祈れ」(テサ前五・一七)とあるは、常に神に心を向けて助と惠とを受けよとの謂であり、殊に必要な場合に餘計の事である。たとひ私共の愛が薄らぐとも、一二の答には、今一度其の惠を取戻すに必要な道を敎へてゐる。

(指導者は「墮落」といふ語を、青少年達に話すとき十分氣をつければならぬ)

一三、救はれた人でも、全く墮落する事がありますか。

救はれた人でも全く墮落する事があるばかりか、救はれる前より、もつと惡くなる事もあります。

一四、全く墮落するとは、どういふ事ですか。

全く墮落するとは、祈ることをやめ、知りつつ罪を犯し、悔改めようとしない事です。

私共が神から遠ざかりつつあるを知りながら、速に神へ歸らうとしないなら、聖靈の御助を受けることが、次第にむつかしくなる。のみならず、之は正しくなるに一層困難を來すばかりか、一方に惡事をしやすくなる。更に進んで罪を好み、神と聖き事とには、關心を失ふに至る。(實例)神はサウル王に新しき心を與へ給うたので、彼は偉大にして善良なる王となるべき筈であつた。しかるに我が儘と妬みとの罪を犯し續けたので、遂に神の御靈は離れ、戰場にて自殺をとげるに至つた。

一五、墮落の結果は、どんな事になりますか。

墮落は神を憂へしめ、神の民を悲しませ、神の御業を妨げ、己が心の平和を無くし、一切の善きものを失はしめます。それば かりか一層ひどい罪に陷らせ、若し悔改めないなら、遂に亡びてしまひます。

墮落も凡ての罪と同樣、盜人のやうなものである。神を離れた人から、次の如きものを奪ひ去る。

(一)神に惠まれてゐるとの自覺。
(二)心の平和と喜。
(三)自重自敬の精神。それで自分の弱點と罪とを嘆むに至る。
(四)神に奉仕する機會。
(五)天國に至る希望。

公然たる墮落者は、この世界で最も哀れな者である。(實例)曾て貧乏であつたが、後に富豪となつた人あり、彼は墮落してゐたが次の如くいうた。「私は今一度元の單純なる一救世軍人になるためには、全財産を失うてもいとはぬ」と。

(教訓)もし貴下が救はれてゐる人なら、曾て救世軍人たりし墮落者のため祈り、彼らを神に立歸らせんがため、全力を盡されよ。

一六、神様は墮落者を、どんなに扱ひ給ひますか。

愛ある神様は、墮落者の回復を切に望み、聖靈の活動を通じ、出來る限りの方法で盡されます。

一七、墮落者はどうすれば、回復出來ますか。

墮落者は先づ神に歸り、心から悔改め、墮落の因となつた罪を棄て、始めて救はれた時の通り、救はるべき信仰を働かせる事です。

回復するとは、元の持主又は場所などに、戻るの意である。病人が元の健康になり、失ひたる書が其の持主に戻るのはそれである。神は悔改めて信ずる墮落者を受入れ、喜んで始の時と同樣、その救の惠を與へ給ふ。(第六章答一を見よ)

創立者は曾て言はれた。「神の聖徒で最も優れたる者のうち、或る人々は各所を迷ひ歩いた經驗を有してゐる」と。神は屢々彼らに、神と人とに奉仕する大なる機會を與へ給うた。

(實例)「貧民窟の神」を著した人は、長い間、神の御許から離れて迷うてゐた人である。數年前、ラヂオの放送をきける時、跪いて神の赦を求め、神の御用を立てる者として、奉仕がしたいと獻身した。その結果、彼は今や世界に於ける神の力ある僕の一人となつた。

第八章　祈

一、祈とは何ですか。

祈とは神様とお話する事で、私共が神様に申上げたり、また其の御聲を聞くことです。

二、なぜ祈らねばなりませぬか。

神様を知り、之を愛し、私共の願を告げ、その惠を受くるために、祈らねばなりませぬ。

三、祈のうちには、どういふ事が含まれますか。

祈のうちには神の惠を感謝し、また私共はじめ他の人々の爲に、必要な願をする事を含みます。

人々は話によつて、數千里の遠きにある友と、恰も同室で話す如く談話をする。祈とは之以上に不思議なる事である。何らの器具を用ひず、ただ謙遜と信仰とを以て萬物の造主にして、全能の神と直接お話が出來るのであり、神も亦、御聲をかけ給ふのである。

祈は斯も驚くべき事ではあれど、事實は甚だ單純である。昔、豫言者が告げたる「其の我に何と宣ふかを見」(ハバ二・一)また「誘惑に陷らぬやう目を覺し、かつ祈れ」(マタ二六・四一)とある如く、ただ神に語り、神の宣ふ所を聞くことである。

感謝は祈の中に含まれるべきものである。神は私共が感謝の心をもて、その頂ける惠に對し、「ありがたう存じます、」といふ聲を喜んで聞き給ふ。この種の感謝を記錄したものは詩篇中に甚だ多い。(詩九二・一。一〇三・一、二。一〇六・一を見よ)

「何事をも思ひ煩ふな、ただ事ごとに祈をなし、願をなし、感謝して汝らの求を神に告げよ、」(ピリ四・六)(またテサ前五・一七。ペテ前四・七を見よ)

四、私なる祈とは何ですか。

私なる祈とは、他に知らせないで自分だけで神に祈ることとて、ただ一人で祈ることも、多勢居る場合、心の中で祈ることもあります。

五、何時、私なる祈をせねばなりませぬか。

私共は朝夕、または必要に應じて、私なる祈をせねばなりませぬ。

イエスは私なる祈の模範を示された。彼は多分、少年の時代から、屢々ただ一人でガリラヤの山や岡へ往き、父なる神に祈り給うたであらう。その結果、成人なされてからは、祈が樂しみとなり、また力の出所となつた。或時、彼は山に往き「神に祈りつつ夜を明し給う」た事があり、(ルカ六・一二)他の場合、安息日で非常に疲れ給へる翌朝、「朝まだき暗き程に、イエス起き出でて、寂しき處にゆき、其處にて祈りゐ給ふ」たのである。(マル一・三五)

イエスは又、山上の垂訓に於て、私共が單獨になり、「己が部屋にいり、戸を閉ぢて隱れたるに在す汝の父に祈れ」と敎へ給うた。(マタ六・六)心から神に私なる祈をせんと希ふ者は、祈が邪魔されない靜な所を見出さればならぬ。(實例)一工場に働いてゐる青年で、樂隊員をつとむる者があつた。彼は晝の時に當つて、平生使用しない物置にゆき、神に私なる祈をしてゐた。けれども若し、どうしても人々を避け得ない時には、車馬纏る如き往

來、多忙なる仕事場でも差支はない。心の中で、「神よ助け給へ」と祈るなら、神は必ず之を聞き給ふ。朝に於ける私なる祈をしない事は、朝飯を食べない事より一層善くない。また夕の祈を中止するは、その日、うけたる惠に對し感謝の意を示さないことになる。

六、共同の祈とは何ですか。

共同の祈とは、二人以上の者が、一緒に祈をすることです。

七、共同の祈では、どうしなければなりませぬか。

共同の祈では、心と願とを合せて祈り、また歌ひ、特に心に願ふ事に對しては「アーメン」といひ、また機會ある場合には、大きな聲で祈らねばなりませぬ。

普通、共同の祈は集會又は家庭禮拜のときなされ、誰かが代表的に祈るか、或は出席者がみなで、「めぐみ給へ、主よ今われを」などいふ歌や、コーラスを歌ふ。主は斯る場合に臨み給ふ。その御約束の言に次の如くある。「二三人わが名によりて集る所には、我もその中に在るなり」と。（マタ一八・二〇）

共同の祈では、兎角、私共の心が散り勝であるが、かかる場合、つとめて心を引しめ、祈に集中せねばならぬ。同時に心が散らぬよう、その眼を閉ぢる必要がある。

青少年の時代に、祈の際、その心を神に集中することを學ぶなら、力强き祈をする者となれるであらう。

祈では其の長さや、又は美しい言が神に届くといふのではなく、その眞實と熱心とが神にきかれるのである。（マタ六・五に主がパリサイ人の外見的な長き祈に對し戒め給へる所を讀め。一方、最初に於て、青少年を激勵し、つとめて短い祈、時にはほんの一句なれども、力ある祈をするよう敎へよ）

「この故に、われ望む、男は怒らず爭はず、何れの處にても潔き手をあげて祈らんことを」（テモ前二・八）（またロマ八・二六及び使四・二三——三一に記されたる力ある祈を見よ）

八、なぜ祈の時に跪くのですか。

祈の時、跪くなり、他の敬虔な態度を示すことによつて、神に對し尊敬の念を顯すからです。

九、神樣は祈にお答になりますか。

神樣は何時でも、祈にお答になります。しかし私共の考へたり、願うたりして居る通りの、時や方法で答へ給はぬ事もあります。

青少年に對する最も大切な事の一つは、神が祈に答へ給ふ、といふ事實に基いて、其の生涯を形づくらせる事である。この事は各時代に現れた神の僕らによつて證明されてゐる。エリヤはカルメル山で祈るや、神の火は天より降り、その犧牲を燒盡した。（王上一八・三六——三九）またペテロの友人達が祈るや、彼の投ぜられてゐる牢獄の扉が開けた。（使一二・五——一〇）更に聖書を英譯したとの廉で入牢せしめられたチンダルが、「神よ英國王の眼を開き給へ」と祈るや、王は數年後、己が領土の各敎區に英譯の聖書を備付くべき命を出した。ジョン・

ノックスが祈つたお蔭で、スコットランドは、宗教的の自由を得たのである。

神は今日も變り給はぬ。最も卑しき者の祈にも答へんとて待つて居給ふ。(實例)一候補生あつた。貧民街の一軒に入ると重病に惱む一婦人があり、次の如くいうた。「神が貴君を送り給うたのは感謝です。實は隣の町に住んでゐる私の娘で、まだ救はれてゐない者があり、誰か彼女を救に導く人を送り給へと祈つた所でした」と。「なんぢら我が名によりて願ふことは、我みな之を爲さん」(ヨハ一四・一三)(またヨハ一五・七。一六・二四。エペ三・二〇。ヨハ壹五・一四を見よ)

一〇、神様の御意に適うて祈るとは、どういふ事ですか。

神様の御意に適うて祈るとは、神様が私共に與へんと欲し給ふ所を願ひ、また若し其の願が神様の御考に添はぬ時、彼が最善と認めてなし給ふ所に、快く從ふことであります。

私共の希ふ所と、心要とは必ずしも同一ではない。神は私共の必要を充すとの約束を與へて居給ふ。(ヒリ四・一九)しかし私共は、神が御覽になつてお互の爲に最善と見えぬものを希ふことがある。それ故、神は愛の故に祈の答として、私共の希ふ通りのものを與へ給はないのである。(實例)身體も弱く、目もよくない一少年があり、顯微鏡を買うて與れと頼んだ時、その父はそれが目の爲に惡いことを知つて居たので、少年の願通りにせず、代りに自轉車を買つて與へた。

私共は祈るとき、「御意のままなし給へ」といふ事を學ばればならぬ。そして神は私共のため、最も善きことを

答へて下さると信ずる必要がある。(ヨハ壹五・一四、一五を見よ)

一一、なぜ私共は、イエス様の名によつて、お祈しますか。

私共はお祈のとき、イエス様が私共の爲にして下さつた事を認める所から、「イエス様の名によつて、」と申します。

イエスは此の事に關し、次の如き特別なる約束をされた。「汝らの凡て父に求むる物をば、我が名によりて賜ふべし」(ヨハ一六・二三)私共のうち一人でも「神は私の故に我が祈に答へ給ふならん、」といひ得る者はない。お互の中で最も善良な者と雖も、尚かつ神に希ふ價値ある者はない。しかし私共が祈のとき「イエスによりて、」と加へるならば、私共のために生命を與へ給ひたる神の愛し給ふ子の名によつて願ふことになる。(實例)一少年あり、職を求めて某雇主にゆき、何とかして頂きたいと願うた。すると紳士は「僕に頼むとな。君は不適當のやうだが」と答へるや、少年は「御言の通り、しかし貴兄はフランスに居られるとき、私の父の事を御存知でせう。どうか父に免じて御配慮を賜りたい」というた。

一二、イエス様が教へ給へる特別の祈は何ですか。

イエス様は弟子達を通じて祈の手本を教へ給ひました。普通これを「主の祈」といひます。

イエスの祈は、當時の宗教家達がなせる强情で利己的な祈とは、大層異つてゐた。彼は父なる神にお話する事を喜び給ふ事が明白であつたので、或日、弟子たちは「祈る事を我らに敎へ給へ」(ルカ一一・一)と願つた。そこでイエスは、私共が「主の祈」というてゐる所の祈を敎へられた。彼は私共が此の祈だけをすればよいと、御考になつたのではなく、これを手本として、畏敬、信頼、愛の精神を以て常に祈るべきを敎へ給うたのである。

私共は此の祈が甚だ行届いてゐるので、特別の注意を拂はねばならぬ。そして然るべき考と希さを有たず、無頓着に急いで繰返す如きことをしてはならぬ。

一三、主の祈を言うて下さいますか。

「天に在す我らの父よ、願くは、御名を崇めさせ給へ。御國を來らせ給へ。御意の天に於ける如く地にも成せ給へ。我らの日用の糧を今日も與へ給へ。我らに罪を犯す者を、我らが免す如く、我らの罪をも免し給へ。我らを嘗試に遇せず、惡より救ひ出し給へ。國と權と榮とは、窮なく爾のものなればなり。アーメン」

一四、なぜ「天に在す我らの父よ、」といひますか。

「我らの父よ」といふのは、神樣が凡ての者にとり、愛ある天の父だからです。

イエスは弟子達に、神に近づくべき新しき道を示し給うた。それ迄は神を紹介するに、世界の造主、統治者、支配者又は王というた人はあれど、父だと敎へた人は甚だ少かつた。私共の肉體に於ける父は、物を願うた時に叶へてくれるのみならず、その子供らが考へて居る事を告げる時に、喜んで勵ますものである。その如く天の父なる神も、私共が祈るとき之を喜び給ふ。彼は大なる神で在せば、畏敬の精神を失うてはいけないが、しかし「我らの父」で在せば、單純に而も自由にお話することが出來る。神は私共が其の苦しみ、痛み氣苦勞などを申上げると同時に、その喜、望及び勝利を告げる事を欲し給ふ。

イエスは「我らの父」なる神は慈深く(ルカ六・三六)また罪を赦し給ふお方(マタ六・一四)だと敎へられた。神は又祈をきき、之に答へ給ふ御方である。(マタ六・六)私共の必要を知り、之を供給し給ふ。(マタ六・三二、三三)お互に善きものを與へ得給ふ。(マタ七・一一)時來らば私共を天の家に歡迎し給ふ。(マタ二五・三四)この祈は「私の」といはずして、「我らの」父といふから、各地の人々を一つにするものである。

(敎訓)私らの父なる神は、その子供らの祈をきき、之に答へ給ふ。

一五、「御名を崇めさせ給へ」と祈る意味は何ですか。

私共が「御名を崇めさせ給へ」といふのは、全世界の人々が、天の父を認めて、敬ふようにと祈ることです。

「崇める」とは、神聖、尊崇及び敬虔の心をもて扱ひ奉るの意である。昔、神の民達は、非常に神を崇める所から、決して輕々しく御名を口にしなかつた。その神について記したる物すら、甚だ丁重に扱つた。ダビデは記していうた。「エホヤの名は聖にして、あがむべきなり」(詩一一一・九)と。そして又、「彼らは汝の大なる畏るべき

名をほめたたふべし、エホバは聖なるかな」（詩九九・三）と。

此の言の背後には、全世界が神に對して正しき認識を、即ちその愛、力及び聖なる事を、悟り得るようにとの願がある。何故なら、神の事を深く知れば知るほど、彼を崇める心が深くなるからである。

一六、「御國を來らせ給へ」といふのは、何を祈る意味ですか。

私共が「御國を來らせ給へ、」といふのは、凡ての人が神の救を受け、神が王として彼らの心と生活とを、治め給はん事を祈るのです。

イエスが教へ給へる神の國は、ユダヤ人が考へて居たものとは甚だ違つてゐる。イエスは地上に於ける力ある王國を神の國だとは仰せられなかつた。之は彼が來て人々の心中に打建て給ふ所のもので、（ルカ一七・二一）その所に彼が王として臨み給ふのである。この國は最初は賤しい人々が、僅か丈しか居ない程の至つて小なものではあれど、次第に成長をつづけ、進歩發達して、遂にはこの世界の國々よりも、更に大なるものとなる。（救世軍が海外に發展してゐる事業につき、語るなら幾分の助となるであらう）「それ神の國は……義と平和と聖靈によれる歡喜とに在るなり」（ロマ一四・一七）

（教訓）もし私共が神の國に屬する一員であるなら、單に祈るのみでなく、すすんで他の人々をも同じ國に伴ふため、全力を盡して奉仕せねばならぬ。

一七、「御意の天における如く地にも成させ給へ」とは、どういふ意味ですか。

「御意の天に於ける如く地にも成させ給へ」とは、御使が天にてなす如く、地上で私共も他の人々も、神樣の御意通り、喜んで行ふ事の出來るやうにと祈ることです。

神の御意を行ふとは、彼の喜び給ふ事を爲すといふ意である。若し凡ての者が神の御意を行ふなら、かの嫌惡すべき戰爭や、一切の不正は無くなり、地上は至るところ、平和、幸福及び繁榮が滿つるであらう。この祈を心底よりなす者は、

（一）先づ自分で神の御意を極力行はねばならぬ。（敷衍せよ）（實例）一少年兵が、「天使はどんな具合に神の御意を行ひますか、」と問ふと、その答は次の如きものであつた。「早速、喜んで、しかも一言も問返さないで」と。

（二）神の御意に反する一切のものを憎むこと。（敷衍せよ）

（三）他の人々によつて行はれつつある神の御意が成就するため、力の及ぶだけ盡さねばならぬ。（意味を說明せよ）

「平和の神……御意を行はしめんために……汝らを全うし給はん事を」（ヘブ一三・二〇、二一）（また詩一四三・一〇。ヨハ壹二・一七を見よ）

一八、「我らの日用の糧を今日も與へ給へ」とは、どういふ意味ですか。

「我らの日用の糧を今日も與へ給へ、」といふのは、神樣が私共の肉體と靈魂上、日

日に要する食物を與へ給へと祈ることです。

私共が一方、食糧を豊に供給されたる肉體と、他方に愛と信仰と熱心の缺けた所の飢ゑたる靈魂とを同時に所有し得ることは可能である。父なる神は、私共の靈肉兩方面に食物の必要なことを知り給ふ。(マタ六・二六、三〇——三二)イエスは嘗て仰せ給うた。「人の生くるはパンのみに由るに非ず」と。(マタ四・四)それ故、私共は己が靈魂の食物を、祈、聖書を讀むこと、聖き歌をうたふこと、及び善良なる話をきくこと等によつて、得なければならぬ。

「イエス言ひ給ふ。『我は生命のパンなり、我にきたる者は飢ゑず』」(ヨハ六・三五)

一九、「我らに罪を犯す者を我らが免す如く、我らの罪をも免し給へ」とは、どういふ意味ですか。

「我らに罪を犯す者を我らが免す如く、我らの罪をも免し給へ、」といふのは、私共に惡をなしたる人を、心から赦したる如く、私共の罪を凡て赦し給へと祈ることです。

この祈は惡を蒙つたとき、「僕は仕返しをしてやる、」といふ如き人には、甚だむつかしい事であらう。この仕返しをしてやるといふ事は、恰も、「私が彼にしてやる如く、神よ私を取扱ひ給へ、」と願ふ事を、意味するであらう。若し私共に、他人を赦すことが出來がたい場合には、

(一)その惡事に對し、咎めらるべき何らかが、自分に存在しないかを反省せよ。
(二)その問題につき祈れ。
(三)第一に友情を示せ。
(四)神は他を赦さぬ人を、赦し給はぬ事を記憶せよ。

「互に仁慈と憐憫あれ、キリストに在りて神の汝らを赦し給ひし如く汝らも互に赦せ」(エペ四・三二)(またマタ一八・二一——三五を見よ)

二〇、「我らを嘗試に遇せず惡より救ひ出し給へ」とは、どういふ事ですか。

「我らを嘗試に遇せず、惡より救ひ出し給へ」とは、私共が負けるかと見える程の誘惑に遭せず、また誘惑の時には、うち勝つ力を與へ給へと祈ることです。

若し私共が誘惑から脱れたいと願ふなら、用もないのに、誘惑にかかりさうな所に近づいてはならぬ。例へば、「神よ、私を惡しき言より救ひ給へ、」と祈りながら、口ぎたなく惡口をいふ仲間の一人となつてゐたのでは、何の役にも立たぬ。私共は餘りにも自らの力が弱く、一方、惡の力が強いので、己が力では自己を惡から救ひ出すことが出來ない。しかし神は一切の罪より強き御方であるから、何處にあつても、常に勝利を私共に與へ得給ふ。イエスが彼を信ずる者の爲に祈り給へる言を記憶せよ。「わが願ふは、彼らを世より取り給はんことならず、惡より免らせ給はんことなり」(ヨハ一七・一五)(またヨリ前一〇・一三。ペテ後二・九。ユダ二四を見よ)

二一、「國と權と榮とは、窮なく爾のものなればなり」とは、どういふ事ですか。

「國と權と榮とは、窮なく永のものなればなり」とは、神樣が萬物の支配者て在し、最高の權と榮とが、彼に屬するを認めることてす。

私共は主の祈に於て、甚だ多くの事を願ふが、この最後の言は、神が私共の願ふ一切の事を喜んでなし、また爲し得給ふを表してゐる。神は永遠つきざる王國の王で在す。彼は凡ての力を有し給へば、私共には不可能と見ゆる事でも、容易に爲し得給ふ。神は榮で在す。彼は其の光輝や威光の故ならで、その變らざる愛の故に最高の存在者で在し給ふ。「われ……多くの御使の聲を聞けり、……屠られ給ひし羔羊こそ、能力と富と智慧と勢威と尊崇と榮光とを受くるに相應しけれ」（默五・一一、一二）

二二、「アーメン」とは、どういふ意味ですか。

「アーメン」とは、「斯くなし給へ、」又は「私の祈が答へられますように、」との意味てす。

二三、食事のとき、感謝をせねばなりませぬか。

私共は食事のとき、感謝をせねばなりませぬ。或は靜かに、或は次の如き言を以て聲を出して感謝するのてす。

この結構な食物を感謝します。なほイエス樣の貴き血について感謝します。どうか天より降し給へる生命のパンをも、我が靈魂に與へ給へ。

私共は食前の感謝に當り、

（一）神が私共の日毎に受ける食物の與へ主であり、また其の食物が出來るについて、太陽や雨をはじめ、いろいろ用意なし給うた事を認めること。（敷衍）

（二）神の惠に對し、私共の感謝を表すこと。若し本當に心から感謝をするなら、自分の前に置かれたる食物を粗末にしたり、或は味いたりしない筈である。小言は感謝を殺し、感謝は小言を追出す。「凡ての事に就きて常に我らの主イエス・キリストの名によりて父なる神に感謝し」（エペ五・二〇）

第九章　聖書

一、聖書といふ言は、どういふ意味ですか。

英語てバイブルといふのは、「書物」又は「多くの書物」といふ意味てす。私共が之を聖書といふのは、之が唯一の書、又は書物中の書物だからてあります。

二、なぜ聖書を唯一の書といふのですか。

聖書を唯一の書といふのは、その中に書いてある事が、私共人間のため神によつて書かれたものだからです。之は世界中で最も驚くべき、一番大切な書物です。

三、聖書には、神様の特別なる啓示が、記されてあるといふのは、どういふ意味ですか。

聖書に神様の特別なる啓示が、記されてあるといふのは、人間が自分の力では、知り得ない眞理が、示されてあるといふことです。

自然は神が限りなき知慧と能力と榮光とを有つて居給ふを示してゐる。(第二章答六、一五及び一六を見よ)しかし聖書のみが、神の愛と惠とに滿てる父であるを示し、私共のため最善のことをなし、かつ人類にとり最大の敵たる罪より救はるる道を立て給うた事を示す。

聖書の教によれば、イエスはジュリアス・シーザーや孔子などと同樣な、歴史的の一存在であつたばかりでなく、彼は他の人々とは甚だ違つた御方であつた。彼は神の子で在し、而も死から甦つて、彼を信ずる者と何時も偕なり給ふ友である。

聖書の教に照されざる良心は、彼らに善を行ひ、惡を止めるべきを教へる。しかし彼らの要するものは、どれが善で、何が惡かを示す光である。然るに神の御言は、人の生活に對する神の求め給ふ標準を示す(數衍)聖書の讀まれて居ない地方では、人々が正しい事だと信じて、而も甚だ殘酷な恐しい事を行ふことがある。

四、神様は聖書によつてどんな風に其の眞理を、人間にお知らせになりましたか。

神様は先づ其の眞理を僕の或者らに知らせ、これを記させ給ひました。それらの書きものが集つて聖書となつてゐます。

五、聖書にある重要な眞理の、幾つかをいうて下さい。

神様は聖書によつて、御自分の性質、行動、御子による救、私共に御希望なさる人がら、及び善人と惡人との最後の運命につき示されました。

私共は何れの實例に於ても、神が如何にして、其の眞理を悟らせ給うたかわからぬ。記者の錄しし言通りが、或は夢、または聖靈が彼らの心に、思想を起さしめ給うたものかを、知るに由がない。しかし乍ら何れにしても、神は其の書き記させんと欲し給ふ所を、明白に教へ給うたもの故、聖書は「神の言」と、いへるのである。舊約聖書に於ては、「エホバかく言ひ給ふ、」との句を以て書き始められた所が二千以上もある。

科學は聖書の教に、少しも相反して居らないとは雖も、聖書は科學を教へる爲の書ではない。或る科學上の事實の如きは、その事が發見されるより、ずつと大昔、聖書に記錄されてある。(創一五・五。ヨブ二六・七。二八・二五を見よ)

神が聖書によつて教へんとし給ふ所は、五の答にある如く、凡て重要なる宗教上の眞理である。(反復せよ)

六、聖書に書いてあるのは、凡て神様より直接の御示でありますか。

聖書の中には、神様より直接の御示てないものもあります。それらは他の方法て、御知せになりました。

七、聖書は靈感によつて出來ましたか。

聖書全巻は、靈感によつて出來たものてす。

八、聖書が靈感によつて出來たといふのは、どういふ意味ですか。

聖書が靈感によつて出來たといふのは、神様が記者たちの心に光を與へ、彼らを導き、その欲する所を書かしめ給うたとの意てあります。

聖書に錄されたる或る事柄は、すでに知られて居たので、神の御示をうける必要がなかつた。例へばノアの洪水に關する物語は、後世の人々には、彼の子孫によつて語り傳へられてゐた。しかし聖靈は聖書記者を導き、神が爲し給へる御業の目的に適ふやう、之を詳しく記錄せしめ、間違に陷らざるやう助け、神の御考に合うたものを書かせ給うた。

「靈感」の實際の意味は、「息を吹込む」である。「神の靈感」は、「神に息を吹込まれる」の意。聖靈が聖書記者に、息を吹込んだ結果、彼らは神の御意を辨へた。それで彼らは自分が使用する語、即ち日常使ひなれてゐる言語を用ひて、書いたとは雖も、その記錄した所は、神が望み給ふ所の、眞實なることばかりであつた。

この神の靈感によつて書かれたる一事が、他の凡ての書に優り、聖書の崇高な所以である。

「聖書はみな神の感動によるものにして」（テモ後三・一六）「豫言は人の心より出でしにあらず、人々聖靈に動かされ、神によりて語れるものなればなり」（ペテ後一・二一）

九、私共はどうして、聖書の記者たちが、神様から靈感を受けたと信じますか。

聖書の記者達が、神様から靈感を受けたと信ずるのは、その人達が何れも、非常に離れた時代と、國とに住み、また他の點でも、種々異つてゐたにも拘らず、その書物は一つの續いた物語て、神様の人間に對する高い目的につき、一致して居るからてす。

聖書は前後千五百年乃至千六百年に亘り、約四十人の記者によつて書かれた。彼らの住みたる所は、パレスチナ、バビロン、ロマその他の地方であつた。その職業も各種であり、王あり將軍あり、豫言者あり、漁師もあつた。もし彼らが何らの指導を蒙らなかつたら、その書いたものには、少しも統一と連絡とがなかつたであらう。（例）八人の少年が、各自思ひ思ひの題で作文をつくつたら、どんなものが出來るか。連絡はあるまい。兎もあれ私共が聖書を繙くとき、各々の書が、互に連絡のあること、恰も一物語の一章から次の章に續くが如き具合である。其の凡ての書は、人間が聖き者となり、神を友とする者となるべき、神の御目的に就いて記して居る。それ

故、神が記者達に靈感を與へ給うたのであると認める。

一〇、聖書が他の一切の書物に、優つて居る二つの點を言うて下さい。

聖書が他の一切の書物に、優つて居る理由の一つは、人間の最も深い要求が充される道を示すことて、今一つは人間の品性と、其の行爲とを定める神樣の標準を、示して居ることてす。

人間にとつて最も深い要求は、肉體に屬するもの、例へば食物、空氣などではなく、その靈魂上のものである。即ち良心の平安、罪に勝つ力、未來に對する確信などがそれである。聖書には、イエス・キリストが、此ら靈魂上の要求を滿足にかなへ給ふ事を敎へてゐる。

ロンドンの政廳には、英國に於ける標準地域、即ち三十六吋角のものがある。聖書の示す所によれば、イエス・キリストは神が立て給へる理想的の人で、彼は凡ての人々に對する神の標準である。イエスは私共の模範である。それ故、彼の心を心とし、その足跡をふまればならぬ。

(敎訓)神の御言を貫下の日常生活に於ける指導者とせよ。

一一、聖書の敎に從ふ者には、特別な祝福がありますか。

聖書の眞理、殊にイエス樣の御敎に從うた國や人々には、いつも驚くべき祝福が與へられました。

キリスト敎が非キリスト敎國、殊に野蠻な國に傳へられるや、普通、次に示す如き殘酷な習慣や行爲がなくなる。人の首狩、殺人行爲、不要の幼兒殺害等。之に反して次の如きものが設立される。病院、孤兒院、敎會、學校など。また婦人達は壓制の下にあつたのが、その正しき權利の地位を占める。またキリスト敎の感化による所では、奴隷賣買の惡風は殆んど其の姿を消した。特に進んだ國に於ては、神の御言が自由に宣傳へられてゐる。

神の治め給ふ所には祝福あまれし。囚人は其の鎖を解かれ、疲れたる者は永遠の休憩を得、乏しき者は凡て惠を受く。

一二、現今、聖書歷史の正確なことが、どうして認められましたか。

聖書に關する地方の發掘によつて、その歷史は勿論、他の歷史書にない事までが甚だ正確てある事を、認められました。

學者達が聖書に關する地方を發掘した結果、數千年間、埋沒されたる或る種の物を發見した。その品物といふのは、岩、文字の書かれたる壁、泥土物の額、パピラスの卷物、貨幣及び印などである。此等の品々は十分な注意を以て調査されたる結果、聖書の記事が正確なるを繰返し證明したのである。(例)今日、ロンドンの博物館にあるロセッタ石といふのは、遇然にもエジプトで發見された不思議な文字や繪の描かれた石である。非常な苦心の結果、之を讀む鍵が發見され、續いてエジプトにある寺や墓に書かれたる文字を讀む道が開けた。玆に於て聖書記事の正確なる、また古代エジプトに關する各種の謎が、たしかめられた。

一三、神様が長い時代を通じ、聖書に特別なる注意をなされた事は、どうしてわかりますか。

多くの敵が力の限りに聖書を滅さうとしたにも拘らず、今日まで保存せられた事を見て、神様が聖書に、特別の注意をなされた事がわかります。

惡人は自分を苦めるものを好まない。エレミヤの時代に惡しき王があつた。彼は自分に與へられた神の言を燒ひ、之を斬つて火にやいてしまつた。(エレ三六・二〇——二三) しかし多くの惡人共が、聖書を地上から抹殺しようと試みたが、結局失敗に終つた。之は神が此の書を保存し給うたからである。今日では、他の如何なる書よりも、多くの國語、地方語に飜譯され、かつ世界で最も多數に賣捌かれてゐる。(說明せよ)

(例)一、キリストより三百年後、ロマの一皇帝は凡ての聖書をその領土から除くため奮鬪し、餘程確信があつたと見え、それを記念するため勳章を鑄造した。然も數年後には驚くなかれ、ロマ帝國内に於て、公然と聖書を讀むことが出來たのである。

二、十六世紀のころ、英國に惡しき一監督があり、當時、始めて出來たる英譯聖書を買集めて、之を公衆の面前で焚きすてた。然るに其の金は聖書印刷人の手に入り、更に上等の聖書が多量に印刷されたのであつた。

「されど主の御言は永遠に保つなり」(ペテ前一・二五)

(教訓)神が斯も不思議なる御手をもて、聖書を保ち給へる御恵を感謝せよ。

一四、聖書に於ける最大の題目は何ですか。

聖書に於ける最大の題目は、四福音書に其の生涯を記されたイエス・キリストです。彼以前に記されたる一切は、その準備のためであり、彼以後のは其の全き御生涯と、犧牲的の死との結果であります。

イエス・キリストと其の贖罪の御業に關する教理は、聖書の創世記より、默示錄に至るまで終始一貫する赤き線の如きものである。舊約時代には人々が、やがて出現さるべき救主を待望み、豫言者は彼に就いて記した。(イザ五三・) 動物は犧牲として、時を定めて獻げられた。例へば過越の羔羊などは、それである。(出一二・) 之はイエスが人々のため十字架上に死にたまへる雛型であつた。福音書はイエスの地上生活、其の教及び復活につき記してゐる。使徒行傳は、彼に從へる最初の弟子達が、その貴き救を、當時、知られてゐた殆んど全部の世界に宣傳へた事を記して居る。また書簡は、イエスに救はれた人々は、如何なる者なるべきか、又どんなに生活すべきかを教へてゐる。更に默示錄は、未だ其の時が來らざるも、凡ての人々がイエスを認識した曉に於ける其の最後の勝利を記してゐる。(聖書索引は、この點を說明するに助となるであらう)

一五、私共は聖書を如何に扱はねばなりませぬか。

私共は聖書を毎日よみ、他の人が讀んだり、說き明かすときは注意して聞き、これを信じ、意味が悟れるよう祈り、出來るだけ憶え、示された通り實行せねばなりませぬ。

一六、聖書を讀んで、わからぬ所はどうするのですか。

聖書をよんで、わからぬ所は、神が教へて下さるように祈り、既に知つてゐる所を十分働かせ、私共に説明して下さる方の助をうけねばなりませぬ。

聖書は神が私共に賜へる活ける書である故、大切になし、粗末な扱をしたり、樂書したり、或は塵埃の中に放棄して置いてはならぬ。聖書が何れの時代でも、凡ての人々に當欲るは、實に不思議である。恰も海は、子供が遊ぶにも適すれば、大人が泳ぐにもよいと同樣である。成程、幼少のときには、多くの解らぬ事が多いであらう。しかし一五の答（繰返す）にある如き忠告をききいれるなら、成人するに從ひ其の意味が明白になるであらう。（例）學校に行つても、下級生は上級生の本を讀むことが出來ぬ。しかし自分が上級になつた時には、よくわかるのである。それ故、私共は毎日、次の如く祈られねばならぬ。「なんぢ我が眼をひらき、汝の法のうちなる奇しきことを我に見せ給へ」（詩一一九・一八）と。

聖書を愛讀するなら、私共は一層よろこんで親に事へ、また學校や仕事場で友人に親切な者となる。けれども單に讀むだけで、その敎を實行しないなら、救はれない。（例）巡査が斯々の所へ行くべき道を示し、私共がそれを信じた所で、その敎に從うて實行するまでは何の役にも立たぬ。

（敎訓）貴下がよし他の如何なる書を勉强するとも、聖書勉强を絶對に忘れてはならぬ。

第十章　神の誡命

一、神樣は聖書によつて、どんな誡命を與へられましたか。

神樣は聖書によつて、私共の益と人類の幸福となるべき誡命を與へ、出來る限り之に從ふべき事を定め給ひました。

二、十誡の意味は何ですか。

十誡とは神樣が、モーセを通じて與へ給へる十の規則で、最初の四つは神樣に對し、後の六つは他の人々に對する、私共のつとめが示してあります。

神の律法を守らせるには、之を知らせる必要がある。それ故、この律法は聖書の中に記されてある。十誡は舊約に於ける律法中、最も重要なもので、之は甚だ嚴肅な場合、神により直接イスラエル人に與へられたものである。（出一九・一六——一九を讀め）さり乍ら之は又、何れの時代にも、如何なる立場の人にも當欲るもので、絶對に力を失はない。之は甚だ單純卒直に記されてある故、凡ての人が了解出來る。

十誡は私共から自由を奪うて、悲慘な者にする所のものではない。反つてお互を安全に守り、幸福に至らせ、破滅に陷らぬやうに保護する。之は恰も汽車のレールに相當する。このレールの上に汽車が置かれ、その車輪を

少しも外さないなら、滑かに走ることが出來る。萬一、レールから飛び出るなら、諸君も知る通り、大低の場合は悲慘な大椿事に至る。

「エホバの訓諭はなほくして心を喜ばしめ……これらを守らば大なる報賞あらん」（詩一九・八、一一）

三、第一の誡命は何ですか。

「汝わが面の前に、我の外、何物をも神とすべからず」（出二〇・三）

四、第一の誡命は、どうせよと言ふのですか。

第一の誡命は私共に、一人の眞の神樣のみを、拜めといふのです。

五、第一の誡命は、どうしてはならぬと、言ふのですか。

第一の誡命は、私共が人や物を神樣以上に愛したり、また神樣にのみ屬する權利を、與へてはならぬと言ふのです。之は又、迷信的行爲、占ひ、及び死人の靈と話す術などに、心を寄せてはならぬといふのです。

神は私共を創造し、保護し、かつ獨子によつて贖ひ給うたのであるから、私共が先づ第一に彼を愛し、最善の奉仕をなすやう、求め給ふは當然である。それ故、私共の心や生活に於て、神の當然占め給ふ地位を、何人か或は何物かに横取らせるなら、それは第一の誡命を破ることになる。例へば少女が、神を喜ばせ奉る前に、自分を樂しませるなら、それは神の代りに、利己の偶像を祀ることになる。また少年が金を蓄めたいと熱心に希ひ、そのため人をだますなら、神を愛する愛の代りに、金を愛する事になる。自然、神の御前に置かるべき物すら、許すことになる。或は又、樂隊員が集會の最中、その樂器のみに心を取られてゐるなら、樂器が彼の神となるおそれがある。私共の將來が、明かに示されないのは神の愛である。しかるに占ひの如き方法によつて、神が知らせぬを最もよいと思召すのに、之を知らんとするは惡い事である。又或者は、悲しみや途方に暮れた場合、神に往いて慰めと導とを願はず、反つて死にたる友の靈から助を得んと試みる。之は神を侮辱するものであり、神が甚く咎め給ふ罪である。（申一八・一〇——一二を讀め）この神の御言を無視して、斯る事に心を寄せる者の生活には大低、恐しい結果が起るのである。

「われはエホバなり、これ我が名なり、我はわが榮光を、ほかの者に與へず」（イザ四二・八）

六、第二の誡命は何ですか。

「なんぢ自己のために、何の偶像をも彫むべからず、又、上は天にあるもの、下は地にある者、並に地の下の水の中にある者の何の形狀をも作るべからず、之を拜むべからず、これに事ふべからず」（出二〇・四、五）

七、第二の誡命は、どうしてはならぬと言ふのですか。

第二の誡命は、どんな偶像でも作つて、拜んではならぬし、また其の前に頭を下げてもいけない。その上、神樣にのみ屬する尊敬を、他の人や物に與へてはならぬとの事です。

八、第二の誡命は、どうせよと言ふのですか。

第二の誡命は、眞實で潔く、心から神樣を拜めといふのです。

舊約時代にあつては、殆んど世界中の民は、偶像禮拜者であつた。神は自身のみを拜むようにと、甚だ强く希望された結果、この第二の誡命を與へられたのである。（繰返す）

（例）イスラエルの王ヤラベアムは、金の犢を二つ造つた。（王上一二・二八——三〇）彼は之を以て神の代用に禮拜すべき者であるとは企てたのではなかつたが、しかし本人はさうでも、人民は代用として拜んだ。そして之は神の嚴しき誡命を破つた事となり、其の結果は彼及び其の家族に甚だ大なる害を齎した。

新約時代になつて、パウロはアテネにて偶像禮拜者に次の如き說敎をした。「神を金、銀、石など人の工と思考とにて刻める物と等しく思ふべきに非ず」と。（使一七・二九）

凡て偶像にせよ、繪畫にせよ、よしそれが神又は其の子或は被造物の何を示すものであつても、その前に頭を下げることは、神を侮辱し、その誡命を破るものである。何故なら、其の像なり、畫なりは、神と禮拜者との中間に來るものだからである。

私共は未だ眞の神が知られて居らず、間違つた禮拜の行はれてゐる地方のため、心から同情をよせるのみならず、「エホバの榮光を認むるの知識、地上に充ちて、あたかも海を水の掩ふが如くならん」（ハバ二・一四）日の一日も早からん事を祈られねばならぬ。

九、第三の誡命は何ですか。

「汝の神エホバの名を妄に口にあぐべからず」（出二〇・七）

一〇、第三の誡命は、どうしてはならぬと言ふのですか。

第三の誡命は、神樣を呪うたり、惡口したり、侮つたり、又は輕々しく稱へてはならぬといふのです。

一一、第三の誡命は、どうせよと言ふのですか。

第三の誡命は、私共の考にも、言にも、また行爲にも、凡て神樣を敬へといふのです。

一二、私共はどんなにして、神樣を敬はねばなりませぬか。

私共は其の御名を崇め、御言を尊び、その日を大切にし、その建物や又その民を

大事にする事によつて、神様を敬はねばなりませぬ。また祈の時には、うやうやしく跪いて頭を垂れ、目を閉ぢ、更に聖書を讀むとき、或は禮拜及び集會に出た時には、敬虔な態度を表すことによつて、神様を敬はねばなりませぬ。

私共は神を知れば知るほど、愛すれば愛する程、神の事に關して一層注意深くなり、尊敬の念を拂ふものである。そして例へ如何なる形に於ても、神をけなす如き談話をきく時、その心を痛めるに至る。(例)少年にして若し正しき心を有つなら、自分の父に關し、他の人々がありもせぬ惡口をいふなら、憤慨するは當然である。

青少年達は時々、明らさまに惡口をするのではないが、殆んど惡口に至らせる如き事を平氣で語るが、氣をつければならぬ。また神聖な事に關し、輕薄な言を使はぬやう、例へば、驚き呆れた折、無考に神の名(「よう神」又は「ああキリスト」)を稱へぬやう十分心掛ける必要がある。更に用もないのに神の名を語り、聖句を用ひ、人人を笑せたり、或はしやれたりするため、神聖なる歌を、うたうたりしてはならぬ。屢々神の聖き名を用ひて、惡口をするといふは、甚だ惡しき事で、

(一)之は紳士又は淑女らしからぬ事で、或者は惡口する事によつて、自分の偉大なるを示さんとするけれども、甚だ惡い事である。

(二)惡口は之を言ふ其の人自分を傷ける。即ち斯することにより、低級でやくざな事を考へ易くなり、一方、善良、清潔及び高貴な事を企てにくくなる。

(三)他人に對して惡しき手本となる。年若き子供らは、その年長者のいうた言を、よく倣うて語り傳へるものである。

(四)之は又、神を敬はず、第三の誡命を破ることとなる。

「汝らの言は常に惠を用ひ、鹽にて味つけよ」(コロ四・六)

「エホバよれがはくば、わが口に門守をおきて、わが唇の戸を守り給へ」(詩一四一・三)

(教訓)神聖なる事に關しては、必ず敬虔の念を以てなすこと。

一三、第四の誡命は何ですか。

「安息日を憶えて之を聖潔すべし、六日の間はたらきて汝の一切の業を爲すべし、七日は汝の神エホバの安息なり」(出二〇・八——一〇)

一四、第四の誡命は、どうせよと言ふのですか。

第四の誡命は、其の日を神様の聖き日として定め、自分も他の人々も、出來るかぎり平生の仕事を休み、神様を拜み、之に事へよといふのです。

一五、第四の誡命は、どうしてはならぬと言ふのですか。

第四の誡命は、安息日には利己的の樂しみを求めたり、必要と愛と祝福との爲になされる勞働以外の仕事をしてはならぬといふのです。

一六、何故、神の日を聖く守らねばならぬのですか。

私共が自分の體と心と靈とに、休と力とを得、心靈的の事に心を寄せ、また他の人々を救ふため、盡さねばならぬからです。

神は人間や動物が、時を定めて休息せねばならぬ事を御承知であるので、七日の中の一日を其の日と定め、ただに平生の仕事を休み、疲れた體と心とに元氣を回復するばかりでなく、同時に神を拜み、靈の交りをする機會を備へ給うたのである。

舊約時代には、第七日目を安息日として守られた。之は神が創造を完成し給ひ、休み給へる日を記念したものである。(創二・二、三) 然るにイエスが復活せられてからは、彼を信する者達は、之を記念するため、一週の最初の日を、特に聖き日として守るやうになつた。(マタ二八・一、五、六)

安息日がないと、日常の學課、仕事、遊戯など平生の事に紛れて、大切な神と未來に關する事などを忘れ、結果、一切の物を失ふに至る。

神の定め給へる日を、正しく守るためには、

(一)先づ自分で缺くべからざる事以外の仕事から離れる。(例)醫者が病人の手當するのと、少年が日曜日に自轉車の修繕するのとは違ふ。

(二)私共のため、他の人が不必要にも働くのを、絶對に奬勵してはならぬ。(例へば菓子を買ふことによつて、)

(三)家事を手傳ひ、家族の他の者が安息日を守り得るようすること。(例)一人の母あり次の如くいうたとのこと。「日曜は一週間中、最も忙しい日です。家族は全部在宅であり、御馳走を求める。そのくせ少しも助けてくれないので、大層つかれ晩に集會へ出席する元氣などなくなるのです」と。

(四)自分を樂しましめる日とせぬこと。(適當に散衍)

(五)神の宮、即ち會館に出席し、心をこめて己が職分をつくし、説教を熱心にきき、聖き生活の出來るよう、神の惠を求める。

(六)特に助を要する人を、出來るだけ勵ますこと。例へば病人に「少年兵」又は「ときのこゑ」を持つてゆき、讀んであげるなどする。

(教訓)日曜日には、神の喜び給ふ方法を以て、一日を送るよう決心せよ。

一七、第五の誡命は何ですか。

「汝の父母を敬へ、是は汝の神エホバの、汝にたまふ所の地に、汝の生命の長からん爲なり」(出二〇・一二)

一八、第五の誡命は、どうせよと言ふのですか。

第五の誡命は、親を敬うて愛し、惡でない限り其の命に從ひ、また出來る限り、その必要に應じて、手助せよといふのです。

一九、神様は第五の誡命を守る者に、どんな約束をせられましたか。

神様は其の親を敬ふ人に、長き命と繁榮とを約束されました。之は神様の榮ともなり、また其の人の幸福ともなる事です。

親は私共の若い時代を保護するため、神から遣された者である。それ故、親の一生を通じ、神は私共が彼らを敬ふやうにと望み給ふ。親の愛に富める保護に對し、私共は次に示す如き事共を、無條件に要求されてゐる。

(一)愛と感謝。然るに或者らは兩親に對し、如何に我が儘な振舞をすることか。彼らは一切を親から求め、何物も親には與へないのである。

(二)服從。私共が成人となるまでは、親の意見に從ふべきものである。たとひ其の考が自分に了解出來かれる事も、又は隨分うるさいものの如く見ゆる事ですら、從はれはならぬ。

(三)尊敬。親に對して亂暴な言を使ひ、また善く言はぬ事、或は他人の前で親の事を言ひ澁る等は、つまらぬ誇や、僞の優越觀である故、かかるものを學んではならぬ。(例)スコットランドで或る大學に甚だ多くの人々が集つた。之は其の學校出身者の一人を祝ふためで、その人は非常に貧乏な家に育つた人であつた。その祝會が進められるや、彼は己が席を離れ、少し往いて、會衆中に居る粗末な着物の老婆を伴ひ、之をいたはりつつ高壇に立たせ、人々に紹介していうた。「紳士、淑女諸君、私の一切は此の母さんに負うてゐるのです」と。

(四)成人後に於ける注意と保護。私共が成人して最早その親の助を用せぬ時、彼らを無視するは罪で、これ程、利己的で且つ感謝なき行爲はない。

主イエスは此の第五の誡命を、見事に盡された。十二歳の少年として親なるマリヤとヨセフとに從ひ、(ルカ二・五一)また十字架上にあつては、己が死後に於て、寡婦なる母の事につき配慮せられた。(ヨハ一九・二六・二七)

(教訓)若い時に十分その親に孝行するなら、後になつて後悔する如きことはない。

(この學課は、若し生徒の中に、或る惡い親を有つ者があるなら、適當な注意を拂ひつつ敎へねばならぬ)

二〇、第六の誡命は何ですか。

「なんぢ殺すなかれ」(出二〇・一三)

二一、第六の誡命は、どうしてならぬと言ふのですか。

第六の誡命は、自分のでも、他人のでも、その生命をとつてはならぬといふのです。之は又、にくしみ、怒、うらみ、復讐、その他の惡しき感情など、死に至らせる考を、有つてはならぬと言ふのです。

二二、第六の誡命は、どうせよといふのですか。

第六の誡命は、人間の生命を神聖なものとして取扱ひ、他人の生命を保護し、健かになし、かつ最高の幸福を圖れといふのです。

人間の生命は、神から直々賜りたる神聖なものであつて、神のみ此の生命が何時、どんなにして終るべきかを言ひ得る御方である。「死より逃れうるは主エホバに由る」(詩六八・二〇)

凡ての殺人者は、最初から其の計畫を立てるものではない。激した感情の結果、急に恐しい行爲をなすが、後では、ああ濟まなかつたとの、悔恨の情が何時までも續く。(例)他の人を殺した者は、終日、自らを恨み「私はこんな事を、する心算ではなかつた」といふ。しかし突差の場合に殺人者となつた者は、普通、その恐しい行爲の前に、惡しき感情が其の心中に育まれてゐる。(辭書を引くなら、二一の答にある意味の、眞であると知るであらう)妬み、にくしみ、うらみ等は、種子の如きものであり、亡されざる限り、害毒となる實を結ぶ。(例)サウル王は最初にダビデを羨み、次に憎み、更に殺さんと謀つた。結局、最後には自分が亡んだのである。

この誡命は又、他人の健康や安全を傷ける如き行爲の一切を戒めてゐる。例へば、無鐵砲な騎乘やドライブ、又は人々の幸福を害ふ酒や阿片を賣つて利益を占める如き商賣を止めてゐるのである。

自殺は神に對して罪である。之は又、屢々困難から逃れる卑怯な方法である。兎もあれ、本人の愚や罪の結果であるにせよ、ないにせよ、神は惠ぶかく在し、眞實もつて求めるなら、自殺せずにすむ道を示し勇氣を與へ給ふであらう。「怒をおそくする者は勇士に愈り、己の心を治むる者は城を攻取る者に愈る」(箴一六・三二)(また本書第三章答七を見よ)

二三、第七の誡命は何ですか。

「なんぢ姦淫するなかれ」(出二〇・一四)

二四、第七の誡命は、どうしてはならぬと言ふのですか。

第七の誡命は、考や言、見ること及び行爲に於て、汚れた見苦しい事を、してはならぬと言ふのです。

二五、第七の誡命は、どうせよと言ふのですか。

第七の誡命は、願にも行爲にも、潔かれといふのです。それで、私共は其の考や時間を、潔く正しくせねばなりませぬ。書物を讀むにも、畫を見るにも、歌ふにも、友を選ぶにも、その他、何でも氣をつけねばなりませぬ。

不潔は恐しき毒の如きもので、各方面に被害を及ぼす。その身體に病を來らせ、心を汚し、正しき仕事や、行儀よき仲間には不向である。最後には神及び潔く聖なる一切から永遠に分離されてしまふ。「凡て穢れたる者、また憎むべき事と虛僞とを行ふ者は、此處(天國)に入らず」(默二一・二七)

この恐るべき罪惡に陷らぬため、青少年は次の事を守られねばならぬ。

(一)善良にして、潔き書物のみを讀むこと。(適當に說明せよ)讀むのを躊躇する如き書は避け、その書に關して父母なり、救世軍の指導者に尋ねること。

(二)みだらにして、やくざな話に耳を傾けぬこと。

(三)潔くて正しい者をのみ、其の友とすること。

(四)健康に適する仕事に多く携ること。(その時間を植木の手入や、ハイキングなどに用ひることを勸めよ)

(五)適度に食物を攝ること。

(六)惡しき事を見せたり、勸めたりする歡樂場を避けること。

(七)惡思想を受附けぬこと。萬一それが心に浸入したなら、直に其の考を他に向けること。
(八)善良にして、高貴な思想を旺盛にすること。「凡そ眞なること、凡そ尊ぶべきこと、凡そ正しきこと、凡そ潔きこと、凡そ愛すべきこと……汝等これを念へ」(ピリ四・八)

二六、第八の誡命は何ですか。

「なんぢ盗むなかれ」(出二〇・一五)

二七、第八の誡命は、どうしてはならぬと言ふのですか。

第八の誡命は、盗み、欺き、賭事をしたり、不負や借りた物を返さぬのは、いけないと言ふのです。之は又、知りつつ傷けたり、毀したり、或は許も得ないで、他人の物を用ひたりしてはならぬといふのです。

二八、なぜ賭事は惡いのですか。

賭事は不正直だからです。即ち、賭をする人は、適當な方法を以て返す考なく、他人から何物かを手に入れようとするのです。賭事は又、本人を利己、爭ひ、負債、悲慘に至らせ、他人を苦しめ且つ滅亡に至らせるから惡いのです。

二九、負債せぬ爲には、どうすると宜しいか。

負債せぬよう身をつめる事です。萬一、負債するなら、定めた時に支拂ひ得ると、確信がある時に限りすべきもので、それも全部を返濟してしまふまでは、絶對に氣をゆるめてはなりませぬ。

三〇、萬一、誰かに不正直な事をした場合、どうしなければなりませぬ。

萬一、誰かに不正直をした場合には、出來る事なら、取つたものを返し、また力一ぱいに害うた所を償はねばなりませぬ。てなくば神樣の赦を受けることも出來ませぬ。

この誡命は、他人の所有を尊重すべきを敎へ、正當ならざる方法で、それを手に入れんとしてはならぬ事を示してゐる。誰しも盗人といはれる事を好まぬ。しかし小き事に於ける不正直は、取も直さず盗むことである。例へば雇主の時間を盗む事。(雇はれた者が時間を空費して)鉛筆や食物を無駄にすること。小錢にしてくれと頼まれた金を渡さぬこと。また手數料を着服するために、僞つて品物の價格を言ふこと等。(その他の例をあげよ)

ゲームに於ても、不正なる方法で相手を利用し、その人の勝利を失敗したり、又、勉强に於ても、他人の學んだ所を利用し、自分のものと見せる等は、いづれも不正直の行爲である。

借用の品物は、正確に返すべき定めである。然らざれば忘れてしまひ、その品物の正當な持主は、それを失うてしまふ事になるであらう。所有者の許可を得ないで、品物を持出すことは、屢々甚だ面倒なことになる。（例）商店に雇はれた少年あり、店の錢箱から金を内證で借りた。後で返す心算であつたのが、競技會に出席中、之を失うてしまつた。主人が金錢の無くなつてゐるのを發見して、本人の言譯をもきかず、さつさと暇を出してしまつた。

賭事も又、形の變つた盗みである。これは馬、犬及びカードに賭けることで、賭博や富籤に加はる事も同樣である。「急に金持となる」方法は、殆んど大低の場合に罪であり、危險である。安全なる唯一の道は、かかる事から完全に離れてゐることである。時には其のため、單獨で立たねばならず、變り物だ、交際知らずだなどと言はれる事もあらうが、そんな事に氣を病んではならぬ。

負債は甚しき惡である。これは

（一）二九の答に示されたるを除いて、當然その人に拂ふべきものを、拂はないのは不正である。

（二）負債は心の重荷である。

（三）之は自尊心を失ふ。

（四）之は更に負債の深入をさせる。

男女に拘らず青少年の時から「負債はしない」と決心し、之を一生の規則とするは、善いことである。信用借で美服を造るなどは、如何にも愚なことであらねばならぬ。また支拂濟でない品々を以て、人前に見せびらかすよりは、みすぼらしいものでも、自分の所有にかかるものを使用するは、一層よい事である。

「汝ら互に愛を負ふのほか何をも人に負ふな。」（ロマ一三・八）

若し過去になせる惡事の記憶が殘り、良心が引續き、それを償うて、正しくせよと苦めてゐるなら、幸福なキリスト者生活を送ることは不可能である。（說明の言を添へよ）（例）一青年あり、悪の座に進んだが、彼は前に居た店で、ラヂオの部分品を失敬した事を思出し、甚だ苦しんだ。最後に其の店にあてて手紙をかき、事の始末を述べ、盗みたる品を包み、お詫をいうてやつた。そして神よ赦し給へと祈り、今では幸福にして有要な一救世軍人となつてゐる。（若し時間が許せばザアカイの話をせよ。ルカ一九・一——一〇）

以上述べたる事共によつて、潔き（正直）手と善き良心とを有するは、一時的の品を獲得するより、更によい事なるを知り得るのである。

三一、第九の誡命は何ですか。

「汝その隣人に對して、いつはりの證據を立つるなかれ」（出二〇・一六）

三二、第九の誡命は、どうしてはならぬと言ふのですか。

第九の誡命は、一切の嘘と僞とを、いうてはならぬ。また讒言になり易い惡口を、つげてはいけないといふのです。

三三、嘘をつくとは、どういふ意味ですか。

嘘をつくとは、眞實でないと知りつつ、言や沈默、或は行爲によつて、本當らしく示すことをいふのです。

三四、神様は嘘や僞をいふ人を、どんなに扱ひ給ひますか。

神様は眞實でない一切の人を憎み、かつ罰し給ひます。彼は又、嘘つきは、天國に入ることが出來ないと、仰せになりました。

三五、若し誰かの事を、僞つて言うた時には、どうしなければなりませぬか。

若し誰かの事を僞つて言うた場合には、その人と神様とに詫びて赦をうけ、一方、力の限り其の惡事を元に直すよう努めねばなりませぬ。

證據を立てるといふ事は、他の人に就いての事實をいふのであり、僞の證據とは、誰かの事につき、眞實ならぬをいふ事である。法廷に於て、證據を立てる時には、「まこと、全部まこと、ただ眞實のみ」と約束せしめられる。萬一、後になつて眞實でないことが判明すれば罰せられる。僞をいふ舌は、甚だ禍害を來たす。神の御言には、舌といふは火の如きもので、最初は一寸した火でも、凡ての所有や生命まで燒きつくすに至ると、いうてある。(ヤコ三・五、六)(例)北米原野の大火は、火のついてゐたマッチが、落ちた結果であつた。

嘘といふものは、言でなくても言へるものである。(例)一少女あり、出席點をつけて貰つてから、そつと日曜學校をぬけだし、散歩して歸宅した。母が「集會に出ましたか」と問ふと、出席點の星がついてあるのを見せた。之は明かに嘘である。又、一義勇團員が會館の窓ガラスを壞した。分隊長が「誰がしたか知らないか、」と尋ねた時、彼は沈默して何も答へなかつた。之は「沈默の嘘」である。

僞の舌は屢々他人に對し眞實でもなく、親切でもない惡しき談話にふける。他人の失敗に關し話すが、之は度度讒言に至る。一旦、不親切な話が出ると、次から次へと傳はるに從うて大きくなる。最後には不親切といふ丈に止まらず、明白に僞となつてしまふ。(例)最初「花子は大食だ、甘い菓子を食べる。」といふのが、次には「花子は小遣の全部を甘い菓子に使ふ」となり、今度は「花子は委托金を菓子に使ひ込んでゐる」といひ、遂には「花子は金を盜んだ、」等となつてしまふ。

私共は神が「眞實ある神」なるを(申三二・四)よく記憶せねばならぬ。神には嘘だの、まがひだの言ふ事は絶對になく、嘘や僞は如何に小な事でも徹底的に憎み給ふ。

「さらば虚僞を棄てて、各自その隣に實をかたれ、我ら互に肢たればなり」(エペ四・二五)「凡ての苦、憤恚、怒、喧噪、誹謗および凡ての惡意を汝らより棄てよ。互に仁慈と憐憫とあれ」(エペ四・三一、三二)(また箴一二・一九、二二。一九・五。默二二・一五を見よ)

三六、第十の誡命は何ですか。

「なんぢ貪るなかれ」(出二〇・一七)

三七、第十の誡命は、どうしてはならぬと言ふのですか。

第十の誡命は、他人の金錢や持物を羨み、貪り、利己的に乞うてはならぬといふのです。これは又、他人の費用で己が利をしめたり、己が身分につき呟いてはならぬ

といふのです。

三八、第十の誡命は、どうせよと言ふのですか。

第十の誡命は、己が持物を以て満足し、自分の力で正當に得られる迄は、その缺けた物を手に入れてはならぬといふのです。

貪ることは、正當に自分の所有でない物を、利己的に得んとする事である。或者は他人の所有品を、どんなに羨んだからとて、之を取らなければ差支ないと思ふ。しかし嫉み羨むことは、神の前に於て罪である。貪ることは、

(一)不滿足の精神を示す。

(二)愚痴、咳及び小言に陥りやすい。

(三)屢々盗みに至る。(例)アカン(ヨシ七・)

もし自分に所有しない事が因で不滿足に陥るなら、自分の有つて居るものを數へあげ、神に感謝せよ。快活にして滿足する少年少女は、陰氣な氣分を一掃するに力がある。殊に困難な時には餘計である。「金を愛することなく、有るものを以て足れりとせよ」(ヘブ一三・五)

三九、イエス・キリスト様は、十誡を御認めになりましたか。

イエス・キリスト様は、十誡を自ら守る事により、また之を憶えて守れと教へ給うた事により、認められました。彼は又、之を二つの大切な誡命に、まとめられました。

四〇、イエス様が、二つにまとめられたといふ、神の誡命は何々ですか。

イエス様が、まとめられたといふ二つの誡命は、

(一)「なんぢ心を盡し、精神を盡し、思を盡し、力を盡して、主なる汝の神を愛すべし、」

(二)「おのれの如く汝の隣を愛すべし、」

の二つです。(マル一二・三〇、三一)

私共は此らの誡命を、單に外部的行爲に關するものとのみ考へてはならぬ。その行爲を起させる思想、感情にまで思を及ぼさればならぬ。それで外面的は正しく見ゆるも、心では此らの罪を犯し、誡命を破るといふ事があり得る。(二一及び三七の例)

惡しき思想や感情に對する、神の大なる救は愛である。(四〇の答を繰返せ)若し私共が全力を盡して神を愛するなら、神に對する私共の務を敎ゆる最初の四つの誡命を守る事によつて、彼を喜ばせるであらう。若し己の如く隣人を愛するなら、自分を害せぬ如く、隣人を傷けようとしないであらう。かくすれば私共の他人に對する務

を、示したる後の六つの誡命を破らないですむ。(二)の答を見よ。これが聖書に「愛は律法の完全なり、」(ロマ一三・一〇)とある意味なので、かかる愛は、之を神に求める者に、與へらるる新しき心からのみ出る。(エゼ三六・二六)「汝ら若し我を愛せば、我が誡命を守らん」(ヨハ一四・一五)「愛する者よ、われら互に相愛すべし、愛は神より出づ、おほよそ愛ある者は、神より生れ神を知るなり」(ヨハ壹四・七)

第十一章　聖潔

一、救はれた人が、罪に陥るのは、何故ですか。

心から神様を愛する人の心にも、その多くは利己、誇、怒、妬、世俗の考、その他の惡が殘つて居り、之等が誘惑の時、惡しき言や行爲になるからです。

二、救はれてから後でも、私共は引續き罪を犯さねばならぬでせうか。

救はれて後、引續き罪を犯さねばならぬ必要はありませぬ。神様が私共に清き心を與へ、すべての罪から守つて下さるからです。

三、清き心とは何ですか。

清き心とは、聖靈が其の心に宿り、守つて下さる結果、全く潔められ、もはや罪深い願や、感情がなくなつた心のことです。

私共が神の御許に來て、罪の赦を求めるとき、過去に言うたり、爲したりした一切の惡を赦して下さる。(六章答二を見よ)救はれて最初の程は、甚だ幸福を感ずるが、暫時すると、怒やれたみ其の他の惡感情が未だ心に殘つてゐるを見出す。私共は此らの惡感情を表すまいと努めるが、それでも時々は燃え上つて、實際上の罪に陥る。例へば、カッと怒つたり、又は利己的の行動に陥る。その結果、自ら恥ぢ、果は、本當に救はれて居るか否かを疑ふに至る。この困難の原因は、即ち救はれた後、まだ心に殘つて居る罪である。(第三章答三を見よ)この罪を救ひ給ふ神の惠が、即ち「清き心」である。(答三を繰返せ)

ブレングル中將の御話に、一少年あり、彼は次の如く、母に言うたさうである。「母さん、私は救はれた子供らしく努めるのです。あなたが種々おほせられる時、その通りするはするのですが、しかし、心の中では、しやくにさはる事があるのです。私の願は年中よい心で居りたい事です」と。(適當に敷衍せよ)

「ああ神よ我が爲に清心をつくり、わが衷になほき靈を新に起し給へ」(詩五一・一〇)

四、清き心の事を、他に何といひますか。

清き心は屢々聖潔、全き救、全き聖別、惠又は全き愛と言はれます。

五、清き心が得られるといふ聖書の言二つを示して下さい。

イエスは仰せられました。「幸福なるかな、心の清き者、その人は神を見ん、」（マタ五・八）と。使徒ヨハネは又、「もし己の罪を言ひあらはさば、神は眞實にして正しければ我らの罪を赦し凡ての不義より我らを潔め給はん、」（ヨハ壹一・九）といひました。

此らの聖句は、清き心が甚だ大なる惠である事を、知るに十分である。「聖潔」の實際の意味は、完全又は健康である。健康體には熱病などの如き病は少しもない。その如く健康なる靈魂にあつては、恐しき罪の病は、少しもないのである。「神の我らを招き給ひしは……潔からしめん爲なり」（テサ前四・七）

「全き救」とは、單に私共が罪を犯さぬといふのみでなく、その心から、一切の罪を除き去られる事である。それ故、私共が全く救はれたといふ時は、かの「救はれたが未だ汚點がある、」といふ少女の如きものとは違ふ。

「全き(完全)聖別」には、二つの意味がある。一つは罪から離れること、他は神への奉仕に聖別されることである。「神みづから汝らを全く潔くし」（テサ前五・二三）

「惠」とは、神が各人へ個人的に賜ふ惠のうち、最大のものだからである。

「全き愛」これは私共の心が、神と人とを愛する愛に滿された時に實現する。「全き愛は懼を除く」（ヨハ壹四・一八）

神が此の惠を私共に賜ふとき、それは絶對に過失なき者となる意ではない。私共の不完全な心は、屢々失錯の原因となるであらう。しかし罪を犯さない者となる。私共は常に目を覺し、かつ祈り、失敗せぬよう神の助を求めればならぬ。でなくては惠に成長しない。言を換へれば一層イエスに似た者とはなれぬ。（例）庭園から雜草が除かれた時、他の植物は更に一層よく成長する。

六、聖書以外に、私共が清き心を得られるといふ證據がありますか。

最も幸福にして、有要なる神の僕たちは、心を潔められ、罪に陷らず、その生活を以て、その證の事實てある事を示しました。

（例）工場に働く一小除候補生があつた。短氣で忍耐心がなかつた。一夜、聖潔の惠を求めた。暫時のち、彼女は集會に於て、その潔められた事を證した。すると會館の後方に坐つてゐる亂暴娘が士官に「あの證は本當です、私は彼女と一緒に働いてゐる者です。私共が救世軍についてからかふと、いつでもがむしやらになつて怒り出し、變な事を出まかせに言ひました。所が今日では、私共が嫌がらせるに拘らず、彼女は微笑し、親切に、柔しく答へるのです。それで彼の宗教が眞のものであると信じました。仲間の幾人かは、次の日曜に會館へ來たわけです、」といつた。

七、清き心を有つてゐる人でも、誘惑や悲しみに遭ひますか。

清き心を有つてゐる人でも、度々誘惑や悲しみにあひますが、これらは罪ではありませぬ。神樣は、よしどんな甚しい誘惑や、悲しみのうちに居る時でも、罪に陷らぬよう守つて下さいます。

神は聖書の何處にも、清い心を有つてゐるからとて、誘惑や悲しみのない人になるとは、教へて居給はない。

けれども斯る場合、(イザ四三・二を讀め)私共が神を信頼する間は、必ず勝利を與へると約束された。

私共は心が暗くて、困難な道を辿るとき、救主イエスが、先づ同じ道を踏んで往かれた事を、記憶せればならぬ。彼は「凡ての事われらと等しく試みられ」給へる御方であつた。(ヘブ四・一五)彼はラザロの墓で(ヨハ一一・三五)またエルサレムを見て泣き給うた。(ルカ一九・四一)イザヤは彼の御事を、「悲哀の人にして病患なしれり、」というた。(イザ五三・三)さり乍ら彼は勝利を得られ、私共も亦彼によつて勝利者たることが出來る。

八、どうすれば、清き心が與へられますか。

清き心を與へられたいなら、まづ第一に本當に救はれねばなりませぬ。次に熱心に此の惠を求め、惡及び疑はしき一切の事を棄て、神樣の御意を爲さんと努め、その上、神樣が自分を潔めて下さると、信ずるのです。

この惠は恰も發掘者が、金や寶石を堀出さんとする如き熱心をもつて、心から求める者にのみ與へられる。善か惡かが明白でない事は、一切疑はしき事である。(例)救はれた一少年が、次の如くいうた。「僕は今後、少年トランプ會に屬すべき筈のものか、どうかわからない」と。聖書には、「凡て信仰によらぬ事は罪なり、」(ロマ一四・二三)と敎へてある。

私共の所有する一切は、神が自由に用ひ給ふため、獻げればならぬ。(例)一少年が萬年筆を父に與へた後、「事務所へ持つて行つてはいけませぬ。クリケットの點をつけるのに、時々使ひたいからです、」というた。父は「私の好きな所、どこへでも持つて行きます。でなくば要りませぬ」と答へた。

神の嫌ひ給ふ所を全部すて、己が所有する一切を獻げたからとて、それで心の中にある罪を除くことは出來ない。潔めるのは神の御業である。私共が此の惠を願ひ、イエスの故に神が與へ給ふを信じればならぬ。かく實行するとき、全き救を得ることが出來る。(ヘブ七・二五)「その名をイエスと名づくべし、己が民をその罪より救ひ給ふ故なり」(マタ一・二一)

九、清き心を與へられると、どんな結果になりますか。

私共の心が潔められるなら、試煉の最中でも愛と喜とがあり、神樣の惠によつて、御意に從ひ、奉仕することが喜となり、誘惑にも勝利を得ることが出來ます。

清き心を有つてゐる人は、神と議論しない。それ故、困難と試煉の中にも、神により平和を心に宿し得る。(ピリ四・七)(例)大洋の底は、海面が暴風で大波の時にも、少しも動搖しない。

かかる人の神と人とに對する愛は、ぐらつかない。そして力の限り、方法をつくして彼らに奉仕せんと願ふ。(ヨハ壹四・一二)その裏なる罪は、一切その存在を失ひ、外部から來る凡ての誘惑に勝利を得る。(ロマ八・三七)

第十二章　最後の事件

一、人類の歷史に於ける最後の事件は何でせうか。

人類の歴史に於ける最後の事件は、キリスト様の再臨、死者の復活及び審判の日が來ることとて、その結果、或者は天國に往き、他の者は罰せられ地獄に落ちることとてす。

私共の心と聖書とは、墓の彼方に生命のある事を告げる。しかし乍ら何事が起るかの消息は、ひとり聖書によつてのみ其の幾分を知る事が出來る。神は其の世界の事を多く知らせる必要を認め給はず、此の問題に對する好奇心は、不必要である。しかし神は、未來の生命に關し、起るべき或る部分を、私共に知らせ給ふ。

私共人間は此の地上生活に於ても、相當の準備がなくてはならぬ。(例)移民は新しい植民地に必要な荷物の用意が入用である。まして答一に錄されたる未來に於ける數々の出來事に對して準備することは、更に一層重要な事であらねばならぬ。(繰返す)

二、キリスト様の再臨とは、どういふ事ですか。

キリスト様の再臨といふのは、能力と榮光とを以て彼が再び來り、死人を甦らせ、この世を審き、永遠の御國を打建て給ふことです。

私共の主イエスが、第一回に降臨し給ひたる時は、弱さと謙遜とを以て來られた。厩にて生れ、馬槽に臥せられ、力なき赤坊であつた。これに注意した者は、ほんの僅な人々にすぎなかつた。しかし彼が再び來り給ふときは、「榮光の王」としてであり、「號令」と「神のラッパ」とを以て臨み給ふ。(テサ前四・一六)その伴ひ給ふは能力の御使たちで、(テサ後一・七)凡ての人々は之に注意を拂ふのである。(默一・七)「人の子の全能者の右に坐し、天の雲に乘りて來るを見ん」(マタ二六・六四)

三、イエス・キリスト様は、再臨の時を敎へられましたか。

イエス様は弟子達に、再臨の時を知つて居るのは神様だけて、他に誰も知らないと仰せられました。

四、イエス様の再臨が、突然で豫期しない時であるとするならば、私共はどんな生活をせねばなりませぬか。

私共は主なるイエス・キリスト様の、再臨に對して差支なき生活を、せねばならぬのみてなく、出來る限り他の人々にも、用意させる必要があります。

イエスは御在世當時、その弟子達に度々御自分が再臨することを約束せられ、かつ其のため目を覺し、かつ祈るべき必要を告げ給うた。(十人の處女に關する譬を讀め。マタ二五・一——一三)この御約束は、初代敎會の信者達にとり、この上もない喜であり、彼らは自分達の存命中に、再臨があるものと思惟した。今日の私共は、彼らに比し、此の大事件に千九百年だけ近づいたのであれど、しかし其の時期を知ることは出來ない。ただ其の用意として、

(一)その罪が赦されて居られねばならぬ。

(二)日々に神を喜ばせ奉ること。これは單に祈つたり、聖書を讀んだりするのみではなく、忠實に其の日の職分を行ひ、愛と快活と忍耐とを以て神の御意を知り、之を行ふことである。「汝らも耐忍べ……主の來り給ふことは近づきたればなり」(ヤコ五・八)「されば目を覺しをれ、汝らの主のきたるは、何れの日なるかを知らざればなり」(マタ二四・四二)

五、死人の復活とは、どういふ事ですか。

死人の復活とは、イエス・キリストの再臨のをり、死にたる凡ての者が、今一度生命に甦ることです。

イエスの復活は、榮光ある事實である。之は基督者に大なる喜と確信とを與へる。なぜなら彼が墓から勝利ある復活をなし給うたと同樣に又、私共も甦るからである。(第四章答一九)私共は其の復活の體が、如何なるものかを明白には知り得ないが、甚だ大なる變化が起ることだけは間違がない。この世にあつては、弱と苦しみ及び病とに惱み、最後には死ぬるが、天國に於ては、

(一)病なく苦しみもない。

(二)再び死なぬ。

(三)復活せられたるイエス・キリストの體の如きものとなる。(ピリ三・二一)

(例)百合の球根を地中に埋めると、春になつて芽を出し花をつける。

「我は復活なり、生命なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん」(ヨハ一一・二五)(またヨハ六・三九。ロマ八・一一。コリ前一五・五二——五七を見よ)

六、審判の日とは、何のことですか。

審判の日とは、死人が復活し、曾て生きたる者が凡て、神樣の獨子の前に現はれて、審かれる事をいふのです。

七、審判の時には、どんな事が起りますか。

審判の時には、義しき者と惡人とが分けられます。そして彼らが此の世に生きてゐた時の行爲に隨うて、或者は報賞をうけ、他の者は罰せられます。

八、審判主は、義しき者に、何といはれますか。

審判主は義しき者に「わが父に祝せられたる者よ、來りて世の創より汝等のために備へられたる國を嗣げ、」(マタ二五・三四)といはれます。(

九、審判主は惡人に、何といはれますか。

審判主は惡人に、「詛はれたる者よ、我を離れて惡魔とその使らとの爲に備へられたる永遠の火に入れ、」といはれます。

一〇、キリスト樣の事を、聞いた事のない人々は、どんなに審かれますか。

救主イエスは、各人の事を十分御承知ですから、一度も御自分の事を聞いた事のない人は、其の人が與へられてゐた光に從うて、審き給ひます。

或人は審判の日を甚く恐れる所から、その事に就いて考へようとしない。中には之を否定する者もある。しかし之は神が斯く發表して居給ふ以上、少しも變へることの出來ぬ事實である。（使一七・三一）更に此の世では、屢々不公平な事がある。例へば、善人が善事のために苦しめられ、之に反し惡人が不正を行うてゐるに拘らず、繁榮することがある如きそれである。それで私共の心には、何時かは惡が糺され、凡ての人が公平に扱はるる日の來るを感ずるのである。

賢い男は、時々この世の審判から逃げおほす。しかし神の審判から、逃れ得るものは唯の一人もない。各人が出でて、自分で申開きをせねばならぬ。審判は極く綿密で、見逃すなどといふ事はない。人々が永久に隠し得られると思うてゐる秘密も、光の下に持來らされる。（マタ一〇・二六）

審判者はイエスであり、彼は

（一）凡ての人が救はれる爲に死に給うた。

（二）神として一切を知り、完全に公平で在す。（二章答五、九）それ故、間違や不公平などはない。

（三）人として、人間の如何を、十分御承知である。彼は誘惑にあひ、正義を行はんとて苦しみ、善良なる御生涯に反對する一切と戰ひ給うた。

或者はイエスを無視した事につき、申開きをせねばならぬであらう。之は一切の罪の中で、最も大なる罪である。そして彼らは「我を離れ去れ」との、御言を聞くのである。（答九を繰返す）しかしイエスを救主として信じ、その御意を行はんと努めた者は、「來れ」との歡迎の辭をうける。（答八を繰返す）

審判の日は、分離の日である。（マタ二五・三二、三三）この世では善人も惡人も一緒に暮し、共に働き、時には救世軍の集會にも同席する。しかし其の日には、永久に分離される。（マタ一三・四七——五〇を讀め）

「我らはみな必ずキリストの審判の座の前にあらはれ、善にもあれ、惡にもあれ、各人その身になしたる事に隨ひて報を受くべければなり。」（コリ後五・一〇）「視よ、われ報をもて速かに到らん、各人の行爲に隨ひて之を與ふべし」（默二二・一二）（默二〇・一一——一五を讀め）

一一、天國とは何ですか。

天國とは神の民が落付く未來の、榮光ある家庭で、そこで神樣と偕に、何時までも幸福を樂しむのです。

一二、なぜ天國には、悲しみがないのですか。

天國には罪や病や死、その他、悲しみの原因となるべきものが、一つもないからです。

一三、天國には、どんな喜がありますか。

天國の喜は、私共の想像以上に、榮あり且つ變つたものでせう。しかし最も嬉しいのは、救主が其處に在し、完全なる奉仕が出來ることでありませう。

一四、天國で私共の知人を、知ることが出來ますか。

私共は天國で、たしかに知人を知ることが出來、この世に居た時とは、遙かによく知ることが出來ます。

天國は私共の理解力が容易には及ばぬ程の所である故、神の子等に、其の意味を十分には示し得ないのである。ともあれ私共の知れる限り、天國では

(一)死によつて別れし愛する者と再會が出來る。

(二)盡きざる光と榮とがある。恐怖を起す暗黑は最早ない。神の光が眞夏の太陽に於ける光よりも明るく輝く。(默二一・一一、二三)

(三)變らぬ平和と喜とがある。不安と不幸とを齎す一切の原因は、門外に排除され、戰爭、貧困、飢餓、苦しみ、死などは、永久に其の姿を現さぬ。(默二一・四)喜に滿つる心は、歌ひ得る心である。天國にある香榮は、この地上に存する歌より、遙に立派なものである。(默一五・三、四)

(四)一つの汚點なき聖さがある。そこでは一切の思想、言語及び行爲が聖い。(默二一・二七)

(五)全き愛。頑固な人や利己的の者、或は愛なき者は一人もない。人を苦しめたり、害したりといふ不親切は、見たくもない。

(六)救主に對する幸福な奉仕。天國に居る者は凡て勤勉である。彼らは如何に仕事を命ぜらるるかは知らぬけれど、救主であり王であるイエスに對する奉仕は、彼に對する愛の故に、喜んでなされる事は間違ない。(默二二・三)

(七)イエス自ら居給ふ。彼の居給ふことは、彼らにとり最上の喜である。彼らはこの世で彼を愛した人であつたが、今は額と額とを合せて、彼を拜することが出來る。(默二二・四)

しかし天國は、之に入る用意ある人の爲にのみ用意された所である。それ故、潔らからざる人が、もし此處に入らんとするなら、其處は自分の居る所でない事を感じ、あはれな門外漢たるを認識する。(例)女子義勇團員がさつぱりとした服裝してゐるのに、もし額も洗はず、汚い風をした者が居るなら、その子は甚だきまり惡く感ずる。

「神のおのれを愛する者のために備へ給ひし事は、眼いまだ見ず、耳いまだ聞かず、人の心いまだ思はざりし所なり」(コリ前二・九)

(教訓)この地上にて潔くて、愛を以て有要な生活をなし、以て天國に於ける聖にして、愛あり、かつ喜の奉仕をする準備をせよ。

一五、地獄とは何ですか。

地獄とは惡魔と其の使らとの爲に、用意された所であり、また頑固に救はれる事を拒んだ者が、審判の後、この所に何時までも追放されるのです。

一六、地獄に落ちた靈魂の、みじめな理由は何ですか。

地獄に落ちた靈魂の、みじめな理由は、神樣の正しき怒、地上に在りし時の己が惡しき行爲の後悔と、惠を拒んだ記憶、それに自分の惡感化のため、同じ地獄に落ちて居る者からの咎めによるのです。

一七、愛ある神樣が、人間の地獄に落つるのを許し給ふとは、どういふ意味ですか。

愛に滿てる神樣といへども、自ら好んで罪を犯しつづけ、神樣の備へ給へる救を拒み、地獄へ行く者を、止めることが出來ないからです。

罪といふものは、常に分離を來す。(例)國家の法律を破るものは、刑務所に投ぜられる。審判の日、神によつて宣告が與へられるや、(答七、八、九を見よ)罪人は神と善人と一切の潔きもの、聖なるものから分離される。生ける間、惡寃に事へた者は、未來に於ても、その報をうけねばならぬ。(答一五を繰返せ)

地獄に於ける罪人の悔恨即ち心の苦悶には、次の如きものが含む。

(一)若し救はれて居たなら、こんな事はなかつたに、との連續せる記憶。

(二)過去の一切が起らなかつたら、或は全部が赦されたならとの連續せる願望。

(三)惠を求めるには、既に遲く絶對に取戻しがつかぬとの連續せる認識。

他人を罪に陷れたり、また地獄に落つる導をした者にとり、「あなたさへ居なかつたら、私はこんな所に落ちるのではなかつたに、」と非難せられる事は、とても我慢の出來ない苦惱である。

さり乍ら地獄にて、最も苦しく惱ましいことは、神の正しき怒を、まざまざ心に感ずることである。(例)一少女あり、次の如くいうた。「誰々が私を立腹させる事は、一向平氣です。しかし母さんの怒には、とても堪へられませぬから、いつも逃れようと努めます」と。罪人が神の怒から逃れようと願ふが、それは無効である。この神は愛の御方で、彼らを罪から救はんとて、彼自らを與へ給うた神である。神の愛を拒絶した事は、やがて神の正義に伴ふ怒を、己が上に招いたのである。

聖書には地獄の事に關し、二つの事が明白に示してある。

(一)罪人が其處に落ちたのは、自業自得である。若し自ら選びさへするなら、天國の喜を受けることも出來た。しかし彼らは自ら惡を好み、イエスの提供し給へる救を拒んだのである。罪を選んだ結果、自然、その刑罰をも受けるに至つた。

(二)地獄は永遠に續くこと。私共がこの世にある間は、よし苦しみや、悲しみの最中にあるとも、やがては終を告げるとの希望によつて慰められる事が屢々ある。しかし地獄にあつては、かかる慰めは絶對にない。神は人間に不滅の靈を與へ給うた。(一章答三)それ故、もし罪の結果、地獄に落ちるとすれば、その靈魂は永遠に、苦

惱の裡にあられねばならぬ。

私共が忘れてならぬのは次の事である。イエスは歴史あつて以來、最も柔しき御言を語り給へる御方であれど、同時に又恐るべき地獄と、その刑罰とに關し述べ給うたといふ事實である。（マタ一三・四二）

「惡しき人は陰府にかへるべし、神を忘るるもろもろの國民も亦しからん」（詩九・一七）「斯る者共は主の顔と、その能力の榮光とを離れて、限なき滅亡の刑罰を受くべし」（テサ後一・九）（またマタ二二・一三、默一四・一一を見よ）

第十三章　救世軍々人

一、救世軍とは何ですか。

救世軍とは、救はれた人々の一團で、神樣と人とを愛し、互に助け合ひ、神樣の救を全世界に擴むるため、一つとなつたものです。

救世軍はウイリアム・ブース及びカサリン・ブースによつて創立された。一八六五年、當時、牧師であつたウイリアム・ブースは、東ロンドンで集會を開いた。彼は其の邊に住む罪と禍とに惱める人々に甚く同情を寄せ、彼らを救はんと決心した。回心者らは訓練をうけて、彼を輔佐する者となつた。數年間は「基督教傳道會」と稱したが、一八七八年、その團體の名を「救世軍」と改めた。反對が多かつたに拘らず、著しく進歩をとげ、創立者が他界せる一九一二年には、五十八の國と植民地に、三十四の言語を以て救を宣べる迄に至り、士官及び候補生の數も、一萬六千人程となつた。その後二十年、即ち一九三二年には、その數が七十五言語、八十四ケ國及び植民地、二萬六千人の士官及び候補生に增加した。創立者は一少年たりし時、「ウイリアム・ブースにつける一切を神に獻げ奉る」と、決心したが、その獻身の結果として、救世軍が產れたのであつた。

二、救世軍々人とは、何ですか。

救世軍々人とは、罪と惡魔との大なる戰に參加し、神樣と人々の救のため、救世軍に加はつた人のことです。

軍人の爲すべき職分は戰ふことである。この地上の軍隊にあつて、それが自分の意志によつて成したる志願兵であるも、又は國家の法律による徵兵であるも、兩方共、その軍人としての職分を全うすべき事を要求せられる。救世軍人は全く志願兵である。彼らは自ら進んで、神の側に屬する者で、喜んで戰ふ人々であり、而も人を殺す爲でなくて、人々を罪から救ふ戰をなす者である。

三、救世軍々人として戰ふは、容易なことですか。

眞の救世軍々人として戰ふは、容易なことではありませぬ。なぜなら救世軍人は、世俗と肉慾と惡魔に對抗して戰ふからであります。

戰が激しいのは、敵の巧妙と力とに比例する。(例)救世軍人が對抗すべき三つの敵とは、

(一)世俗。その快樂、流行、力を愛すること、利己の精神、聖からざる野心など。(ヨハ壹五・四)

(二)肉慾。肉體的に有する自然的願望、例へば安逸を求めることなど、これらは當然、本人によつて制御されねばならぬ。然らされば彼が肉慾に支配せられる。(パテ前二・一一)

(三)惡魔。之は事實、活ける存在である。全能にあらざるも、非常に強い力を有する。神を憎む惡賢い者であり、正義、純潔及び眞理の敵である。(パテ前五・八)

「汝キリスト・イエスのよき兵卒として、我とともに苦難を忍べ」(テモ後二・三)

四、救世軍人として戰ふは、名譽な事ですか。

救世軍人として戰ふは、甚だ名譽な事です。なぜなら、世界を救ふといふキリストの御事業に加はり、その喜と特權とを、受くる者の一人だからです。

救世軍に加入するは、決して恥づべき事ではなく、反つて名譽で、又特權でもある。(例)他人を危險から救ふ消防夫や、救命艇の乘組員となるは、少しも恥づべきことではない。救世軍人は、人々を罪から救ひ、神の民となすため、イエスと一緒に働く者で、最高の榮譽ある働である。

若き救世軍人の或者は、邪曲にして下品な、やくざ者の間に居る時、ためらふが之は愚な事である。むしろ救世軍を誇らればならぬ。なぜなら、イエスが地上に在せし時、「取稅人や罪人」と共に飲食し給へる際、侮られて惡口をいはれ給うたが、同じ足跡を踏んでゐることを示すものだからである。(マタ九・一一)

五、救世軍人は幸福ですか。

眞の救世軍人は幸福です。なぜなら火の如き困難や、試煉のうちにあつても、救主の臨在を喜ぶことが出來るからです。

眞の救世軍人の幸福は、外部的の奬勵にはよらない。(例)パウロとシラスとは、牢獄中で歌うた。(使一六・二五)救主を認めるとは、

(一)臨在。目に見えないとは雖も、イエスは私共と偕に在し、勇氣と慰安とを與へ給ふ。

(二)能力。手强い戰のうちにあつても、勝利を得しめ給ふ。

(三)賞讃。神が私を喜んでゐて下さるとの事を知る。之は非常な滿足を齎す。

此の如き經驗をする兵士は、如何で喜ばすに居られやう。救世軍の初代にあつては、かかる兵士の綽名を「ハレルヤ」といはれた。その理由は、餘り度々彼らがハレルヤと稱へたからである。この言はイエスの愛と、奉仕から來る喜が、その心に滿ちた結果、出で來たものであつた。

「願くは希望の神、信仰より出づる凡ての喜悅と平安と……希望を豐ならしめ給はんことを」(ロマ一五・一三)

(教訓)喜に滿ち、朗かな救世軍人は、その宗教を人々に傳へる。

六、どうすれば救世軍人になれますか。

救世軍人になるには、先づ第一、よく救はれて實行に現し、軍中の約束に記名調印

し、軍旗の下にて入隊式を受けねばなりませぬ。

約束や宣言に記名調印することは、最も嚴肅にして、責任の加はる事で、(例)殊に神聖なる事柄に餘計である。記名調印したからには、名譽が加はると同時に、その約束を履行すべき責任がある。よし都合あしく、損失を招く場合にも、尙かつ守らねばならぬ。(詩一五・四)それ故、大人兵士でも、少年兵でも、その軍中の約束に記名調印する前には、十分よく讀み、その意味のわからぬ所は尋ね、その上、忠實にこの誓を實行出來るよう祈られねばならぬ。

軍中の約束には、次の事が含まれてゐる。

(一)個人的の救。

(二)救世軍の信ずる重要なる教理に對する信仰。

(三)常に善良なる生涯を送らんとする意志。(後に答一二にて學ぶ)

(四)救世軍々人たらんとする願。

(この最後の部分は、十三歳位以上の青年となつてのみ適用される)

七、救世軍だけが、神様に屬ける民の團體ですか。

救世軍だけが、神様に屬ける民の團體ではありませぬ、しかし此の軍隊は、神様のために此の世界で、特別の働をするのに造られた團體です。

八、救世軍の働とは何ですか。

救世軍の働とは、各階級の人々、ことに他の人々が顧みない者共を導いて、神に來らせることです。

(例)建築商會は各種の職人を雇ふ。例へば、煉瓦工、大工、鈴工その他必要に應じて使用するが、いづれも同一商會に屬し、同一の仕事即ち建物を造ることに携る。

斯の如く我らの主は、救世軍以外にも、眞面目な基督者で、奉仕する者を多く有し給ふ。そして彼らの流儀は、私共のとは違ふこともあらう。しかし其の目的は同一で、即ち神の榮光を顯し、その御國を打建てる事である。

救世軍はロンドンでも、人々から無視された最も甚しい人々の間で其の働の旗上げをした。(答一を見よ)そして凡ての人々を助けてゐるうちに、私共の働は、人類の最も貧しく、かつ必要ある人々に向つてなさるべき、特別の傳道たるを認識するに至つた。(例)「貧民窟の神」から、之を得ることが出來やう。「靈魂に往け、眞一文字に極惡人へ往け、」とは創立者のスローガンであつた。

九、救世軍が神様によつて造られ、かつ導かれてゐると信ずる理由六つをいうて下さい。

以下の六つは、救世軍が神様によつて造られ、かつ導かれてゐると信ずる理由です。

一、救世軍が神の榮光と、人類の救及び祝福とのため存在してゐること。

二、救世軍は救はれた人々が集り、神に仕へる約束を以て組織されてゐること。

三、救世軍が凡ての民族から、多くの人々を救主に導いて居ること。その中には最も惡しき、哀れな人々も居る。

四、救世軍が神樣の御助で、數へきれぬ困難を、不思議に切拔けて來てゐること。

五、救世軍が聖書全體を、神の御言として受入れ、かつ兵士達に對し、其の教に從ふべきを期待してゐること。

六、救世軍がキリストの、「全世界を巡りて凡ての造られしものに、福音を宣傳へよ。」との命を行はんと勵んでゐること。（マル一六・一五）

（一）救世軍は如何なる人をも、富ませたり又は名高くするために存在してゐない。創立者は自ら有名になるなどとは毛頭も考へられなかつた人である。その東ロンドンで働を始められたる折には、將來、その名聲が世界にひびく等とは露程も考へて居られなかつた。（一を繰返せ）

（二）教育や地位及び財力などは、救世軍の階級に織込まれる餘地がない。その回心、聖なる生活、救靈の戰鬪精神が、軍人たる資格を賦與する。（二を繰返せ）

（三）救世軍萬國大會に於て、フランス人、支那人、イギリス人、ツールー人、赤色インド人、オーストラリヤ人その他の國々の人々は、相會して主にある兄弟、姉妹の交情を暖め、共に主を讃美した。これ等の人々は大部分、救世軍の惠の座にあつて悔改めた者共である。（三を繰返せ）

（四）救世軍の出遭うた夥しい困難は、餘りに甚しいので若し神の導と支持がなかつたら、軍隊は遠の昔に消滅してゐたであらう。それ故、ダビデの言は其の儘この事に當嵌るであらう。（詩一二四・一——五）（四を繰返せ）

（五）救世軍は神が其の御言に告げ給へる所を、正しく受入れ、之を實行し、また神が聖書を以て、私共の日常生活の指針となし給へるを信ずる。（五を繰返せ）

（六）多くの救世軍人がなせる證言によれば、彼らは軍隊に加入せることによつて、主が其の弟子達に命じ給へる所を、最も廣く行ひ得、また最上の機會が得られたと。（六を繰返せ）

一〇、大將や其の他の上官は、どうして救世軍を指導されますか。

大將は凡ての救世軍人が守るべき規則を定め、また士官、下士官その他の指揮者を任命し或は任命せしめて指導されます。

一一、救世軍人が軍律、及び其の指揮者の命令に從ふべき三つの理由は何ですか。

次に示す三つは、救世軍人が軍律、及び其の指揮者の命令に從ふべき理由です。

一、もし救世軍が神樣の御意を果さんとし、正しき方法で之を行うてゐるなら、服

從するは當然です。

二、彼らは軍人たる特權を許された者ですから、入隊したとき爲せし約束を、己が體面にかけて果ずべき筈です。

三、神樣の御言には、主にありて、己が上に立てられた人々に從へとあります。

學校にしても、小隊であつても、または國家であつても、規則なくして、然るべき統制のとれる所はない。(例を與へよ)救世軍々律は、一時に出來たものではない。いづれも救世軍の新な進歩上必要のため、注意深く考へ出されたものである。(例)數年前、救世軍には未だ救世義勇團の組織がなかつたころ、この運動が持込まれたので、その統制上必要な軍律が制定された。救世軍人にして其の軍律に對し、小言をいひ得る權利を有する者は一人もない。なぜなら、夫々誰も强制的に軍人となつたのではないからである。(註解答二を見よ)救世軍に加入せんと欲する者は、その規則を己が體面にかけて守るべき責任がある。大人に對する規則は、「軍令及軍律兵士之卷」にあり、少年兵のは「問答」に示されてある。

大昔、神は其の民のために指導者を任命された。例へばモーセ、ギデオン、パウロなどは其の人である。その如く今日も亦、指導者は必要であり、でなくば混亂に陷るうれひがある。大將、士官や下士官達は、私共が愛し敬ひ、その命に從ふべき方々で、神によりて選ばれたる男女である。(第八章答五を思起せ)

(教訓)貴下の上に立てられた上官に、躊躇せず喜んで從ひ、軍律を實行するため努力せよ。

一二、救世軍人の行ふべき、十の務とは何々ですか。

一、服從と信賴とを以て、神を喜ばせること。

二、不義の快樂、惡い友達、及び世俗の服裝をすてること。

三、アルコール性の飲物を用ひぬこと。

四、汚れた話や愚な話をせぬこと。

五、言も行爲も眞實であること。

六、誰にても柔しく、動物にも親切であること。

七、軍隊に忠義を盡すこと。

八、救世軍の働に必要な費用を助くること。

九、軍律に從ひ、指揮者の命に服すること。

一〇、他の人々を救ふため奉仕すること。

(一)(第七章答四、六、七を思起せ)

(二、三)(後に出で來る答一三、一四を見よ)

(四、五)(第十章答二三——二五、三一——三四を思起せ)

（六）動物に不親切なるは、卑怯下劣である。神を愛することは、彼の造り給へる者に對する愛を起さしめる。（箴一二・一〇を讀め）（例）炭坑に働く少年あり、救はれない時は、其處に使はれて居る馬を殘酷に扱うた。しかるに回心したる翌日、馬が思ふやうに動かぬとき、その場に跪き祈つていうた。「主よ私はもう酷いことをする氣はありませぬ。どうか私や馬を助けて下さい」と。かくて以後、絶對に馬を酷く扱はなくなつた。

（七）忠義な軍人は、決して軍隊を害ふ如き言や、行爲をしない。反つて其の主義、指導者及び戰友の側に固く立つ。

（八）軍人は全部、救世軍に屬し、軍隊は又、その軍人のものである。それ故、軍人のなすべき務の一つは、この軍隊を支へることである。更にまた、軍隊の働は、神の御仕事である。それ故、神を助け奉り、その務を果すは軍人の喜である。（毎週の獻金、克己週間の獻金や基金につき語れ。また年長生徒のためには、歩合獻金の主義に關し、簡單に說明するもよいであらう。）

（九）（本章答一一を繰返せ）

（一〇）「救はんため救はれたり、」とは救世軍人の標語である。眞の軍人は靈魂を愛す。そして彼らの救はるる爲には、何でもする用意があり、かつ救はれた場合には、喜ぶのである。

一三、なぜ救世軍人は、世俗を避けねばなりませぬか。

救世軍人は世俗を避けねばなりませぬ。なぜならば、聖書には神の民たる者は、世俗から離れよと敎へてあり、また之は誘惑と罪とに陷らせるからです。

世俗的精神を有する人は、まづ第一に時間、金錢、思想、力などを徒費し、歡樂を求め、富まんことを欲し、身を飾るのである。（敷衍せよ）そして神と隣人とに對する職分を怠る。眞の救世軍人間にては、「己を喜ばせず、」とのイエスの精神があり、世俗を愛する精神を排除する故、その樂しみや、流行その他を要めない。彼らの心を引くところは、もつと崇高なものである。（例）大きな事務所に勤める一救世軍人があつた。彼は賭事の仲間に加はれと誘はれたが拒絶した。皆から「意氣地なし」と笑はれたが、しかし彼は離れて一緒にはならなかつた。「汝ら彼らの中より出で、之を離れよ……さらば我なんぢらを受けん」（ヨリ後六・一七）（またヨハ壹二・五）

一四、なぜ救世軍人は、酒類をのんではなりませぬか。

救世軍人は酒類を飲んではなりませぬ。なぜなら、酒は健康を害ね、巧な仕事が出來ぬやうになし、遂には貧乏、惡、悲慘、病氣、早死及び永遠の亡びに至らせるからです。

一五、なぜ救世軍人は、煙草をすうてはなりませぬか。

救世軍人は、煙草をすうてはなりませぬ。なぜなら、之は汚くて健康を害し、無駄で利己的な事だからです。煙草をすふ軍人は、軍隊で何の役にもつくことが出來ませぬ。

銘酊せしむる飲料やタバコは、兩方共ひどい毒を含む。前者のはアルコールであり、砒素及び阿片と共に毒物である。タバコにはニコチンがあり、人間の組織を害する率が甚だ高い。

今日の醫師は大低、アルコール性飲料の身體に害あるを認める。雇主は絶對禁酒家の人々を多く雇ふやうになりつつある。なぜなら、素面の明晰な頭の男女が最上の仕事をするといふ事を知つて居るからである。運動家は又、通例、その練習の時には、酒と煙草とを用ひない。

（例）有名な極地探險家は次の如く書いてゐる。「私は他の船員や役員の誰よりも、二十歳も老年である。しかし酒と煙草とを使用する彼らの誰よりも強く寒氣に對抗することが出來る。私は絶對の禁酒禁煙家である。禁酒禁煙の價値の大なるを、どうしても認めねばならぬ證據は、私共が船を見棄て酒類を一切後にのこさねばならぬといふ破目に至つた時、最も明白に示された。即ち飲むものは水ばかりといふ時、如何に強く、否、以上によく働き得たかといふ事は、實に素晴しい事であつた」と。救世軍は世界最大の禁酒團體の一つである。そして喜ばしい事は、その軍人中に、曾ては酒を飲んだが、今は禁酒して素面を以て神を畏れ、喜んで奉仕してゐる者の存在することである。

一六、救世軍人が戰はねばならぬ、五つの惡とは何々ですか。

救世軍人の戰はねばならぬ五つの惡事とは次の通りです。

一、有害な讀物。

二、汚れた言と行爲。

三、賭事。

四、酒を飲むこと。

五、安息日を破ること。

（一）常識を具へた人は、己が身體中に毒の浸入をさせない。さり乍ら殘念なことに、多くの青年は、有毒の讀物をよみ、その心に毒の入るのを平氣でゐる。惡しき讀物は、屢々人の心に不滿足と、有禍な人々を妬む精神とを起さしめる。また日中でも惡を夢み、職分を怠らしめ、眞面目な仕事を嫌がる因となる。その上、汚れた思想と行爲との原因となり、眞の男子又は婦人たる事に對する、惡しき觀念を有たせる。更に善良にして、人格を向上せしむる讀物を嫌がらせるのである。（例）形務所にゐる一囚人がいうた。「私の生涯は、少年の時に讀んだ書物の感化により、斯の如く駄目になつた」と。

（二——五）（第十章答一四——一六、二四、二五、二八及び本章の答一四を思起せ）

（教訓）諫邏、忠實、かつ勇氣あるキリストの精兵となるに、助となる書を讀め。

一七、救世軍人が受ける特權の、幾つかを云うて下さい。

救世軍人の受くる特權は、次の八つてす。

一、單獨の祈。

二、聖書を讀むこと。

三、救主を證すること。

四、救世軍の集會に出席すること。

五、神々しき戰友との交際。

六、救世軍の書物を讀むこと。

七、救世軍の制服や徽章をつける事。

八、他人を救ふため戰ふこと。

（一、二）（第八章答四、五及び第九章答一五、一六を思起せ）

（三、四）（之は本章答一八、一九を見よ）

（五）救世軍は一大家族の如きものである。之に屬する者は何れも皆、互に助け合ふを喜び、かつ興味を有つてゐる。

（六）救世軍の書物は、淸きもので人を向上せしめる。之は救と聖潔に至る道を敎へる。また聖き生活をもて歩み、神に奉仕した男女の事を傳へる。（例を示せ）また救靈上、目覺しき出來事を記し、今日、世界各地にて起りつつある回心の事實と、軍隊の働とを報じてゐる。（「ときのこゑ」や「戰士」その他、軍隊の出版物の目次など、簡單に述べるなら、更に興味を起さるであらう。）

（八）（本章答一二の一〇を思起せ）

一八、救世軍人は、何時どこで救主を證すべきですか。

救世軍人は集會でも、その他どこでも、救主が自分に爲し給うた所、及び現在なしつつ居給ふ所を證する用意が、常に出來て居らねばなりませぬ。

一九、私共は集會で、どうせねばなりませぬか。

集會に遲れぬやう出席し、集へる人々のため祈り、お話を注意深くきき、心から歌ひ、機會のある度に助をなし、誰かを救主に導くよう努めねばなりませぬ。

證するとか、證言を立てるとかいふのは、自分が實際に經驗した所を語る事である。その事については、十分確實であらねばならぬ。それ故、「斯々希ふ」とか「さう思ふ」といふのではいけない。疑もなく承知して居る事であらねばならぬ。（例）火事のとき、もゆるビルデンクから救はれた少年は、消防夫の腕、勇氣、力を實際に知つてゐる。

公開でも、私にしても、イエスが已に爲し給へる所や、なし給ひつつある事を證するは、

（一）私共の救主を崇めること。

（二）已が經驗を强めること。

（三）同じ惠を求ある他の人々を勵ますことである。

アンデレが「われらメシヤに遇へり」と證した結果、ペテロはイエスの御許へ來たのである。（ヨハ一・四一、

四二）

證言は次の如き態度でせねばならぬ。

（一）考深くなぜ。單にアウムの如く、他人から聞いた事を繰返したり、又は實際その意味なく、不注意に、「救はれて感謝です。」などいうてはならぬ。

（二）眞實であれ。實際の自分以上、よく見せたり、思はれたりしよう等と、考へてはならぬ。

（三）謙遜なれ。一切の榮光をイエスに歸せよ。

（四）喜を以て。神の御前に感謝の心をもて語れ。

二〇、なぜ救世軍人は、制服や徽章をつけるべきですか。

救世軍人が制服や徽章をつけるのは、キリストを證し、多くの誘惑から自分を救ひ、他人を助ける機會を與へ、他の戰友に判らせ、また會ふ人毎に神樣の救を思ひ出させる爲です。

巡査、看護婦、郵便配達夫その他、制服を着用してゐる者は、その特別の職務を示すものである。救世軍制服を着用する者は、人々に「私はイエスの側に立つてゐる。彼は私の罪を赦し給うた。私は今、彼を喜ばせ、また他の人々を助くるため生きてゐる。」ことを示すものである。困難に際すると、人々は時々制服の救世軍人に助を求める。（例）或時、一少女が貧民窟にゐた女士官の所へ走り來り、「救世軍のをばさん、母さんの所へ來て下さい。大變惡いのですから」と。それで彼女は其の家を訪れ、必要な世話をしてやつた。

制服を以て單に日曜日に用ひる「最上の服」と考へてはならぬ。それを着用するは、特權であり、光榮である事を知り、その制服が意味する生活の如何を知つて十分注意する所があらねばならぬ。（例）一樂隊員の母はいうた。「あれの制服は、その生活によく似合うてゐる」と。彼は家庭にありて考深く、かつ忍耐あり、而も勤勉家であつた。

二一、救世軍記號の三つは何々ですか。

救世軍記號の三つは、軍旗と紋章と敬禮とであります。

二二、軍旗の色は何を意味しますか。

軍旗の色で赤はキリストの血、黃は靈の火、青は神樣の聖き事を表してゐます。

二三、救世軍紋章の各部は何を意味しますか。

救世軍紋章の丸い形の太陽は、聖靈の光と火とを示し、十文字はイエスの十字架、Sの字は救、劍は神樣と靈魂の救に於ける戰爭、彈丸は救の眞理、冠は終まで忠實なる凡ての軍人に、神が與へ給ふ榮光の冠を表します。

二四、救世軍の敬禮は、どうしますか。

救世軍の敬禮は、右の手を擧げ、人差指で天をさし、上官や戰友への敬意と、挨拶とを示します。この敬禮は互に天國へ進む道伴なることを表すものです。

救世軍々旗は、「基督教傳道會」が「救世軍」と改稱された年に、創立者によつて制定されたものであり、（第十三章一を見よ）それ以來、一度も變更されて居らぬ。その標語は「血と火」で、旗の中央なる星の上に記され、救世軍が特に信ずる二つ、即ちイエスの血による救（第四章答一八を見よ）と、心を潔め、能力を加へる聖靈の火とを（第五章答八を見よ）表現してゐる。この軍旗は眞の救世軍人にとつて、甚だ大切なものである。彼らのうち多くの者は、幼兒のとき軍旗の下で獻兒式をあげられた。又兵士入隊式の折には、自分の上に此の旗が、ひるがへつた。野戰や行軍のときには、之の後から進み、或は其の傍に立つた。更に他の者は、この軍旗の下に結婚の式をあげた。そして愈々他界するや、劍を横たへて永遠の休息を受くる者として、この軍旗に包まれるのである。

私共救世軍人にとり、互に出會うたとき、立止つて握手したり、その他の挨拶を交すことが、常には出來なかつたり、又は適當でないことがある。しかし此の救世軍の敬禮は、この場合に役に立つ。軍人兩者は知り合でない場合も、之を交すときには、二人を繋いで一つとする。

二五、少年兵が大人部兵士になるためには、どんな用意をせねばなりませぬか。

少年兵が大人の兵士になるべき年齡に近づいた時には、「軍令及軍律兵士の卷」と「軍中の約束」とをよく學び、改めて神樣に身を獻げ、御惠によつて神の召に適ふ者となるやう、熱心に求めねばなりままぬ。

少年兵が十五歳になれば、大人部の兵士に移されることが出來る。しかし十六歳になれば、是非とも移されねばならぬ。この移すことは、彼らの生活中、甚だ嚴肅なことである。何故なら兵士たることは、某宗教團體に加はり、集會に出席し、その財政上の援助をするといふ一會員たること、より以上に大切な意味を含んでゐるからである。大人部兵士のなす約束は、一生の間神と他人の救に對する救世軍の大戰爭にて、己が職分を受持ち、實際上戰爭するといふ事を誓ふのである。（例）醫學生は自分が將來、一箇の醫師として立てる準備を、十分注意してなすものである。その如く、少年兵は軍隊の中にあつて、一生の間つづける奉仕に適したものとなるやう、自分を用意してゐる者である。

第二編

（十歳以下の生徒用）（註、日本にては未だ分離され居らず）

（注意）本編に引用されたる括弧内（例へば二章答一）のは、前編に於て年長者のため備へられたる註解である。指導者は此の引照により、教授上のヒントと材料とを得、一層わかり易く、生徒を教へることが出來るであらう。

第一章　神

一、神様とは、どなたですか。

神様とは、賢い愛のある天の父であります。

（第八章答一四）

二、神様を見ることが出來ますか。

神様は甚だ偉く、驚くべき御方ですから、肉眼では見ることが出來ませぬ。

（二章答一、二）

私共は神を見ることが出來ぬとはいへ、彼が造り給へる驚くべきものを見ることが出來る。（例）これらのものは、神が如何に偉大なお方なるかを知るに幾分の助となるであらう。

三、神様は何處に居られますか。

神様は何處にても居られ、いつても私共のごく近くに居給ひます。

（二章答四）

四、神様は何を知つて居られますか。

神様は何でも知つて居られます。そして神様の目を逃れ得るものは、何もありませぬ。

神は星、山、海、その他の事を、よく御存知である。と同時に私共お互の事をも知り給ふ。私共が考へる事、いふこと、善をなしても、惡を行うても、或は苦しんでゐることも、困つてゐる折も、御存知である。（アカンとハガルのことを話せ。ヨシ七・一——一一、一六——二四。創二一・一四——二〇）

五、神様には何が出來ますか。

神様はお考通り何でも出來ます。それは何をする力でも有つて居給ふからです。

（二章答六、七）

私共は多くの事柄に於て、「とても出來ぬ」といふ。(例)しかし神に於ては然らず。何事でも神に出來ぬといふことはない。

六、神様は善いお方ですか。

神様は全く善い御方で、惡いことは絶對になさいませぬ。

(少年らから、善に就いての考をきけ。そして善とは、忠實、親切、忍耐、愛その他の事をも含むことを知らせよ。そして又、神は非常に善良である故、惡いことは何でも嫌ひ憎み給ふことを敎へよ。(例)潔き人は、汚いことを嫌ふ。)

七、神様は眞實で忠實なお方ですか。

神様は眞實で、忠實なお方です。これで私共は常に其の御言を信ずることが出來ます。

(例)花子が「今晩、お父さんは私に本を持つて歸つて下さる」というた。すると友達は、「どうして解りますか、」とたづねた。「それは、お父さんが約束なさつたからです。そして父さんは、いつでも約束を守られるからです」答へた。

神は聖書の中に、幾千とも知れぬ約束を、なして居給ふ。そして此らの約束に對し、神は眞實で在す。(聖書中の約束で、その或るものを繰返せ)

八、神様は造り給へる凡ての物を、愛されますか。

神様は造り給へる凡ての物を愛し、やさしく扱ひ給ひます。

(二章答一八)

九、神様は惡をなす者にも、親切ですか。

神様は罪を憎み給ひますが、その惡をなす人々を哀れと思召し、その罪を赦して、善き人にならせたいと望まれます。心を痛めて居給ふのです。そして罪人の罰せられる時が來るのを知つて、

(例)母はその子が不從順で我が儘、かつ意地張であつても、やつぱり可愛がる。引續いて愛するけれども、その横着な仕業を愛されるのではない。そして叱られて罰をうけるのを甚だ殘念がり、どうかして今一度善良で幸福な者となるやう望むのである。

一〇、神様はお一人ですか。

活ける眞の神様は、お一人しかありませぬ。

(二章答一九)

第二章　世界と私共

一、世界はどうして造られましたか。

神様が全能の力で、世界をお造りになりました。

（二章答一六）

二、どうして此の世界は、私共が「住み」うるやうになりましたか。

神様が私共人間のため、光、空氣、海、陸地、草木、動物その他の驚くべき物を造り給ひました。

神は私共の住み得るやうに、世界を造り給うたので、私共の健康、慰安、喜のため必要なる物を、一切この地上に置き給ふ。例へばお互が見るに必要な光、（眞の暗黑に住む恐怖を想像せよ）呼吸に必要な空氣など。神は裸の地を草、木、花を以て覆ひ、その中に驚くべき動物や鳥などを住はせ、お互人間の友達となし給うた。これらの物が造られた時の事を、聖書には甚だよく出來たと錄してある。（父が家族のため新しき家を建てた時のことを以て例とせよ）私共が住むため、かくも立派な世界を用意された神に、心から感謝せねばならぬ。

三、世界の用意が出來たとき、神様は何をお造りになりましたか。

世界の用意が出來たとき神様は私共の始祖アダムとエバとをお造りになりました。

神は最初、生命のない岩や海の如きものを造り給うた。次に植物を生やし之を增加せしめ給うた。（例）今度は生ける動物を造り給うた。（例）最後に最上の生ける人間を造り、彼らを既に用意した美しき世界に住はせ給うたのである。（例）梅子は人形と遊ぶことが大好である。けれども鍋を買うた時、その方を一方このんだ。けれども赤坊の妹が生れたとき、その子を一番愛するやうになつた。

四、私共は誰でも皆、始祖アダム、エバに屬する大家族の一人ですか。

世界中の人は誰でも皆、始祖アダム、エバを先祖とする大家族に屬してゐます。

この世界には皮膚の色が違つた人々が住んでゐる。或者はニグロの如く眞黑で、他の者は日本人や支那人の如く黃色である。またインデアンの如く茶褐色の者もあり、さうかと思ふと、英國、オーストラリヤその他多くの國々の人のやうに白色もある。しかし凡ては神が造り給うたもので、みんな同じ家族に屬してゐる。それ故、互に愛し、親切を盡さねばならぬ。（例）「少年兵」に、白色と黑色の二少年の畫をかかげ、その下に「私共は互に相愛してゐます。あなたも愛しますか。」と書いてあつた。

五、神様はなぜ私共を、お造りになりましたか。

神様は、私共が神様を愛し、これに事へ、そして天國にて、御一緒に住むものとなるため、私共をお造りになりました。

（一章答一）

六、私共は誰に肖せて、造られましたか。

私共は神様に肖せて造られました。

（例）一郎に關して、友達の一人が「彼はお父さんそつくりだ」というとき、父の如く身體が大で、强くて、賢いといふ意味ではなく、その樣子や振舞が似てゐるとの事である。

神は人間の始祖を造り給ふ前に、「我らに象りて……人を造り、」と仰せ給うたが、その如く造られた。神は私共より遙にすつと偉大で賢い御方なれど、私共のどこかに、神に似たところがある。例へば、考へたり語つたり、善なり惡なりを選んだり出來るは、その點である。

七、私共には體がある如く、靈魂がありますか。

私共にはその體がある如く、靈魂もあります。

私共の肉體は、驚く程の出來榮えで、美しいものである。見ることも、聞くことも出來、また味ひ、感じ觸ることも出來る。（數衍）その凡ての部分は、相互に關聯し、助け合うてゐる。（例）心臟は血を送り出し、肺は呼吸するに適し、腦は各種の命令を出して、各部を活動せしめてゐる。さり乍ら此等肉體の各部に遙か優つて重要な靈魂が、神から各自に賦與されてゐる。この事に關しては、來週學ぶことになつてゐる。

八、私共の靈魂とは、何のことですか。

私共の靈魂とは私共の衷にありて、物を考へ、感じ、善惡を選び、かつ神樣を知つて、之を愛するところのものであります。

（一章答二）

九、なぜ靈魂は、肉體より甚だ大切なのですか。

靈魂が肉體より、甚だ大切なわけは、この肉體が亡びた後まで、靈魂は生きのびるものだからです。

この點が、私共の神に肖せて造られた事を、示す今一つの證據であり、私共は永遠に生きるべき靈魂を有つてゐる。（指導者は、生徒達に次の事を認識させる爲に努力せねばならぬ。即ち各自が誰も殺すことの出來ない活ける靈魂を有し、神を知り、之と話をなし、かつ善惡いづれなりとも、選び得るといふ事を納得させねばならぬ）

一〇、なぜ私共は、この體を大切にせねばなりませぬか。

私共の體は神樣から與へられたものですから、出來るだけ健かに、かつ强くせねばなりませぬ。

私共の肉體は、神から與へられたる賜物で、貴き寶である。時來らば神は特に爲すべき仕事を命じ給ふ。しか

し若し其の肉體が弱く、病氣であるなら、その仕事をすることが出來ぬ。（生徒達に、肉體の健康を、どうすれば、保てるかにつき尋れよ）私共の肉體を惡に用ひる如きことをしてはならぬ。例へば、その目で惡しき畫を見、その耳で不親切な言をきき、その舌で惡しき言を語り、また此の手で自分の所有に屬せぬ物を盜んではならぬ。

一一、靈魂の爲には、どんな注意を拂はねばなりませぬか。

私共は此の靈魂のために、先づ己を神樣に獻げ、救はれて善良にならん事を願ひ、また日に日に神を喜ばせるため努めねばなりませぬ。

靈魂はとても大切であるから、神の御守を要し、私共としては、之に深く注意を拂はねばならぬ。若し私共が此の答に錄されたる所を盡すなら、（繰返せ）神は靈魂を保護し、之を害ふ一切のものから守り給うであらう。

第三章　罪

一、神樣がアダムとエバとを造り給へるとき、二人は何處に住みましたか。

神樣がアダムとエバとに、美しきエデンの園を與へ、住ましめ給ひました。

この園は公園のやうなものであつたに相違ない。柔い草、清い流、立派な果實、その他の樹木あり、食料として野菜や胡桃や果物があり、美しくて香の高い花も、他に害を及さぬ、よく馴れたる動物があちこち歩き廻つたり、休んだりしてゐたであらう。このよき所へ、神がアダムとエバとを住ましめ給うた。その上、之を世話すべき仕事を與へて樂しましめられたが、彼らは疲れを知らず、苦痛を感じたことがなかつた。何と神は、彼らに親切で在した事か。

二、神樣はアダムとエバとを、潔くて善い人に造り給ひましたか。

神樣はアダムとエバとを、罪のない潔くて善い人に、造り給ひました。

私共は凡て潔くて、汚れなきものを好む。時々、雪が降つた後、その光る眞白なのを見て「まあ美しいこと」といふ。神は御自身に聖なる御方であり、かつ潔きことを好み給ふ。そしてアダムとエバとを、何らの罪もない、御自身の如く聖きものに造り給うた。

三、罪とは何ですか。

罪は惡と知りつつ行ふこと、又は正しい事と承知しながら行はぬことであります。

（三章答二）

四、この世界に、どうして罪が入つて來ましたか。

アダムとエバとが、神樣から食べてはならぬと言ひつけられて居た木の實を食べ、

不従順なことをした時から、罪がこの世界に入つて來ました。

（創三・一――六にある墮落の話を讀め）神はアダムとエバとに、唯一つだけ「してはならぬ。」といふことを定め給うた。この定めを守ることは、彼らにとつて左程困難なことではなかつた。他の事は何でも自由に出來たのであるから。

五、アダムとエバとを、罪に誘うたのは誰ですか。

アダムとエバとを罪に誘うたのは、蛇の形になつた惡魔でした。

エバが罪を犯すに至つたのは、一時的ではなかつた。まづ蛇の言ふことに耳をかたむけ、次に果物を見て欲しく思ひ、今度は之を取つて食べ、最後にアダムに與へるに至つた。私共は惡に誘はれた時、最初に於て「否」といはればならぬ。（例）太郎は一婦人が五十錢銀貨を落したのを見た。その心に「拾うて、ふところへ入れよ、」と囁く者があつた。しかし彼は此の誘惑にかからないで、婦人に追ひかけていうた。「これは貴女のです。私は落ちたところを見ました」と。

六、アダムとエバとが、罪を犯した時、何事が起りましたか。

神樣が心を痛め給ひました。そしてアダムとエバとを、園から追出されました。その結果、二人は悲しみ、苦しみ、最後に死にました。

（三章答四）

七、アダムとエバとが、不從順をした結果、この世界はどんなに變りましたか。

アダムとエバとの不從順の結果、罪と、悲しみと、死とが此の世界に入つて來ました。

もし此の世界に罪が、入つて來なかつたなら、どんなに善い世界であつたらうか。（敷衍）私共の知られねばならぬことは、私共が罪を犯す事により、今一つ此の世界に不幸の原因を齎してゐるといふ事である。

八、アダムとエバとの罪は、私共凡ての者が罪深い者となる原因となりましたか。

この始祖が罪深い者になつた結果、私共は凡て罪深い者として、生れて來ました。

（三章答六）

九、罪深い心とは何ですか。

罪深い心とは、惡をなす傾のある心で、神樣の事よりは、自分勝手な事を、したがる心の事です。

私共の心が罪深いものとなつてゐる故、正しい事よりは、むしろ惡をなし易いのである。親達は時々次のやうにいふ。「子供らは、とても我儘で仕方がない。彼らは年中、自分勝手ばかりしたがる」と。少年や少女たちは、

互に次の如くいふ。「私は自分の好きな事をします」と。そして彼の好きな事とは、時に惡い事である。さり乍らイエスは斯る罪深き心を變化させ、神を喜ばせる者にして下さるといふは、實に有難いことである。

一〇、罪深き心は、屢々何の方向に出て來ますか。

罪深き心は、しばしば罪の言と行爲となつて出て來ます。

(例)柱時計が遲れて居るため、次郎は學校に遲れた。食事の時、「母さん、時計の針を進めて置いて下さい、」といふた。母は其の如くしたが、夕方になると又、その時計は駄目になつた。そこで次郎は今一度いうた。「ああ解つた。內部の機械が狂うてゐるので、針が間違つた所を指すのだ」と。

不正直な心の少年は、盜んだり、だましたりし易く、又、不眞實な心の少女は、眞でない事を云ふものである。

一一、なぜ神樣は、罪に對して怒り給ふのですか。

神樣が罪に對して怒り給ふのは、罪を犯すとは、私共の益となるため定め給へる規則を破ることだからです。

(三章答九)

一二、罪を犯せば、どんな悲しい結果が來ますか。

罪は赦されない限り、いつても不幸と罰とを招きます。

罪を犯す人は、絕對に幸福とはなり得ない。大低の場合、見付つては大變と、慢れつつ暮す。(例)三郎は母が抽出にしまつて置いた給料の中から、お金を盜んだ。その週間中、母が金の勘定をするのではないかと慢れてゐた。土曜日になつて、母は三郎が盜んだ事を發見した。彼はその日、父と仕事に出かける代りに、一日中寢床にゐたといふ。

神自ら罪と爭ひ給ふ。そして私共と共に惱み給ふ。それ故、私共は罪の罰と、不幸とから脫し得ない。

一三、他の人を惡に誘ふは罪ですか。

他の人を惡に誘ふは、實に惡い罪です。

(三章答一四)

第四章　神の子イエス

一、神樣は罪人を愛し給ひますか。

神樣は罪人を愛し、これを救はんとし望み給ひます。

(四章答二)

二、神樣は罪人を救ふために、何をなさいましたか。

神様は罪人を救ふため、その獨子を賜ひました。

神は凡ての人が善良で幸福なるやうにと願ひ給うた。しかし罪が此のよき御計畫を駄目にした。(後編三章答四及び八を思起せ)けれども神は愛の深い御方である故、人間を見すてず、「もう罪人を顧みない、」などとは仰せ給はなかつた。そして獨子を與へ給うて、罪人が今一度善良で幸福なる者となれるやう道を開き給うた。

三、神様の御子は、罪人を救ふため、どうせられましたか。

神様の御子は罪人を救ふため天より降り、赤坊として生れ、この世に生活し、十字架の上に死に給ひました。

(四章答五)

四、神様の御子が、此の世に來り給うたとき、何といふ名をつけられ給ひましたか。

神様の御子が、この世に來り給うたとき、イエスといふ名をつけられ給ひました。

(家で弟なり妹なりが生れた時、その名をつけられる事を例にせよ。そしてイエスが生れ給ふ前に、天使がヨセフの所に來り、神の子につけるべき名を知らせた事を語れ。(マタ一・二〇、二一)

五、「イエス」といふ御名の意味は何ですか。

「イエス」といふのは、「救主」といふ意味です。

(四章答六、七)

(今日も人の名が、特別の意味を、表してゐる事を示すがよい。例へばアーサーとは高貴の意。チャーレスは强いこと、男らしいこと。ジョンは神の賜。アミイは愛せられる者。カサリンは潔いこと。マーガレットは眞珠。しかし之等の名といへども、イエスの御名ほど美しいものではない。)

六、イエス様は、神様であり、また人ですか。

まことに驚くべき事ですが、イエス様は神様でもあり、また眞の人でもあります。

(四章答八、九、一〇)

七、イエス様は、この世の生活を、いかに送られましたか。

イエス様は約三十年の間、その愛する家の方々と共に貧しい家に住み、その後、外にて教をのべ、病人を醫し、善事をなされました。

(四章答一二)

八、イエス様は誘はれて、罪を犯されましたか。

イエス様は私共と同じく、度々誘はれ給うたが、一度も罪を犯されませぬでした。

イエスは惡寃から誘はれ給へる度毎に、「否」と答へ給うた。彼は熱心に天父を愛し給うたから、惡寃には其の耳を傾け給はなかつた。（イエスの野に於ける試煉を、ごく簡單に語れ。マタ四・一――一一）

九、イエス様は此の生涯を、どんなにして終られましたか。

イエス機は根性の惡い人々に苛められ、木の十字架につけられて、死に給ひました。

（恭々しい心をもつて、十字架の話をせよ。ルカ二三・三三――三八、四四――四六）

一〇、私共がイエス様の、苦しみと死とによつて、救はれるとは、どういふ意味ですか。

イエス様は十字架上で、私共各人の罪のため苦しみ、そして死んで下さつたから、眞心より己の罪を悲しみ、彼を信じて依賴む者の罪を、神様が赦して下さるからです。

（四章答一六）

一一、イエス様が死んで葬られ給うて後、どんな驚くべき事が起りましたか。

イエス様が死んで葬られ給うて後、三日目に彼はもう一度生きかへり、度々その愛する者達に現れ、その後、天に昇り給ひました。

（復活の朝に於けるマグダラのマリヤの話を語れ。ヨハ二〇・一――一八）

一二、イエス様は天に歸り給うて後、私共のために何をなさいましたか。

イエス様は天に歸り給うて後、私共の助として、聖靈を送り給ひました。

（四章答二〇）

（ペンテコステの日に起りし出來事を語れ。使徒二・一――一八、三六――四〇）

一三、如何なるわけで、イエス様は天より降り、私共のため苦しみ、かつ死に給うたのですか。

イエス様は天から降り、私共のため苦しみ、かつ死んで下さつたのは、神様の大なる愛によるものです。

（例）或所に火事があり、一番上の部屋に小兒が寢てゐた。見てゐた者は「あの兒は、とても助からぬ」といつた。しかし母は消防夫の止めるのもきかないで、凡てをおしのけて火焔をきりぬけ、子供を抱くやショールを頭

から被らせ、漸くのことに助け出したのではあつたが、殘念にも母は其のため燒け死んだ。この場合、子供のため喜んで苦しみをなめさせたものは、母の愛であつた。

一四、イエス様は今日、地上に住んでゐる人々の事を、どんなに考へて居給ひますか。

イエス様は今日の私共すべてを、その地上に在した時、人々を愛し給うたと同樣に、やさしく愛し給ひます。

或る人々は甚だ變り易い。(例をあげよ)しかしイエスは絶對に變り給はぬ。聖書を讀むなら、イエスは當時の人々を、どんなに愛し、いたはり、赦し給うたかを知る。その同じ聖書は、彼が、「昨日も今日も永遠までも變り給ふことなき、」御方であると敎してゐる。(ヘブ一三・八)

一五、イエス様は私共が、試煉や困難にあるとき、注意を拂うて下さいますか。

イエス様は私共の試煉や困難を全部御存知てあり、私共の方て願ふなら、助けて下さいます。

少年少女たちの經驗する困難は、あまり少くてイエスの御世話になるには、足らぬといふ事はない。(例をあげよ)大人は大層多忙なため、子供らの困難をかへりみてゐる暇がないかも知れぬ。しかしイエスは「子供らの友」でゐます故、いつでも彼の所へゆき、助を求めることが出來る。

一六、イエス様は私共が誘惑にかかるを知り、助を與へて之に勝たせて下さいますか。

イエス様は私共の誘惑をよく知つて居給ひます。そして私共が願ふなら、助を與へて勝たせて下さいます。

イエスは曾て地上に在せしころ、一少年であり、その兄弟姉妹と一緒に暮し、友人と共に岡で遊び、學校で學び給うたが、幾度も惡をなすべき誘惑に遭はれたに相違ない。それで彼は、今日の少年や少女たちの出遭ふ誘惑をよく御承知である。そして何時でも助けて、之に勝たせようと待つて居給ふ。

一七、イエス様は凡ての子供達を愛し、彼らが御許に來るべきを望んで、どんな御言を語られましたか。

イエス様は、次の如く仰せられました。「幼兒らの我に來るを許して止むな、神の國は斯の如き者の國なり」と。(ルカ一八・一六)

この御言を讀めば、イエスは男女に拘らず、ほんの小い時から、彼らがその御許に來るを望んで居給ふ事がわかる。(例)エバンゼリン・ブース大將は、まだほんの少女のとき、クリスマスの朝、母の寢臺の傍で救はれた。

その日は自分の誕生日でもあつた。

一八、イエス様は、どんな人々が本當に惠まれて、幸福だと仰せられましたか。

イエス様は次の如く仰せられました。

「幸福なるかな、心の貧しきもの、天國はその人のものなり。幸福なるかな、悲しむ者、その人は慰められん。幸福なるかな、柔和なる者、その人は地を嗣がん。幸福なるかな、義に飢え渇く者、その人は飽くことを得ん。幸福なるかな、憐憫ある者、その人は憐憫を得ん。幸福なるかな、心の清き者、その人は神を見ん。幸福なるかな、平和ならしむる者、その人は神の子と稱へられん。幸福なるかな、義のために責められたる者、天國はその人のものなり。我が爲に人なんぢらを罵り、また責め、詐りて各樣の惡しきことを言ふときは、汝らは幸福なり。喜び喜び天にて汝の報は大なり。汝らより前にありし豫言者等をも斯く責めたりき」（マタ五・三——一二）

（四章答一五）

第五章　救

一、神樣が私共を救ひ給ふとき、どんな大きな御業をなし給ひますか。

神樣が私共を救ひ給ふとき、過去の罪を一切救し給ひます。

（六章答一、二）

二、神樣が私共の罪を赦し給うたとき、この他にどんな事をして下さいますか。

神樣が私共の罪を赦し給ふと同時に、新な心を與へ、從順な神樣の子供として下さいます。

三、新な心を與へられるとは、どういふ事ですか。

新な心を與へられるとは、神樣が其の心を全く變へて下さる結果、罪を憎むやうになり、一方、神樣と善とを愛し、神樣を喜ばせようと、勵むことをいふのです。

（六章答六、七）

四、私共が神様の従順な子供となつたとき、どんな變化がありますか。

私共が神様の従順な子供となつたとき、神様は特別な意味で、私共の天の父となり、助と保護とを與へて下さいます。

（六章答八）

五、私共は救はれるため、どうせねばなりませぬか。

私共は救はれるため、心から己が惡を行つたことを悲しみ、一方、イエス様が救ひ、助けて下さると、信じねばなりませぬ。

（六章答一三）

私共は自分で己を救ふことも、善くすることも出來ないが、それにも拘らず、救はれるためには、イエスの御前にて、なすべき事がある。（答五を繰返せ）（例）私共が汽車旅行せんとするや、切符を買はねばならぬ。しかし私共を其の目的地に連れて行つてくれるものは汽車である。

六、私共が心から罪を悲しむ事を示す徵は何ですか。

私共が心から罪を悲しむなら、自分が惡であると思うてゐる事を止め、再び同じ惡をしないと決心するものです。

（例）太吉は隣の少年の品盗み見て、己が問題を書いたが、それが見つかつて罰せられた。彼は此の事に關し、甚だ殘念に思ひ悲しんだが、翌日になると、また同樣のことをやつた。それで彼は本當に心から、惡事を悲しんでゐないことを表した。

七、私共が心から、罪を悲しむ事を示す第二の徵は何ですか。

私共が心から罪を悲しむ事を示す第二の徵は、己が罪を神樣に告白し、その救を求めることです。

（六章答一一）

この告白は同時に、自分がなしたる惡事の、相手の人にもせねばならぬ。（例）一義勇團員あり、團費を自分が費消して置きながら、分隊長には落したというた。後に悔改めて救を受けた時には、神に己が罪を告白すると同時に又、分隊にも之を告げねばならぬ。

八、私共が心から罪を悲しむ事の第三の徵は何ですか。

私共が心から罪を悲しむ事の第三の徵は、自分を神樣に獻げることです。斯すれば私共は神樣に從ひ、彼を喜ばせ奉ることを知り得るでせう。

（タルソのサウロが回心した時の物語をせよ。使九・一――二〇、殊に、主よ汝は我に何をなさしめんとし給ふや、との言を強調せよ）

九、イエス様が私共を救ひ給ふを信ずるとは、どういふ意味ですか。

イエス様が私共を救ひ給ふを信ずるとは、彼が私共の爲に死に給うた事により、神様が私共の罪を赦し、その從順な子供として下さるのを信ずる事です。

（六章答一二）

一〇、私共はどうして自分の救はれた事を知ることが出來ますか。

私共が救はれた時には、聖靈が心に救はれた事を敎へ、愛する力と、正しきを行ふ新な力を授け給ひます。

（六章答一五）

一一、若し私共が本當に救はれ、神様を愛し始めるなら、どんな結果となりますか。

若し私共が本當に救はれ、神様を愛するなら、此の世にあつては有用、かつ幸福であり、天國では神様と御一緒に暮す者となります。

若し私共が善良なら幸福である、よし甚だ年少であるとは雖も、イエスを喜ばれる事は出來る。イエスは仰せ給うた。若し私共が他の人々に對して親切するなら、それは彼に事へたことであり、彼に盡し奉つたと同樣であるとせ。（マルコ九・四一は示されたるイエスの御言を告げよ。そして少年少女達に、どんな方法で盡せるかを語らせよ）

一二、若し私共が神様を愛せず、之に事へ奉らぬなら、どんな事になりますか。

若し私共が神様を愛し、之に事へぬなら、この世にあつて益々罪深く不幸になり、最後には、神様と善人とから離れて、棄てられます。

誰でも一氣に惡人となるのではない。屢々幼い時に横着であつたのが原因で惡くなる。例へば、ずるけたり、果物を盜んだりその他の事が基となる。或る場合には、その横着なため、家を逐出され、その扉を閉められてしまふ。之は大層かなしい事である。しかし私共を愛し給へる神と、善人とから永久に離されてしまふことは、更に悲しい事でなくてはならぬ。

第六章　神を喜ばす生涯

一、救はれた人も誘惑に遭ひますか。

惡魔はいつても、救はれた人に、惡をさせようと誘惑します。

（例）雪子はゲームのとき、いつも友達を偽いてゐたが、決心日に悔改め、その身を神に獻げた。月曜日になつて、遊戯場に居ると、また友達を偽かんとする誘惑に遭うた。彼女は誘惑のやつて來ることを、止める事は出來なかつた。しかし之に負けなければ、罪ではないのである。

二、私共は誘惑に遭うたとき、どうせねばなりませぬか。

私共は誘惑に遭つた時、神様の助を求め、直に惡である事に「否」といひきらねばなりませぬ。

（前週の例を思出させ、その雪子が、きつぱり「いやです、私は致しませぬ。もつと善い遊をします、」といひ切るなら、勝利を得ることが出來る）

（例）一年長少年が、五郎にいうた。「おい五郎、森へ行つて煙草を喫はうではないか。誰も見てゐないから」と。五郎は笑ひながら應待する如き態度でなく、きつぱり斷つていうた。「いやだ。もう今日かぎり、君とは絶交だ」と。

三、救はれた者が、どうすれば常に善い子供として、保たれますか。

救はれた者は、神様の御力によつてのみ、善い子供として保たれます。

私共は自分の力では、すゐ分自分で努めても、いつでも善い子供となつて居ることは出來ぬ。反つて時には横着になり易いものである。例へば惡い癖に陷つたり、他の者と喧嘩したりする。それ故、私共は神の御助を求めねばならぬ。彼は何時でも助けて下さる。

四、私共は善い子供でありたいと、神様の助を求めるとき、どうせねばなりませぬか。

若し私共が善い子供でありたいと、神様の助を求めるなら、私共は神様に信頼し、また從はねばなりませぬ。

もし私共が惡い事に心を寄せ乍ら、善い子供として保たれたいと、神に助を求めるは無益であらう。それは恰も、火の中へ手を突込みながら、火傷しないやう守り給へと、神に願ふのと似てゐる。

五、神様を信頼するとは、どういふ事ですか。

神様を信頼するとは、神様が私共を愛して守り、私共が願ふとき、助を與へて下さると、信ずる事であります。

（少年少女達に、彼らが親を信頼し、その食物、保護、助その他を受ける事を擧げさせよ）

六、私共は神様に、其の願ふところを、どんなに願はねばなりませぬか。

いま神様に申上げてゐる事に、注ぐことが出來るからです。

（例）糸子の母は彼女に、「今朝お祈しましたか、」と問うた。すると糸子は、「はい。さうする筈でしたが、祈つて居る間に、梅子がボール遊びをして居るのが目につきました。そのボールは泥の中に落ちたやうでした」と。多分、糸子は目を閉ぢないで祈つてゐたから、自分の氣がさられ、何を神に申上げたか知らなかつた。

一二、神様は私共の願に、答へて下さいますか。

私共の願うた事が、お互の爲になることなら、神様はその願をきき届けて下さいます。

（例）赤坊がその母に鋏をくれとねだつた。しかし母は「傷するからいけない、」というた。三郎が復習のとき、鉛筆を求めるや、母は鉛筆を與へた。彼は喜んで働いたのである。

一三、食事の前後に祈らねばなりませぬか。

私共は食事の前か後に、食物に對する感謝の祈をせねばなりませぬ。

（八章答二三）

一四、子供に適した感謝の言をいうて下さい。

「神様よ、結構な食物を感謝いたします。イエス様によつて、私共を善い子にして下さい。」

私共はどんな感謝の祈をするも、常に目を閉ぢ、考へつつ心を込めて申上げればならぬ。一向、氣もかけないで、わけの解らぬ事を、ごちやごちや言うてはならぬ。

一五、神様に從ふとは、どういふ事ですか。

神様に從ふとは、その仰せ給ふ正しきを、行ふことであります。

正しきを行ふは、神の御意を行ふ所以であり、また神の私共に爲させんと欲し給ふ所を、爲す事である。

（例）一少年兵が、「天の使は、どんなに神の御意をなしますか、」と問うたとき、その答は次の如きであつた。「何も問返さず、すぐに喜んでします」と。その如く私共も亦、正しい事を行はればならぬ。

一六、神様は私共の行ふべき正しき事を、どうしてお知らせになりますか。

神様は私共に、聖書や、善人や、又は心に御聲をきかせて、その正しき事を教へ給ひます。

（七章答四）

私共は神様に其の願ふところを、聲をたてるなり、又は心の中なりて、祈らねばなりませぬ。

（八章答一、二、三）

七、私共は何時、祈るべきですか。

私共は其の日の初と、終とに祈らねばなりませぬ。その他、をりのある度に祈り、ことに必要なとき、又は誘惑に遭うた時、祈らねばなりませぬ。

（八章答五）

八、朝のお祈をいうて下さい。

「父なる神様、昨晩中の御守をかんしやします。今日も正しきを行ひ、あなたを喜ばせる事が、出來ますよう助けて下さい。家の人々をはじめ、助を要する人々を皆めぐんで下さい。私共みんなを善い人にして下さい。私たちのため死んで下さつたイエス様の御名によつてお願ひ申します。アーメン」

九、晩のお祈をいうて下さい。

「父なる神様、けふ一日中の御惠を、かんしや致します。何か惡かつた事があるなら、お赦し下さい。病氣や困つてゐる子供たちを惠んで下さい。私共の軍隊と共に在し、どの人にも、あなたの愛を傳へる事の出來るよう助けて下さい。今晩中、私と家の人々とを守り、あなたを愛し、お事へする事が出來るよう助けて下さい。イエス様のお取次で、お願します。アーメン」

一〇、私共は、教へられた祈の言と同様、平生の言で祈つてもよろしいか。

平生の言で祈つてよろしい。しかし教へられた祈の言も亦、助となるものです。

少年は母に何かを求めるとき、平生使ひなれてゐる言で頼む。例へば、「お母さん、御飯にして下さい」と。その如くイエスに祈ることが出來る。（例を入れよ）

一一、私共は祈のとき、なぜ目を閉ぢねどなりませぬか。

私共は祈のとき、目を閉ぢねばなりませぬ。それは圖にある事を忘れ、その心を